

ダニエル 12 章のタイムライン (時刻表)
1260 日、1290 日、1335 日に見る

警告！

「ダニエル 12 章を読み、研究しようではないか。
それは終わりの時まで、我々すべての者が
理解を必要とするであろう (shall need)
警告である」。

—エレン・ホワイト、手紙 161,1903—

マリアン・ベリー

まえがき

扇風機の修理

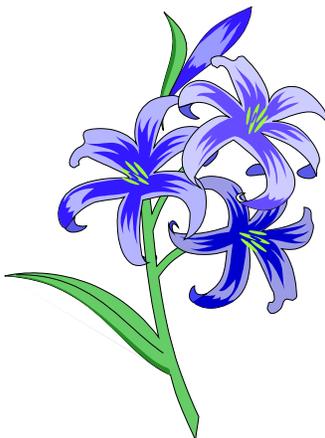
ダニエル書 12 章の研究は、羽のあちらこちらが折れ曲がっていておまけにほこりだらけの扇風機の修理のようなものである。いくつかの部品はなくなっており、ある部品は修理屋が反対に取り付けてしまっている。

ダニエル書 12 章の研究は、多大な労力を要する。ひとつひとつの部品、すなわち各定義や概念は除去され、削られ、きれいに磨かれ、もとの形にもどされねばならない。

扇風機の羽は、今のままではスイッチを入れても、がたがたしていろんなくずを飛ばすだけである。それに触れるものは、頭のとっぺんから足の先まで真っ黒に汚れてしまう。ほとんどの人はそれに触れない方がマシだと考える。だがこの扇風機は、もともと優れたパワーがあり、製作者の永久保証付きである。誰かが作業着を身にまとい、道具を手にとって作業に取り掛かることを必要としているだけである。本書の目的は、その修理作業にある。

間もなく猛暑の夏がやってくる。この古い扇風機が必要になる。きちんと修理し掃除をすれば、大いに役に立つ。そうすれば、人の心に聖霊の涼しい風を送ってくれることだろう。

本書の各章は、各部品を修理し、それをあるべき位置に置き直す試みをしている。これは長く忍耐の要る工程ではあるが、読者が楽しみながら研究を進めていかれることを筆者は希望している。作業を終えれば、スイッチを入れて涼風を楽しむことができるであろう。



マリアン・ベリー

著者の序文

「真理には、どの時代にも新しい発展があった。つまり、時代ごとに、その人々のための特別の神からの使命があった。古い真理はみな重要である。新しい真理は古い真理から切り離されたものでなく、古いものの解明である。古い真理を理解して始めて、新しい真理を悟ることができる。キリストが弟子たちにご自分の復活の真理を示して、『モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、御自身について記してある事どもを、説きあかされた』（ルカ 24:27）。真理を新たに解き明かすことによって、輝く光が古いものをいっそう輝かしくする。新しい光を拒んでなおざりにする人は、実は、古いものを持っていない。それは、彼にとって、生きた力を失ったむなし形式と化してしまうのである」キ実 105。

1844年の直前、聖書の一つの預言的なタイムライン（時間表）（ダニエル 8:14）が、すべての他の聖句に優先された。それが福音の他の要素よりいっそう重要というのではなく、その時が来たのであった。*

本書の目的は、ダニエル 12:7-13 の預言的タイムラインを明らかにすることである。なぜなら、同じ様に、それが最後の世代に語りかける時が来たので、今日それは優先されるべきことだからである。

ダニエル 8:14 の預言的タイムラインは、1840年代の調査審判の開始を警告した。本書の研究は、ダニエル 12:7-13 のタイムラインが、調査審判終了の出来事と関わっている最後の世代に警告することを示している。ダニエル 8:14 のタイムラインは、1844年に死者の調査審判が始まったことを宣言したのに対して、ダニエル 12:7-13 のタイムラインは、生きている者の調査審判を宣言している。

ダニエル 8:14 のタイムラインは、イエスの再臨の日時を知らせるものではなかった。ダニエル 12:7-13 も再臨のその日、その時を知らせるものではない。しかし、これら8章と12章のタイムラインはすべて、調査審判と恩恵期間終了に関わる諸事件についての警告である。1844年のタイムラインに関わる出来事について、預言者は次のように書いた：「人々は、自分たちの危険に目覚めなければならない。恩恵期間に関連した厳粛な出来事の準備をするために、目を覚まさなければならない」大争闘上 398。

ダニエル 12:7-13 のタイムラインは、最後の世代を教会と世界の恩恵期間終了に関わる厳粛な出来事に備えるよう奮起させるためのものである。三つのタイムラインは恩恵期間、またはキリストの再臨の日時を知らせるものではなく、それらに関係した諸事件を描写しているものである。

* ダニエル 8:14「2300日（夕と朝）」のタイムライン（時刻表）。2300日のタイムラインは457B.Cに始まり、1844年10月22日に終わった。そのタイムラインはダニエル 9:24-27に詳しく描写されている。その時の宣言は1833-1844になされた。その宣言は「大再臨運動」と呼ばれた。

「我々は、過去のメッセージと新鮮なメッセージを望む」 2RH378。

ダニエル 8:14 のタイムラインは黙示録 14:6-8、「神のさばきの時は来た」と「バビロンは倒れた」という第一、第二天使の使命の宣伝であった。ダニエル 12:7-13 のタイムラインも第一、第二天使の使命であった。しかしそれは特に黙示録 14:9-12 の第三天使の警告に強調を置いたものである。*

第三天使の使命は、「時に重点をおくもの」(初文 156)ではない。しかし、黙示録 18 章の第四天使と結ばれている第三天使の大いなる叫びは、明確な時の設定のうちに起こる諸事件と関連している。ダニエル 12:7-13 のタイムラインの研究によって解明され、明瞭にされているのがこれらの出来事である。

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」アモス書 3:7。

もしダニエル 8:14 の預言が、死んだ者のさばきが始まった 1844 年 10 月 22 日のその日を明示したなら、生ける者のさばきと調査審判の終了と関連した諸事件を、神は最後の世代に啓示されると考えるのが筋が通っているのではないだろうか？ 神は預言者たちにご自分の「秘密」を示されないだろうか。そしてそれらは我々の益のために記録され、保存されたのではないだろうか？ 預言の確実な光の導きを最も必要とするのは、最後の危機に直面する、最後の世代ではないだろうか？ 神は聖書の預言的聖句によって、彼らの時代にはっきりとした幻を与えられないだろうか？

「こうして、預言の言葉は、わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい」ペテロの第二の手紙 1:19。

「増し加えられた光がすべての偉大な預言の真理の上に照り輝くであろう。それらは義の太陽の輝かしい光の故に新鮮さと輝きをもって見られるであろう」MS 18, 1888。

* 第三天使の警告メッセージはダニエル 12:7-13 の主題である。「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる」ヨハネの黙示録 14:9,10。

目次

まえがき.....	①
著者の序文.....	②
第Ⅰ部 解釈の原則とは？.....	1
第1章 「終わり」とは？ 過去か、それとも未来か？.....	2
第2章 「字義通りのアプローチ」とは？.....	4
第3章 「解釈」とは？.....	5
第4章 「適用」とは？.....	6
第5章 「歴史主義者」とか「未来主義者」とは？.....	8
第6章 ダニエル書の「漸進的前進運動(展開)」とは？.....	9
第7章 ダニエル12章における「従来への適用への反論」とは？.....	12
第8章 「もう(預言の)時がない」とは？.....	13
第9章 「問題」とは？.....	14
第10章 「ジレンマ」とは？.....	15
第11章 「解釈上の原則」とは？.....	15
第12章 黙示録10:5,6の「文脈(前後関係)と歴史的背景」とは？.....	16
第13章 黙示録10章における「預言の時」とは？.....	17
第14章 「預言の期間」とは？.....	18
第15章 「状況的背景」とは何か？.....	19
第16章 「ダニエル8:14の焦点」とは？.....	20
第17章 「再びテストにはならない」とは？.....	21
第18章 未来における「時(タイム)とタイムライン」とは？.....	22
第19章 「1日を1年とする計算原則」とは？.....	23
第20章 イエスは何と言われるか？.....	25
第Ⅰ部のまとめ 解釈の原則とは？.....	26
第Ⅱ部 ダニエル12章の「警告」とは？.....	28
第1章 「質問」とは？.....	29
第2章 「答え」とは？.....	30
第3章 「憎むべきもの(忌むべきこと)」とは？.....	31
第4章 「荒らすもの(荒廃)」とは？.....	34
第5章 ダニエル12章の「荒らす憎むべきもの」とは？.....	36
第6章 「二重の適用」とは？.....	37

第7章	マタイ 24:15 の「第一の適用」とは何であったか？	39
第8章	マタイ 24:15 の「第二の適用」とは？	43
第9章	「警告」とは？	45
第10章	「最後のテスト」とは？	47
第11章	「獣の像」の形成とは？	48
第12章	「最終世代にとって大いなるテストとなる安息日論争」とは？	49
第13章	「生ける者の裁き」とは？	49
第14章	「ふるい」とは？	51
第15章	「神の印」とは？	53
第16章	「大いなる叫びの警告」とは？	56
第17章	「第三天使の警告メッセージ」とは？	57
第Ⅱ部のまとめ	ダニエル 12 章の「警告」とは？	58
第Ⅲ部	「1335 日」のタイムラインとは？	60
第1章	タイムラインの「先の声」とは？	61
第2章	ダニエル 12:12 の 1335 日を「開始させる事件」とは？	64
第3章	国家の「物を言う声」とは？	65
第4章	ダニエル 12:12 の「待っていて…」とは？	65
第5章	1 3 3 5 日の「さいわいです」とは？	66
第6章	「神の声」とは？	67
第Ⅲ部のまとめ	1 3 3 5 日タイムラインとは？	70
第Ⅳ部	ダニエル 12:7 の「1260 日」タイムラインとは？	72
第1章	かの亜麻布を着た人とは？	74
第2章	ダニエル 12:7 の「聖なる民」とは？	75
第3章	聖なる民を「打ち砕く力」とは？	77
第4章	聖なる民の力を打ち砕くことを成しとげる者とは？	78
第5章	ダニエル 12:7 に関する「歴史主義者の見解」とは？	80
第6章	ダニエル 12:7 の「ひと時とふた時と半時」とは？	81
第7章	「黙示録 1 3 章」は過去、それとも未来か？	83
第8章	「法王至上権 No. 2」とは？	85
第9章	1 2 6 0 日を開始し終了させる「声」とは？	86
第10章	1 2 6 0 日タイムラインを開始させる「事件」とは？	87
第11章	1 2 6 0 日タイムラインの終了となる「事件」とは？	90
第12章	「世界規模の死の法令」とは？	92
第13章	黙示録 17:12 の「一時（1 時間）」とは？	93
第14章	預言の解釈に当たっての「1 日を 1 年とする計算法」とは？	95

第15章	1335日と1260日の「関係」は？	96
第16章	「ヤコブの悩みの時」とは？	97
第17章	ダニエル12:7でみな成就する「これらの事」とは？	101
第IV部のまとめ	ダニエル12:7の「1260日」タイムラインとは？	102
第V部	ダニエル12:11の1290日の「常供」とは？	104
第1章	「常供の燔祭」とは？	107
第2章	「常供」を意味する「タミード」とは？	108
第3章	「常供」の前後関係は？	109
第4章	「常供」「タミード」「連続体」とは？	111
第5章	「タミード」すなわち「常供」で表されている「王の笏(主権)」とは？	113
第6章	「常供(タミード)」はどのようにして「取り除かれる」のか？	114
第7章	「アドベンチスト先駆者たち」とは？	117
第8章	預言者は「常供」について何と言ったか？	119
第9章	「常供」の重要性とは？	121
第V部のまとめ	ダニエル12:11に登場する1290日の「常供」とは？	124
第VI部	ダニエル12:11の「1290日タイムライン」とは？	126
第1章	「常供」の王の笏(主権)は何故取り除かれるのか？	127
第2章	1290日の始まりとなる「事件」とは？	128
第3章	ダニエル12:11の1290日のタイムラインを終わらせる「出来事」とは？	129
第4章	「バビロンは倒れた」とは？	130
第5章	黙示録18章の「一瞬(1時間)」とは？	132
第6章	「30日の差」とは？	133
第7章	黙示録8:1の「半時間ばかりの静けさ」とは？	134
第8章	第六、第七の災いの「ドラマ」とは？	135
第9章	「いなずまと雷鳴」とは？	136
第VI部のまとめ	ダニエル12:11の1290日タイムラインとは？	138
付録A	黙示録14章と18章の七天使の使命とは？	144
付録B	常供	154
	初代文集の、1844年の「常供」の「正しい見解」について	162
	ホワイト刊行協会からの手紙	
	神のマスタープラン(過去と未来)における預言の立場	164
	サタンはどのように「常供」(力と位と権威の笏)を奪おうと試みるのか？	165

付録C	ダニエル 12 章に関する追加説明.....	173
	ダニエル 8:16 の水の上の人.....	174
	ダニエル 11 章と 12 章の比較表.....	175
付録D	NELLIE HICKEY LETTER FROM WHITE ESTATE.....	176
	FROM CHART ON DAILY #1.....	177
	FROM CHART ON DAILY #2.....	178
	英文資料案内.....	179

エレン・G・ホワイトの書物のリスト

4-7BC	SDA 聖書注解、四巻・・・七巻(英文)(本書で使用)
	1BC—創世記～申命記
	2BC—ヨシュア～列王記下
	3BC—歴代上～雅歌書
	4BC—イザヤ～マラキ
	5BC—マタイ～ヨハネ
	6BC—使徒行伝～エペソ
	7BC—ピリピ～黙示録
キ実	キリストの実物教訓
I～Ⅲ希望	各時代の希望 第Ⅰ巻～Ⅲ巻
初代文集	初代文集
EV	伝道(英文)
大争闘	各時代の争闘
MAR	Maranatha(マラナタ-英文)
祝福	祝福の山
SM	セレクトッド メッセージ
RH	レビュー・アンド・ヘラルド(英文)
1-5 T	Testimonies, 1～5(教会への証-英文)
1-3 G	Spiritual Gifts, 1～3(霊の賜物-英文)
手紙	英文
国と指導者	国と指導者

※ 引用文の中に[]が挿入されている場合は、この本の著者によるもの。



第 I 部

解釈の原則とは？

ダニエル 12 章 7-13 節にある三つのタイムラインを理解するには、前もっていくつかの語句を定義し、ある特定の質問に答えなければならない。それらの質問とは下記のようなものである：

1. 「終わり」とは何なのか？ 過去か、それとも未来か？
2. ダニエル 12 章を「字義通り解釈する」とは？
3. 「解釈」とは？
4. 「適用」とは？
5. 「歴史主義」とか「未来主義」とは？
6. ダニエル書の「漸進的前進運動」とは？
7. ダニエル 12 章における「従来への適用への反論」とは？
8. 「もう(預言の)時がない」とは？
9. 「問題」とは？
10. 「ジレンマ」とは？
11. 「解釈上の原則」とは？
12. 黙示録 10 章 5、6 節の「文脈（前後関係）と歴史的背景」とは？
13. 黙示録 10 章の「預言の時」とは？
14. 「預言の期間」とは？
15. 「状況的背景」とは？
16. 「ダニエル 8 章 14 節の焦点」とは？
17. 「再びテストにはならない」とは？
18. 未来における「時（タイム）とタイムライン」とは？
19. 「1 日を 1 年とする計算原則」とは？
20. イエスは何と言われるか？



第 1 章

「終わり」とは？ 過去か、それとも未来か？

「ダニエル書 12 章を読み、研究しようではないか。それは終わりの時までには、我々すべての者が理解を必要とするであろう警告である」 エレン・G・ホワイト、手紙 161、1903 年。

上の引用文は 1903 年に書かれたが、過去について言及しているものではない。「終わりの時までには、我々すべての者が理解を必要とするであろう[未来形]警告である」という部分に着目されたい。この引用文は、ダニエル 12 章に最終時代という舞台設定をしている。最終時代の舞台設定とは、イエスがおいでになるとき地上に生存する**最後の世代に関わるものである**。

ダニエル 12 章には、時の終わりについて七度にわたり、質問と答えが出てくる：

4 節「**終り**の時まで…。」

6 節「…いつになって**終る**でしょうか。」

7 節「…これらの事はみな**成就**する（終わる—欽定訳）だろう…。」

8 節「…これらの事の**結末**はどんなでしょうか。」

9 節「…**終り**の時まで…。」

11 節「…時から…定められている。」（終りのことについて述べている）

13 節「…定められた日の**終り**に立って、あなたの分を受けるでしょう。」

従って、それはダニエル 12 章の文脈的強調と靈感の言葉から、「我々すべての者が理解を必要とするであろう警告であり、最後の最後に起こる未来の諸事件への適用を兼ねた預言であるということが分かる。

ダニエル 12 章は、前章の単なる繰り返しではない。三つのタイムラインを備えた 12 章は、その適切な終りの時代背景に関する適用において、未来に託された預言であるべきである。

歴史家は預言を「前もって書かれた歴史」として見るだけでなく、過去、現在、未来の出来事を網羅した連続体として見る。例えば、歴史家はダニエル 2 章の像を、過去の帝国を扱っているものと見た。像はその足の指に生存している我々の時代をも正確に示し、石の王国がやってくるという未来も包含している。このように歴史家たちは、過去を現在に結びつけ、未来をも見通しているのである。これは彼らを未来派(預言をはるか未来に成就するものとする人たち)にするものではない。

初期の再臨運動における歴史家たちは、キリストの再臨まで2世紀近くもあるとは予見できなかった。彼らはダニエル 12 章を彼らの時代に近い過去の出来事として解釈するのに懸命であった。これらの偉大な人たちは「歴史の捕虜」であったので、ダニエル 12 章を最終時代の諸事件を指しているものと考えることができなかった。そのことは最終世代に委ねられたのであった。

「長年にわたるすべての預言的証しの最も際立った教訓の一つは、同時代の認識、あるいは成就するその時に預言的アウトラインにおけるそれぞれの主要な時期、または出来事の解釈である」L・E・フルーム著：父祖たちの預言的信仰、1巻、890 ページ。

「…預言の主要な時代または出来事に達するときはいつでも、神の御霊によって特別な研究と成就の認識へと導かれる敬虔な研究者たちがいるものである。このことは常に出来事と同時代に発生する」同上、3巻、9ページ。

最終世代の人々は、約2世紀も前に生存していた人々に、すべての預言的解釈を完成させるよう期待すべきではない。先駆者たちは、自分たちがすべてを完成させてやろうと考えてはいなかった：

「そして預言の最も著しい手引きは、世界の最終的危機の直前に経験されるだろうと彼らは考えた。…それは神の王国への最後の行進において、人を照らすであろう…信仰深い者の手にある光り輝きたいまつである」同上、4巻、1171 ページ。

今日、預言の解説者たちは、御言葉を徹底的に研究し、歴史をつくる最新事件の観察、また預言の霊の指導によってダニエル 12 章を見る。ダニエル 12 章が未来に成就するという見方には、彼らはほとんど抵抗できないと感じている。それは「終わりの時まで、我々すべての者が理解を必要とするであろう [未来形] 警告」だからである。

「真理には、どの時代にも新しい発展があった。つまり、時代ごとに、その人々のための特別な神からの使命があった。古い真理はみな重要である。新しい真理は古い真理から切り離されたものでなく、古いものの解明である。古い真理を理解して初めて、新しい真理を悟ることができる」キリストの実物教訓 105 ページ。

彼らの後方にある歴史全体の広大なパノラマを見るのは、最終時代に生きる最後の世代なのである。そして巻物は完全に開かれる。最後の世代に新しい真理の発展がなく、2世紀も前に理解された事柄だけに安んじているなら、最後の救出を認識し、最後の危機を理解することなどできるはずがない！預言はそれが成就する時に生きている者たちに、希望と喜びを提供するために与えられているのである。

ダニエル 12:4、6、9、と 13 に二回も使われている「終わり」という言葉は、ストロング・コンコルダンスの word. No. 7093 によると、“Gets” (カテス) であり、「末端」「時の終局」「境界線の縁」という意味がある。従って、ダニエル 12 章の「終わり」という語は、いかなる状況下でも、2世紀前 (1798 年や 1844 年) の出来事や、あるいは「中世時代」に適用されてはならない。それは、最後の時代に起こる諸事件のことを言っているのである。多くの神学者は、ダニエル 11:35 と同じように、1798 年か 1844 年のことについて言及していると推測する。しかしエレン・G・ホワイトは、ダニエル 12 章の「終わりのこと」について次のように言っている：

「ダニエル書 12 章を読み、研究しようではないか、それは終わりの時までには、我々すべての者が理解を必要とするであろう (shall need) 警告である」手紙 161、1903 年。

「ダニエルは時の終わりまで、どれくらいあるのですかと二度尋ねた。…ダニエル書は、ヨハネの黙示録において開封され、我々に地上歴史の最終場面を垣間見せてくれる。…過去の歴史は繰り返される」牧師への証、114-116。

第 2 章



「字義通りのアプローチ」とは？

「聖書のあらゆる宣言は、文脈とよく知られた言語法が字義通りでなく象徴であることを示しているところ以外は、最も明確かつ字義通りの認識がなされるべきである。そして象徴的なものは何であれ、字義通りである他の聖句によって説明がなされねばならない」1979 年、ワシントン D.C. で開かれた聖書解釈学のシンポジウム：ドン・ニューフェルド氏の声明。

上の引用文は、聖書研究に用いるべき、最も重要な聖書解釈の規則(ルール)のひとつを定義づけている。これは字義通りのアプローチ(研究法)と呼ばれていて、聖書のあらゆる箇所当てはまる。セブンスデー・アドベンチストが是認する唯一のアプローチである。この字義通りのアプローチによって、現在教会が掲げている教理、すなわちアドベンチズムの全基礎が敷かれたのである。ダニエル 12 章も、この字義通りのアプローチに従わなければならないし、この解釈の原則によって保護されねばならない。

ダニエル 12 章には、象徴的表現が一つもない。像や獣、角、冠、山、石、風、目、口といったダニエル書や黙示録にある預言の象徴が一つも出てこない。ダニエル 12 章の会話を、ダニエルは幻の中で聞いたことは事実であるが、本文に象徴的表現が全くない。従って、ダニエル 12 章は、字義通りの意味において読むしかない。

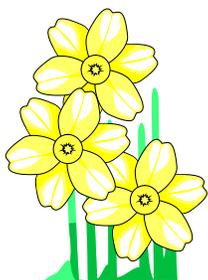
文脈に象徴的表現が用いられている場合、預言の期間は象徴的期間として扱われ、1 日を 1 年と計算する原則によって解読されるべきである。ダニエル 12 章のタイムラインは象徴的文脈の中に表記されていないので、字義通りの期間であると見なされるべきである。預言の解説者にも、字義通りに書かれている聖句を象徴的に解読しようと試みる権利はない。これらは「最も明確かつ字義通りの認識がなされ」ねばならない。従って、ダニエル 12 章に出てくる日数は、字義通りの日数と見なされるべきである。

以下にダニエル 12 章の日数で表されたタイムラインを挙げてみる：

「それは、ひと時とふた時と半時*である。聖なる民の力をうち砕く時に、これらの事はみな成就するだろう…」ダニエル 12:7—口語訳だけが、「聖なる民を打ち砕く力が消え去る時」となっている。

「常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、1290 日が定められている」ダニエル 12:11。

「待っていて 1335 日に至る者はさいわいです」ダニエル 12:12。



第3章

「解釈」とは？

ある預言は、比喩的—象徴的言語で書かれている。ダニエル2章、7章、8章、また黙示録のある部分がそれである。これらの象徴とは、像、獣、角、目、山、石等である。その他の預言は字義通りの言語で書かれている。マタイ 24:7「…またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう」はその典型である。未来を指しているので預言と言われるが、象徴は全く用いていない。単純に起こるべき特定の出来事を指している。

象徴的あるいは比喩的言語で表記されている預言だけが、これらの象徴の解読、解釈を必要とする。この解読または「解釈」の過程が、理解への第一段階である。象徴または比喩が「解釈」すなわち解読された後に、初めて適用がなされ得る。字義通りの言語で書かれている預言は、解読や解釈を必要としない。正しい状況への適用が必要なだけである。

象徴的表現を解読、あるいは「解釈」する過程は、聖書は聖書で解釈、解説するという方法の範囲から出てはならない。

「聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでない事を、まず第一に知るべきである」ペテロ第二 1:20。

この解釈の過程において、自分の個人的意見や推測を、象徴や予型の意味として入れ込むことは誰にも許されていない。これらの意味は、相互参照の聖書研究法によって引き出されねばならない。それが他の聖句の意味を解く鍵となる：

* 「ひと時とふた時と半時」は預言的用語であって、象徴的、または「預言的」時ではない。第IV部の6章を参照。

①「預言的用語」とは何か？

②「預言的時」とは何か？

「彼はだれに知識を教えようとするのか。だれにおとずれを説きあかそうとするのか。…それは教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則。ここにも少し、そこにも少し教えるのだ。…それゆえ、主の言葉は彼らに、教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則、ここにも少し、そこにも少しとなる…」イザヤ 28：9-13。*“line upon line” “一行、詩句、せりふ”（欽定訳）

第4章



「適用」とは？

もし預言が象徴的表現で書かれているとしたら、理解への第一段階は、象徴の解読または解釈である。その事が聖句の相互参照によってはっきりしてから、次の段階[ステップ]をとることができる。その第二段階が、適用である。例を挙げてみると：

象徴：「わたしは夜の幻のうちに見た。…四つの大きな獣が…」ダニエル7：2,3。

第一段階の解釈

解読： 聖書は次のように象徴を解釈している：「この四つの大きな獣は、…四人の王で

ある」ダニエル7:17。

第二段階の適用

適用： 四人の王はそれぞれ、バビロン、メド・ペルシャ、ギリシア、ローマを象徴している。

このような象徴の解釈がなされてはじめて、正しい人物や状況に適用させることができる。象徴的表現のない預言の場合は、第一段階が省かれる。つまり解釈が要らない訳である。その時は、第二段階の**適用**だけが必要となる。

* 相互参照あるいは聖書の主題別研究を捨てる試みがあったが、イザヤ28の種々の聖書翻訳にもかかわらず、聖書がそれ自体の注解者、あるいは預言的象徴の「解釈者」であるという、聖書解釈の基本原則がなおこの聖句の文脈（状況）に残っている。

ダニエル 12 章には、象徴的表現がない。必要なのは正しい状況への適用だけである。従って本書「警告」は、ダニエル 12 章の解釈をしている本ではない。ダニエル 12 章は象徴的表現を用いていないが、定義づけを必要とするわけの分からない用語が出てくる。従って、本書の目的は：

1. ダニエル 12 章の言語を「字義通りの」ものとして分類する。
2. 原語であるヘブル語を参照して、用語を定義する。
3. わけの分からない用語を簡単な日常語へと単純化する。
4. ダニエル書と黙示録の間のつながりを提供する。
5. 分かりやすい字義通りの文を、他の箇所、終わりの時に関わる重要な預言として描かれている状況に当てはめる。
6. 「私たちすべての者が理解する必要がある」と警告を発する。
7. 終わりが近づくに当たり、神の民に確信をもたらす。

熟練した預言の解説者は、象徴的預言の言葉と字義通りのものの間に何ら緊張関係を見出さない。預言の解釈と適用において、歴史主義派の学者らは、過去と現在と未来の歴史的、政治的、霊的諸事件を明らかにするために、両方の型を用いた。熟練した解説には、次の事柄が要求される。

1. 字義通りの言語と象徴的言語の違いを認識する。
2. 二つの預言的型の調和的關係を理解する。
3. 聖書に象徴の解読、解釈をさせる。
4. 両方の型とも、一貫して歴史主義者の方法を用いる。
5. どちらの型を用いるにしても、一貫した [矛盾のない] 適用をする。時が進み、巻物が開かれるにつれて新しい概念が現われてくるのと同じ様に歴史的視野を広げる。

第5章



「歴史主義者」とか「未来主義者」とは？

ダニエル 12 章は字義通りの解釈がなされるべきで、未来に適用されるのであると宣言する人は、未来主義者として片づけられはしないだろうか。

まず、ダニエル 7 章を考察する：

何年も昔、ローマ・カトリックの預言解説者たちは、「小さい角」を含むダニエル 7 章の象徴的表現を無視した。この小さい角が「ひと時と、ふた時と、半時の間」聖徒たちを迫害し、また「時と律法とを変えようと望む」のであるが、この預言が彼らにとって脅威となり、彼らはそれを無効にするためにある手を打った。彼らは象徴的表現を字義通りの時に置き換えた。彼らは預言の象徴的時の解釈である、1 日を 1 年と計算する原則を認めようとせず、ダニエル 7 章のこの期間は世の終わりに成就すべき字義通りの 3 年半であると宣言した。この立場が、譴責をローマからそらすこととなった。

従って「未来主義者」とは、象徴的表現で書かれた預言の真の解釈や、象徴的文脈内に表記されている時に代わって、字義通りの適用をなす人のことである。「未来主義者」の狙いは、批判的な視線を法王教ローマからそらすことであった。

一方、宗教改革以来、預言解釈の歴史主義者は、*象徴的預言の聖句が比喩的な言葉で表記されていることを認識していた。彼らは象徴を解釈するために、相互参照の聖書研究法を用い、象徴的本文において表記されている時を解釈するために、1 日を 1 年とする計算法を用いた。過去にも未来にも神の民を迫害する者として、彼らは真っ直ぐローマを指したのであった（黙示録 13:1-10 参照）。

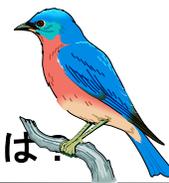
次に、ダニエル 12 章を考察する：

過去、現在、未来の歴史的連続体を提供するために、歴史主義者は象徴的預言と字義通りの預言の両方を用いる。もしある人が、ダニエル 12 章は字義通りの言語で書かれていて未来に当てはめるものであると宣言するならば、その人は過去の偉大な歴史主義者たちの地位を占めることになるであろう。

フルーム博士は「カトリック未来派」について言及している。彼は歴史主義者が歴史を、過去、現在、未来の連続体として考える権利を否定していないし、字義通りの言葉で書かれた預言を字義通りに解釈するということも否定していない。

* カトリックの未来派とプロテスタントの歴史主義学派の間の基本的な対立は激しく、避けられないものとして描かれている。正反対の全く和解できない対立は、まだ厳然と立ちはだかっている。カトリシズムは首尾一貫してそのままであり、プロテスタントの証言はひどく切り崩され、混乱して、無力になり、その歴史主義者としての立場を放棄している。

第6章



ダニエル書の「漸進的前進運動(展開)」とは？

ダニエル書には七つの預言的タイムラインが出てくる：

1. ダニエル4章 ネブカデネザルが狂人となった7年間のタイムライン
2. ダニエル7章 1260日(年)
3. ダニエル8章 2300日(年)
4. ダニエル9章 70週
5. ダニエル12:7 「ひと時とふた時と半時……」1260日
6. ダニエル12:11 1290日
7. ダニエル12:12 「待っていて1335日に至る……」

ダニエル2章の像が示している一連の流れは、歴史の範囲と推移の基盤を据えている。それに続く時の流れ(タイムライン)は、ダニエル2章を繰り返し、しっかりと固定している。これは、聖書学者が過去の歴史において確固たる足場を築くのを可能にしてくれる。それぞれのタイムラインは、前に向かって進み、更に詳細な情報を追加している。ダニエル7章は、1798年に終焉を迎えた法王至上権を表す小さい角に至る。ダニエル8章と9章は更に前進して、1844年に至っている。ダニエル11章は私たちの時代、更に未来へと前進していく。このダニエル書の漸進的前進運動は、最終章に至っては、地上歴史の頂点に達する最後の諸事件に焦点を当てている。

まとめ：

1. ダニエル2章は、キリストの王国が確立されるまで王国が推移していくことを示している。
2. ダニエル7章の一連の獣は、同じ王国の推移を繰り返すことによってダニエル2章を固定しているが、もう一つの重要な特徴-「小さい角」で表されている法王教を追加し、ヨーロッパにおける法王至上権が1260年間続いて1798年に終わることを定義づけている。
3. ダニエル8章と9章に出てくる「獣」と「角」のタイムラインは、帝国の推移と法王教支配を再度繰り返すが、1844年に至るもう一つの重大要素、すなわち調査審判の開始を明記する2300日(年)を追加している。
4. ダニエル9章の70週のタイムラインは、シナイ山におけるイスラエルとの契約の終わりである。
5. ダニエル12章の三つのタイムラインは、ダニエル11章の延長であり、詳細を追加している。

ダニエル書全体の漸進的前進運動(展開)は、読者を最終章における最後の事件へと導く。ダニエル 12 章は、もっぱら最後の時代を扱っている。

ただし書き

1. ダニエル 12 章にある三つのタイムラインは、ダニエル 9:24-27 の 70 週の預言に起因するものでもその延長**でもない**。ダニエル 12 章の「ひと時とふた時と半時」は、ダニエル 7:25 と同じものではなく、ダニエル 9:24-27 で表されている紀元 31 年から 34 年までの 3 年半とも関係がない。

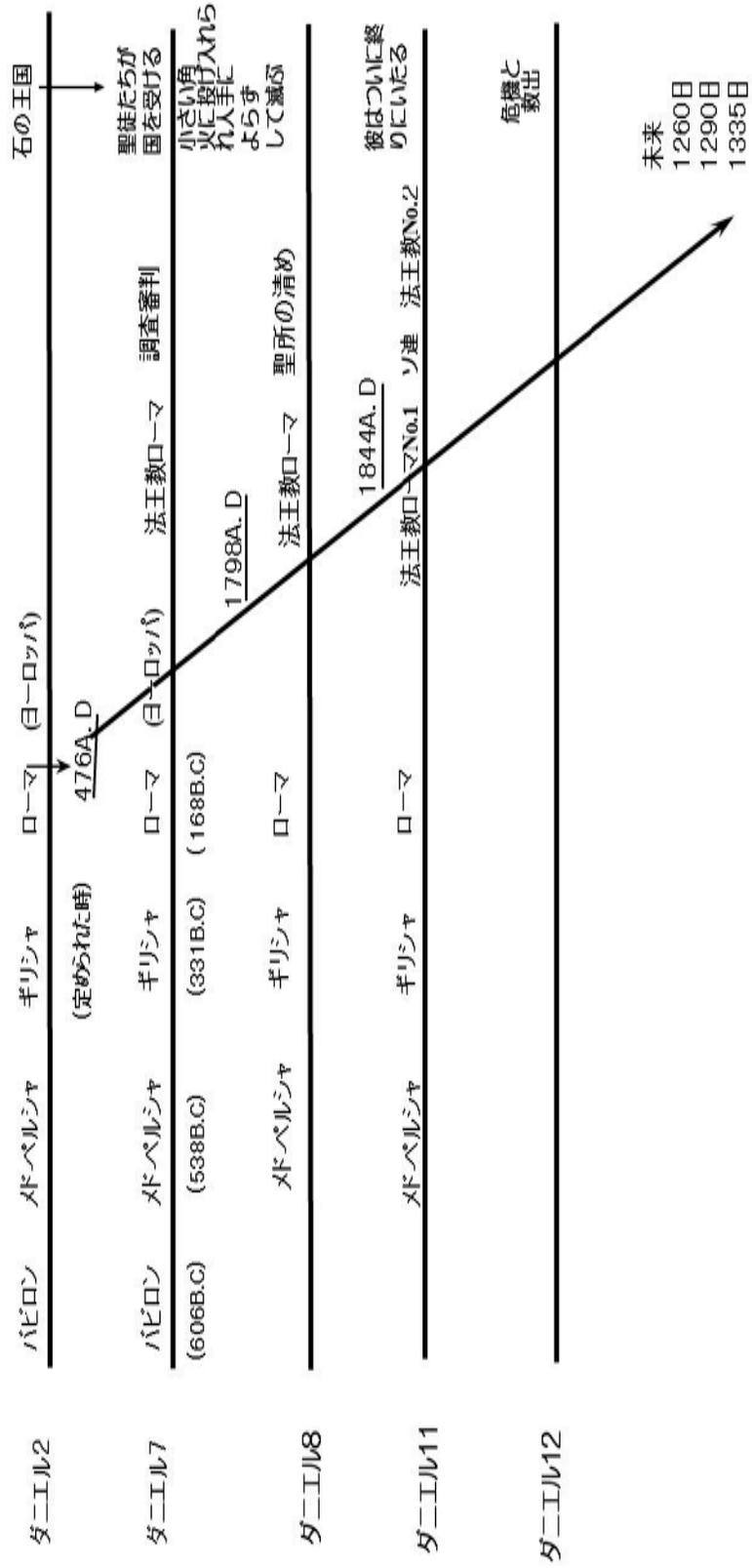
ダニエル 12 章の三つのタイムラインは、アドベンチズム内外のどちらに源を置こうと、「ギャップ理論(穴埋め理論)」を支持するためにダニエル 9 章の 70 週の預言にある最後の 3 年半に関連させて用いられるべき**ものではない**。「ギャップ理論」は、ダニエル 7 章と 8 章の「小さい角」の正体をぼかすため、カトリックの未来主義者によってでっち上げられたものである。現代の背信したプロテスタントは、最後に ラプチャー(rapture=再臨の際、空中に揚げられる歓喜)思想へと導く結論の根拠としてそれを受け入れてしまったのである。

70 週の預言は紀元 **34 年に終了した**、とエレン・ホワイトは明確に述べている。これは終わりの時代に及ぶものではない。

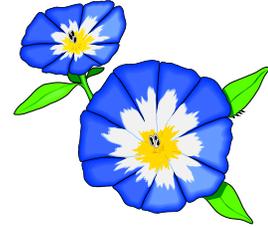
2. ダニエル 12 章のタイムラインは、最後の最後に成就すべき預言の最終断片として独り立ちすべきものである。ダニエル書の前進運動により、ダニエル書の最後に位置する 12 章のタイムラインは、時の最後を描写していることが分かる。正しく理解されるとき、歴史最後の諸事件によって成就される預言の最後の部分であることが分かる(預言とは、単に前もって書かれた歴史のことである)。それは開かれるべき巻物の最後の一巻きである。
3. 聖書研究生は、ダニエル 12 章のタイムラインをいかなる二重の適用からも、またダニエル 9 章に関して提議されたいかなる「穴埋め理論」からも解放することが、絶対必要である。

初代キリスト教会最初の 3 年半とダニエル 12 章にある最後の 3 年半との間には、類似点がある。キリスト教会の開始にあたって前の雨が注がれたように、キリスト教時代の最後にあたっては後の雨が注がれるであろう。

ダニエル書の漸進的前進運動(展開)



第7章



ダニエル 12 章における 「従来の適用への反論」とは？

アドベンチストの先駆者たちは、ダニエル 12 章にある三つのタイムラインを研究した。彼らは自分たちに近い過去にそれらをはめ込もうと試みた。そして、タイムラインを 1798 年と 1844 年に終了させた。ダニエル 12 章は 7、8、9 章の預言、すなわち 1260 日と 2300 日（年）の反復であると考えた。従って、ダニエル 12 章の預言のタイムラインは、象徴的な時であると彼らは推定したのであった。時に関する我々の有利な位置から見ると、この見解では次のような問題が生じる：

1. ダニエル 12 章は、象徴を使わずに字義通りの言葉で書かれている。字義通りの文脈(前後関係)におけるタイムラインは、字義通りの日数として理解すべきである。神の摂理により、彼らの二義的適用は、彼らの時代に彼らが必要としていた預言に対する立場を強めることとなった。今日の我々は、いつまでも同じ場所に立っていることはできない。巻物を開くにつれ、最終世代により広い展望を与えるのである。
2. ダニエル 12 章の字義通りの言語は、すべてが終わる最後の最後に関係していることを明確に述べている。1798 年も 1844 年も最後の最後ではなかった。これは尚も未来のことである。
3. 預言はそれが成就する時に開かれる。1 世紀以上も前の先駆者たちは「歴史の捕虜」であったので、成就の時が 100 年以上も先のことであった当時、彼らに預言の解明を期待することはできなかった訳である。主はその時代に関係のなかった「警告」を、彼らに負わせるようなことはなさらなかった。
4. 「真理には、どの時代にも新しい発展があった」(実物教訓 105 ページ)。各時代のための真理は、聖書から来る。自分たちに課せられた聖書研究の完成を過去の世代に期待するのは理不尽である。

ある人たちはダニエル書と黙示録の預言、特に時やタイムラインに関わるこれらの預言的要素の研究に、恐れと懸念をもって取りかかる。これらの感情は、エレン・ホワイトのある特定の引用文に起因している。すべての時やタイムラインに関する預言は 1844 年で終わった、といったような声明である。このような狼狽を表す人たちは、これらの引用文を注意深く研究する必要がある。解釈の原則を犯すことによって真理は否定されるのである。悪どいバビロンは、人々が聖書を研究するのを妨害し、様々な種類の誤りを考案した。犯された単純な解釈の原則とは：

1. 中心テーマに関する他のすべての聖句を一つの聖句に破壊させてはならない。
2. 文は文脈で(前後関係において)読まれなければならない。
3. 歴史的背景や状況を考慮に入れなければならない。

我々の中にも、聖書研究のみならず、証の書の使用においてもこれらの原則を犯す人たちがいる。これは人々を聖書研究から遠ざけるためのバビロンの思考であり、多くの様々な誤りを生み出す結果となる。この悪どいメカニズムが証の書に適用されると、終わりの危機に必要な預言の研究にとって妨げとなるばかりでなく、ダニエル 12 章に出てくるタイムラインのいかなる研究にも大きな困難をもたらす。その事を憂慮する人は、次のセクションを集中研究されたい。

第 8 章



「もう(預言の)時がない」とは？

バビロンは、その教理が直接聖書から来ていると主張する。その種々の誤りは、聖句のアンバランスな使用に基づくものである。その神学的方法とは：

1. 主題に関する他のすべての聖句を無視し、一つの聖句だけを用いる。
2. 文脈を無視する一問題の前後の節は無視する。
3. 歴史的、状況的背景は無視する。

エレン・ホワイトの書物にも、同じような致命的テクニックが適用され得る：

1. 主題に関わる他のすべての文を無視し、一つの文だけを独占的に使用する。
2. その歴史的、状況的背景から外れて文が用いられる。
3. 特定の適用が、際限のない適用と共に通論と考えられる。

今日ある人たちは、「…もう時がない」(黙示録 10:6)という聖句と、2300 日(年)の預言に関するエレン・ホワイトの文の両方を、この同じ方法で用いている。つまりそれによって人々に恐怖心を与えて、神の言葉における最終時代の預言の研究から遠ざけるためである。彼らは、来たるべき危機と地球の歴史を終わらせる諸事件に関係している、ダニエル書と黙示録中の時、あるいは最終時代、また最後の諸事件に関わるタイムラインを扱っているこれらの預言をことごとく遮断しようとする。このような動きは神からのものではなく、我々の目前に迫る諸事件に人々を備えさせるのに最も必要なこれらの預言的真理そのものに対して彼らを盲目にしようとするサタンの試みである。

もし彼らの強情のためにこれらの作戦が見抜かれず、このままいくと、彼らの支持者は自らとその追従者を率いて、バビロンの暗闇と混乱に後戻りさせてしまうであろう。次に、エレン・ホワイトの引用文を注意深く見ていくことにする。聖句の研究における解釈上の正しい規準を観察するだけでなく、彼女の書物を吟味するときに、同様の誠実さとテクニックを守り、用いるためでもある。

第9章



「問題」とは？

黙示録 10 章 6 節の御使は宣言した、「もう時がない」と。エレン・ホワイトは次のように解説している：

「厳粛な宣誓をもって天使が語っているところの時とは、世界歴史や恩恵期の終わりのことではなく、主の来臨に先立つ預言の時の終わりのことである。つまり、人々は一定の時について、別のメッセージを受けないということである。この時の期間、すなわち 1842 年から 1844 年に達して後は、明確な預言の時をたどることはできない。最も長い計算は、1844 年の秋に達する」7BC971。

彼女は再びこう書いている：

「このメッセージは預言の期間の終わりを宣告している」2SM108。

更には、1日を1年と計算する原則は1844年で無効になったと結論づける、靈感を受けない推論を加える人たちがいる。時、あるいは最終時代の適用に関するいかなる預言の研究も危険であると感じている人たちもいる。

問題は、神の民が神の言葉、特に悩みの時がやってくる時、彼らを誘導するのに最も必要とされる神の言葉に対して恐怖心を抱くことである。これらの御言葉は、最後の救出について希望を与え、極めて間もなく世界に降りかかる最後の危機を彼らに理解させるものなのである。

第10章



「ジレンマ」とは？

イエスに従う者は、聖書を調べなければならない。「聖書はすべて神の靈感を受けて書かれたものであって、…有益である」(テモテ第二 3:16)。研究からある特定の部分を除外することは安全でなく、理にかなってもしない。真の礼拝者は現代の真理を探り調べ、それを宣言しなければならない。最終時代の神の民は、ダニエル書と黙示録で略述されているように、彼ら自身の時代に当てはまる預言の言葉から、道案内の光を見出さなければならない。彼らは、最後の危機と救出に対して彼らを備えさせる最終時代の預言に焦点を当てねばならない。時について言及している最終時代の預言は、明確な適用をせず、曖昧かつ無意味なものとして読まれなければならないと結論づけるのは、安全ではない。ダニエル書と黙示録、また聖書の他の部分に記されている最終時代の預言の解釈において、神の民を導くことのできる解釈原則とは何であろうか。



第11章

「解釈上の原則」とは？

すべての聖句を研究するようにとの勧めと、エレン・ホワイトの引用文との間に調和をもたらす解釈の原則とは、単純なものである：

1. 同じテーマに関する他のすべての聖句を、一つの聖句に破壊させてはならない。
2. 同じテーマに関する他のすべてのエレン・ホワイトによる引用文を、一つの引用文に破壊させてはならない。
3. 聖書の節は、文脈中に保たれねばならない。
4. エレン・ホワイトによる引用文は、文脈中に保たれねばならない。

5. エレン・ホワイトによる声明文は、次ページで説明しているように、状況的背景を考慮に入れて理解しなければならない。

このような解釈の原則に従うとき、聖句とエレン・ホワイトの引用文の間に調和が見出されるであろう。優れた解釈は、終末事件を扱っていることについて不注意な推論をするという問題を解決してくれるであろう。

第 12 章



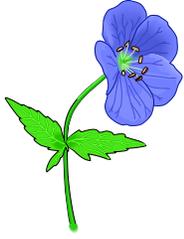
黙示録 10:5, 6 の「文脈(前後関係)と歴史的背景」とは？

黙示録 10:5, 6 の文脈と歴史的背景は何か？

「それから、海と地の上に立っているのをわたしが見たあの御使は、天に向けて右手を上げ、…世々限りなく生きておられるかたをさして誓った、『もう時がない』」
黙示録 10:5, 6。

セブンスデー・アドベンチストは 1 世紀以上にもわたり、黙示録 10:9 一口には甘く、腹には苦い小さな巻物一の文脈を認識してきた。大再臨運動によって与えられたメッセージの甘味と、1844 年 10 月 22 日の大失望の苦味のことである。これは歴史的背景を与えてくれる。大再臨運動のメッセージは、一つの聖句（ダニエル 8:14）すなわち 1844 年に終了した 2300 日（年）の預言のタイムラインに関する説明に基づいていたと、神学的文脈は明記している。

エレン・ホワイトは黙示録 10:5, 6 について論評しているが、彼女は預言の時を 2300 日（年）の預言のタイムラインとして言及していることを覚えなければならない。



第 13 章

黙示録 10 章における「預言の時」とは？

預言の解説者とエレン・ホワイトの書物を読む人は、黙示録 10 章に関連して彼女が用いている「預言の時」という言葉は、2300日(年)に関して天使が自ら用いた、ダニエル 8:14 の「預言の時(タイムライン)」と同じであることを理解することが必須である。天使もエレン・ホワイトも、黙示録 16-22 章、そしてダニエル 12 章に見られる、時に関係した他のすべての預言を無効にしていた訳ではなかった。天使もエレン・ホワイトも、1844 年以降に関する預言の言葉をすべて無効にしてはいなかったのである。

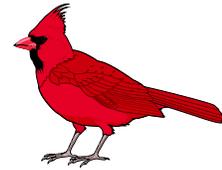
従って、彼女の引用文を読むときには、次のように理解すべきである：

「厳粛な宣誓をもって天使が語っているところの時とは、世界歴史や恩恵期の終わりのことではなく、主の来臨に先立つ預言の時(ダニエル 8:14)のタイムラインの終わりのことである」7 BC971。

このように理解するとき、この引用文が他のいかなる預言を破壊することもなくなる。1844 年に続くこれらのタイムラインや諸事件とは、何の関わりもないのである。

2300 日(年)の時[預言のタイムラインと
その中に含まれている預言的期間]は、
1844 年に終わった。

第 14 章



「預言の期間」とは？

「このメッセージは預言の期間の終わりを宣告している」 2 SM108。

「1842 年から 1844 年に達して後は、明確な預言の時をたどることはできない」 7 BC971。

歴史的背景と前後関係を覚えられたい。ダニエル 8 : 14 と 9 : 24-27 の 2300 日 (年) という預言のタイムラインに、どのような預言の期間が含まれていたのだろうか？

1. 70 週 (ダニエル 9 : 24)
2. 7 週 (ダニエル 9 : 25)
3. 62 週 (ダニエル 9 : 25)
4. 週の初めの諸事件を含む 70 週目の (ダニエル 9 : 26)
5. 週の半ば (ダニエル 9 : 27)
6. 週の終わり (ダニエル 9 : 27)
7. 1844 年に終わっている 2300 日 (ダニエル 8 : 14)

2300 日 (年) のタイムラインに含まれるこれらの預言の期間は、初期の再臨運動によって成されたのと異なる方法では、再構築も後戻りも成され得ない。これらの引用文は、最終世代に関わる諸事件についての預言、またはタイムラインとは何の関係もなかった。 エレン・ホワイトの論評を文脈内に保つことは必須である。さもないと互いに矛盾することになってしまう。このような引用文をうまく悪用すると、1844 年以後の時に当てはまるダニエル書と黙示録の研究はすべて台無しになる。

預言者の言葉を歴史的背景と文脈から引き離すと、互いに矛盾しているように見えるのである。このような矛盾しているような引用文は、次のように見ることをお勧めする：

「この [黙示録 10:5,6] メッセージは、預言の期間の終わりを宣告している」 2 SM108。

「聖書の中には特に我々の時代、すなわち神の御子が現れる直前の期間に関わる真理が書かれている。…預言の期間は…大いなる終結の間際まで延びており、その時起こる諸事件に光の洪水を投げかける」 1 RH367, 1883, 9-25。

左側の引用文は 1844 年以前、すなわちダニエル 8:14 に含まれる 2300 日のタイムラインに関するものであるのに対し、右側の引用文が述べている預言の期間とは、1844 年以降から大いなる終結の間際にまで至る諸事件に関するものである。

2300日(年)の
預言のタイムラインは
1844年に終わった。

第15章



「状況的背景」とは何か？

1844年の大失望後、期待されたようにイエスは地球に来られるのではなく、調査審判を始めるため至聖所に入られたという説明を受け入れなかった人たちがいた。彼らはダニエル書のタイムライン、中でも2300日(年)の預言に戻って、主のおいでになる日時をひねり出そうとやっきになった。このような人たちは常に新しい日時を設定し、その都度失望を経験したのであった。イエスの来られる日時を定めるために、これ以上 **2300日の預言を明確に**突き止める、ということはありませんとエレン・ホワイトは述べた。このような無駄な努力については、次のような勧告が与えられている：

「つまり、人々は **「主がある一定の日時に来られることを期待して」** 一定の時について、別のメッセージを受けないということである」7BC971。

この問題が次の引用文で詳しく説明されている：

「主がおいでになるという異なった時(複数)が定められて、兄弟らに押し付けられた。しかしこれらの時は過ぎ去るであろうことを、主は私にお示しになった。キリストが来られる前に、悩みの時が起こらねばならないからである」1T72。

「異なる者たちによって時が次々と定められ、ことごとく過ぎ去るであろう。そしてこの時を定めるという影響が、神の民の信仰を破壊することに貢献するのである。…キリストが来られる前に、悩みの時が起こらねばならないからである」1T72、73。

2300日(年)の預言を解明して、キリストのおいでになる日時を定めるために明確な時を見つけることはできない、というのがエレン・ホワイトの引用文における状況の背景であった。再臨の日時を知ることはできないのである。但し、終わりの諸事件を把握するために、ダニエル書と黙示録を研究することができるし、我々にはそれが「戸口まで近づいている」ことを知る義務が負わされているのである。*

第16章



「ダニエル8:14の焦点」とは？

ダニエル8:14のタイムラインに関する預言は、イエスの再臨の日時を提供するために設計されてはいなかった。そのように推測したのは誤りであり、1844年の大失望をもたらした。イエスの再臨やその正確な日時は、ダニエル12章の預言を含む他のいかなる預言の焦点でもなかった。それでは、2300日(年)というタイムラインの焦点とは何であったのだろうか。**それは調査審判開始の日時を与えてくれたのであった！**キリストの務めが変わり、キリストは天の聖所から至聖所に移られたことを指し示していた。十戒の律法と第四条の神聖さ、すなわち真の第七日安息日に注意を向けたのであった。裁きに応じる民の完成を求めたのであった。死者の裁きが始まったことを合図し、その後生ける者の裁きが続くことを示していた。それはイエスの再臨に焦点を当てるよう意図されたものではなかった。

伝道者たちはイエスの再臨を教理として説く。それは、預言を含むすべての聖句が説いているところの祝福された希望なのである。けれども、預言や預言のタイムラインが再臨の日時を定めたことはなく、これからもないのである。第七の災いの下、神の声が告げるまで、その日その時は分からない(大争闘下p418参照)。**主の来臨の日時を知る必要はない。**知る必要があるのは、**調査審判の終了に関わる諸事件についての情報である。**ダニエル12章は、目前に迫っている悩みの時を耐え忍ぶ手助けをしてくれる最終時代のシナリオに焦点を当てている。

預言とは、ペテロ第二1:19で述べられているところの光である。聖句は我々が巻物を開くに当たり、立場の認識と方向感覚を得る手助けをしてくれる。敵同様、真の神の民を識別する。大都会を離れるべき時を知らせてくれて、神が大争闘に決着をつけられるのをいかに忍耐して待つべきかを教えてくれる。救出の時が近いという確証を与えてくれる。預言は、後の雨や恩恵期間の終了、またイエ

* 「ファーストデー・アドベンチスト(第一日安息日再臨教団)は繰り返し時を定めた。その都度失敗しているにもかかわらず、大胆にもまた新たに時を定めたのであった。これは神が導かれたものではなかった。彼らの多くは真の預言の時を拒み、預言の成就を無視した。…大きな試練が1843年と1844年にあり、その時以来、時を定めた者たちは、みな自らを欺き他人を欺いてきたのであった」1T73。
彼女は預言全般ではなく、特別にダニエル8:14の2300日(年)のタイムラインについて言及していたのである。不信の輩によって悪用されたのは、この預言とタイムラインであった。

スの再臨の日時を教えてはくれない。ダニエル 12 章のタイムラインは、最後の危機へと導き入れる立法と司法行為に焦点を当て、諸事件の描写を順番通り提供してくれる。それは時が終わる前に、我々全員が必要とする警告を与えてくれる。まとめると、我々は悩みの時を乗り切るために助けを必要とするが、再臨の日時は分からないし、分かる必要もない。

第 17 章



「再びテストにはならない」とは？

ダニエル 8:14 においてテストとなったのは、タイムラインではなく、それが再臨の日時を指していると考えた人たちによる誤りがテストとなったのであった。神はその誤りにも御手を伸べられ、それがテスト(試練)となることをお許しになられた。神はそのテストを道具としてお用いになり、全世界に真の福音を宣べ伝える最後の残りの民となるべき、心の真実な人々を集めようとされたのであった。

現在我々は、その誤りが何であったかを知っている。その預言とタイムラインが、今後神の民にとってテストとなることはない。我々は再び同じ誤りを犯すことはしない。今後ダニエル 8:14 のタイムラインや、他のいかなるタイムラインも、再臨の日時を設定するために用いられることはない。これらの事実が、再臨に先立つ最終時代の諸事件を描写しているタイムラインの研究を邪魔立てすべきではない。

初期のアドベンチストたちは、裁きと十戒そして真の安息日について、ダニエル 8:14 のタイムラインとその意味を十分理解した訳ではなかった。その結果、彼らはそのタイムラインで日時を繰り返し設定し続けたのであった。彼らの用いた論拠を、エレン・ホワイトは非聖書的かつ不健全なものと宣言した。

「ファーストデー・アドベンチスト(第一日安息日再臨教団)は繰り返し時を定めた。その都度失敗しているにもかかわらず、大胆にもまた新たに時を定めたのであった。これは神が導かれたものではなかった。彼らの多くは真の預言の時を拒み、預言の成就を無視した。…大きな試練が 1843 年と 1844 年にあり、その時以来、時を定めた者たちは皆、自らを欺き、他の人々を欺いてきたのであった」 1 T73。

ダニエル 12 章に記されているタイムラインの研究は、イエスの再臨の時にに関するテストを提示しているのではなく、大終結の間際へと我々を導く未来の諸事件を描写している。

第 18 章



未来における「時(タイム)とタイムライン」とは？

ダニエル書と黙示録には、未来に関わる時とタイムラインがいくつも出てくる。エレン・ホワイもそれらのいくつかについてコメントし、未来のこととしている。例えば次のように書いている：

「ラッパが次々と鳴り響き(to be sounded)、鉢が次から次へと傾けられて地の住民に注がれることであろう。驚くほどの関心をそそる場面が、我々の目前に迫っている」7BC982, 1890年。

上の引用文は、ラッパを未来のこととしている。これらのラッパのうちに、時が以下のように言及されている：

…昼の3分の1は明るくなくなり、夜も同じようになった(黙8:12)。

…5ヶ月(黙9:5, 10)。

…その時(1時間)、その日(1日)、その月(1月)、その年(1年)…(黙9:15)。^{*}

黙示録11章6節と16章に出てくる災いはまだ先のことである。その章で、時が再度言及されている：

…1260日…(黙11:3)

…3日半…(黙11:11)

…この時 [同じ時間]…(黙11:13)

黙示録13章は、その頭の傷が治り、全地の人々が驚き恐れて従ったところの獣について言及している。すべての国々は驚き恐れて法王教に従っていないので、これはまだ成就していない。この預言は続けてこう述べている：

…42ヶ月の間、活動する権威が与えられた(黙13:5)。

黙示録17章も時について言及している：

…10人の王…一時(1時間)**だけ王としての権威を受ける(黙17:12)。

黙示録18章は時について言及している：

それゆえ、さまざまの災害が、…1日のうちに彼女を襲い…(黙18:8)。

…おまえに対するさばきは、一瞬 [1時間]**にしてきた。…(黙18:10)。

…これほどの富が一瞬 [1時間]**にして無に帰してしまうとは。…(黙18:17)。

…この都も一瞬 [1時間]**にして無に帰してしまった(黙18:19)。

^{*} あるいは期間

^{**} 「一瞬」は、17の翻訳聖書のうち、一つだけが短期間としていて、あとは「一時間」となっている。(The Greek Diaglot Interlinear, Strong's Concordance を参照)。

黙示録 20 章にも時の単位が出てくる：

…彼らは…キリストと共に 1000 年の間、支配した（黙 20:4）。

…それ以外の死人は、1000 年の期間が終わるまで生き返らなかった（黙 20:5）。

黙示録 8 章でも、未来のことである時について言及している：

…半時ばかり天に静けさがあった（黙 8:1）。

我々はただ、黙示録のこれらの部分を見捨てるべきなのだろうか。1844 年以後、神の民がこれらのいかなる預言の意味をも決して理解しないよう、神は意図されるのだろうか。これはすべて禁じられた領域なのだろうか。もしそうだとしたら、これらの預言は何故書かれたのだろうか。このような預言すべてに対して、エレン・ホワイトは同様の立場であったのだろうか。

我々はただ、ダニエル書の最終章に対して目を閉じるべきなのだろうか。エレン・ホワイトははっきりとこう述べている：

「ダニエル書 12 章を読み、研究しようではないか。それは終わりの時まで、我々すべての者が理解を必要とするであろう警告である」エレン・G・ホワイト、手紙 161、1903 年。

終わりの諸事件を描いたダニエル 12 章にある三つのタイムラインを、我々はただ無視すべきなのだろうか？

第 19 章



「1 日を 1 年と計算する原則」とは？

1 日を 1 年と計算する原則は、廃れたものなのだろうか。象徴的預言の時を字義通りの時に変換させるこの手段は 1844 年に廃止されたと、エレン・ホワイトが宣言したことがあっただろうか。無論一度もない。現在(預言の象徴で言い表された)時を字義通りの時に変換させるため、この計算法を用いるのは禁じられているのだろうか。それによって黙示録の象徴的表現は、ダニエル 12 章にある字義通りの文に接合され得るのに。我々は自分で造ったクモの巣を自らに巻きつけて、黙示録をダニエル書と結びつけて考えることができないようにすべきなのだろうか。

時に関わる黙示録のすべての部分、特に1時間とか1ヶ月、1年といった明確な単位を「短期間」とか「しばらくの間」のような曖昧なものにして、ただ無視すべきなのだろうか。

「この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書にかかっている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる」黙示録 22:18, 19。

神の民にダニエル書と黙示録を一緒に研究するよう促している、沢山のエレン・ホワイトによる勧告がある。彼女はこれらの預言を、最終時代に当てはめている。従って、聖書を研究する者は、神の言葉の中に新しく宝を見つけるために頭脳と心を開くことが肝要なのである。それは、適切なタイミング(時)がくると完全に理解されるであろう。

従って、1日を1年と計算する原則は、単に変換の単位—数学的道具であると結論づけることができる。それは、必要となるまで隅に置かれているものさしのようなものである。預言の時の測定と変換に用いられる物である。黙示録の象徴的表現を、ダニエル書の字義的部分に組み合わせて用いることが不可欠である。

イエズス会の未来主義の解説者らが、ダニエル7:25の迫害する勢力である「小さい角」から注意をそらそうと決意したとき、彼らがまずやったことは、1日を1年と計算する原則を放棄し否定することであった。

もし終末の預言の解説者がイエズス会のやり方に続くならば、その人も1日を1年と計算する原則は1844年に終わったと宣言することだろう。それを否定することによって、ダニエル書と黙示録の連結を崩してきたのである。黙示録の終末に関する預言が象徴的表現で述べられているところが、ダニエル12章の終末の預言では字義通りの時に関係している。1日を1年と計算する原則は、二つの間で時における唯一の関わりを与えてくれる。

もしサタンがこの計算法を排除することができれば、ダニエル12章のタイムラインすなわち1260日と1290日の間の30日の間の差異を人々が理解するのを妨げることができることを彼は知っている。そうすれば二つの預言は、黙示録17章と18章の預言の時に連結させることができなくなる。黙示録17章と18章で言及されている時は、1日を1年と計算する原則によって解読されダニエル12章と連結されるまでは意味を持ち得ない。

1日を1年と計算する原則を否定するのは、中世時代そうであったように、終末における預言の理解を効果的に阻止することになる。

第 20 章



イエスは何と言われるか？

イエスは何と言われたか？

「その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも、また子も知らない。ただ父だけが知っておられる」マタイ 24:36。しかし

「そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」マタイ 24:33。

「こうして、預言の言葉は、わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心を照らすまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい」ペテロ第二 1:19。

ダニエル 12 章とそれに関連する預言を調べると、それがイエスの再臨の日時を与えているのではないことが分かる。ダニエル 12 章のタイムラインは、その情報(再臨の日時)に関する手がかりを与えるものではない。主の再臨の日時を定めているところはどこにもない。

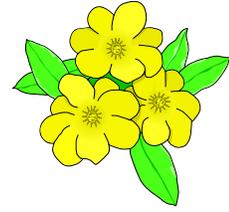
ダニエル 12 章のタイムラインは、主が「戸口まで近づいている」ことを聖徒たちが知り得るための情報を与えている。再臨の日時は、天父ご自身が告げられるであろう。

ダニエル 12 章のタイムラインは：

1. 終わりの時のシナリオが始まったという警告を与える。
2. 神の民が大都会を脱出すべき警告のしるし(サイン)を提供する。
3. 黙示録 13 章に関しての警告を与える。
4. 最終時代のシナリオにおける主な諸事件とその結果を描写する。
5. 最後の危機において神の民を取り囲む政治的情勢を明らかにする。
6. 悩みの時における保護の希望を与える。
7. 聖徒たちに悪人からの最終的救出を保証する。
8. 天と地の立法制度の重要性について洞察を与える。
9. 最終諸事件の研究への関心を引き起こす。
10. 多くの預言聖句を結び合わせて、最終諸事件についての明確な概念を与える。

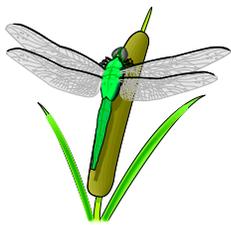
第 I 部のまとめ

解釈の原則とは？



1. ダニエル 12 章は、地球の歴史が閉じる前に我々全員が理解を必要とするであろう警告である。
2. ダニエル 12 章は、終わり、すなわち未来の時に関係している。
3. ダニエル書全体の漸進的前進運動は、最終章を最終時代の出来事と未来の成就へと進ませる。
4. 預言とは、前もって書かれた歴史のことである。それは巻物を開くこと—過去、現在、未来の歴史の連続体である。ダニエル 12 章のタイムラインを未来の出来事に当てはめる解説者は、イエズス会の未来主義 [聖書特にダニエル書や黙示録の預言の成就を遠い未来のこととして片づける] 者ではなく、真の歴史主義 [歴史の過程における諸現象は不変の法則によって決められるとする] 者である。
5. ダニエル 8:14 のタイムラインが調査審判の開始について警告を与えたように、ダニエル 12 章のタイムラインは、調査審判の終了が近いことを警告している。
6. ダニエル 12 章は、他のすべての聖句と同様に一貫した方法で扱われねばならない。つまり字義通りのアプローチで。
7. ダニエル 12 章は、字義通りの言語で書かれている—象徴的表現はない。
8. ダニエル 12 章の字義通りの言語を解明、解釈することはできない—歴史的適用を与えることしかできない。
9. 本書「警告」は、ダニエル 1 2 章の解釈をしている訳ではない。用語の解説をし、未来の出来事に対する預言の適用をしているだけである。
10. ダニエル 12 章のタイムラインは、イエスの再臨の日時を与えてはいない。
11. 解釈法規定の根拠となる原則は、聖句の研究のみならず、エレン・ホワイトの証の書を用いる時にも当てはまる：
 - a. 中心テーマに関する他のすべての聖句を、一つの聖句に破壊させない。
 - b. 文は文脈の中(前後関係)で読まなければならない。
 - c. 歴史背景や状況を考慮に入れなければならない。
12. 文脈と背景を無視してとられた証の書には、預言の研究を台無しにする誤った解釈がほどこされる。
13. 「1844 年に終了した預言のタイムライン」とは、ダニエル 8:14 の 2300 日(年)のこと。
14. 「1844 年に終了した預言の期間」とは、ダニエル 9:24-27 において解釈される 2300 年内の期間。
15. 1844 年に終了した預言の時を明確にたどることは、計算法と日時設定に関係してくる。

16. 1844 年のように時がテストとなることはない。最後の大きいなるテストは、真の安息日と神の律法に関するものだからである。
17. 黙示録の多くの預言は、まだ成就していないが、1 日、1 時間、半時、1 ヶ月、昼と夜の 3 分の 1 といった期間を明記している。
18. 神の民は、時について言及しているものも含め、黙示録のどの部分を取り除くことも禁じられている。
19. 1 日を 1 年と計算する原則は、数学的道具である。それは 1844 年で用済みになった訳ではない。
20. 1 日を 1 年と計算する原則は、ダニエル書と黙示録を連結させるのに必要な道具である。黙示録の象徴的な時を、ダニエル 12 章にある三つのタイムラインに結び付ける。
21. ダニエル 12 章にある三つのタイムラインを理解すべき時が来ている。
22. ダニエル 12 章を未来に当てはめるとき、この時代の新しい真理の発展となり、そういうことが最終世代のための「第一義的」適用となるのである。



第Ⅱ部



ダニエル 12 章の「警告」とは？

ダニエル 12 章は預言の象徴的表現で書かれていない。故に解説の必要はない。が、預言の「用語」といった語句が含まれている。それらを(a)ヘブル語の原語においてたどり、(b)現代の言葉に翻訳し、(c)歴史的関連を得るために相互参照し、(d)他の預言聖句との相互関係を示す必要がある(特に同じ最終時代の諸事件について言及しているマタイ 24 章と黙示録 13 章)。

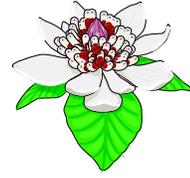
従って本章は：(a)ダニエル 12 章の内容を定義し、(b)中で述べられている基本概念を定め、(c)用語を定義づけ、(d)用語を黙示録内の預言と関連づけ、(e)この研究に含まれる概念を定義するための試みである。

ダニエル 12 章中の警告の本質を見出すために、次の質問の答えを得なければならない：

1. ダニエル 12 章の「質問」とは？
2. イエスがお与えになった「答え」とは？
3. 「憎むべきもの」とは？
4. 「荒らす(荒廃)」とは？
5. ダニエル 12 章の「荒す憎むべきもの」とは？
6. 「二重の適用」とは？
7. 「警告」とは？
8. 「最後のテスト」とは？
9. 「生ける者の裁き」とは？
10. 「ふるい」とは？
11. 「神の印」とは？
12. 「大いなる叫びの警告」とは？
13. 「第三天使の警告の使命」とは？

これらの質問が答えられて、用語の定義づけが成されるとき、ダニエル 12 章に書かれている最終時代の預言のタイムラインにおける警告とは何であるかが分かってくる。

第 1 章



「質問」とは？

イエスの弟子たちは質問をした。既に天に住んでいる聖徒たちも質問をした（ダニエル 8:13 参照）。我々も質問を投げかけている。ダニエルも 12 章で質問をしている。どのような質問なのか。

「どうぞお話しください。…あなたがまたおいでになる時や、世の終わりには、どんな前兆がありますか」マタイ 24:3。

「そこで、われダニエルが見ていると、ほかにまたふたりの者〔聖徒〕が…立っていた。わたしは…言った、『この異常なできごとは、いつになって終るでしょうか』と」ダニエル 12:5, 6。

「わが主よ、これらの事の結末はどんなでしょうか」ダニエル 12:8。

いつになって終るでしょうか？

ダニエルは質問をした。その 500 年後、弟子たちが同じ質問をしていた。それは各時代の聖書研究者が抱いた質問であったが、最終世代にとってそれはますます緊急で切実なものとなる。

この質問とそれに伴う答えが、ダニエル 12 章の三つのタイムラインを理解する鍵となる。

では、その答えは？

第2章



「答え」とは？

質問に答えられるのは、イエス・キリストである。マタイ 24 章で弟子たちの質問に答えられたのはキリストであり、ダニエル 12 章のタイムラインを与えることでダニエルの質問に答えられたのもキリストであった(かの亜麻布を着て川の水の上にいる人)*。マタイ 24 章とダニエル 12 章の預言は密接に関係している。

質問：

マタイ 24:3

「またオリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとにきて言った、『どうぞお話をください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか。』」

ダニエル 12:6

「わたしは、かの亜麻布を着て川の水の上にいる人にむかって言った、『この異常なできごとは、いつになって終るでしょうか』と。」

質問は密接に関係していて、答えも密接に関係している。

答え：

マタイ 24:15,16

預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものが、聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。」

ダニエル 12:11

「常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、1290 日が定められている。」

* ダニエル 12:7 の「かの亜麻布を着て川の水の上にいる人」がイエスであることについては、4BC858、9 を参照。

イエスは最も明確な方法で、マタイ 24 章で語られている諸事件をダニエル書と関連づけられた。弟子たちの質問に対する彼の答えは、「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきもの」に着目せよと語られたことで、この関係をはっきりと示している（マタイ 24:15）。

「荒らす憎むべきもの(または荒すことをなす罪)」については、ダニエル書の次の箇所で言及されている：ダニエル 8:12,13,23；9:27；11:31 そして 12:11。これらはすべてダニエルの時代の後に起こることであったので、預言と考えることができる。但し、これらのいくつかは異なった歴史的諸事件について述べられたものであり、従って各々に正しい適用が成されねばならない。

次に挙げる事柄の前に、「荒らす憎むべきもの」の定義づけと鑑定が成されねばならない：

- a. マタイ 24 章とダニエル 12:11 の関係は成り立つ。
- b. ダニエル 12 章の預言のタイムラインは理解され得る。
- c. 歴史的諸事件はその預言の言説と関連している。

弟子たちの時代、荒らす憎むべきものとは何者であったのか。暗黒時代においては何者であったのか。未来においては何者であるのだろうか。

第 3 章



「憎むべきもの(忌むべきこと)」とは？

預言をお与えになり、それを弟子たちに繰り返し話され、聖書内の別の類似する聖句でその正体をはっきり明かされたお方を、どれほど沢山の聖書研究者が無視するかを考えると、全く驚くばかりである。あまりにも多くの人たちがイエスの言葉は無視し、イエス御自身によって与えられた明確な説明よりも他の紛らわしい解説を組み立てようと努力するのは、信じ難いことである。

この「荒らす憎むべきもの」は、預言の幻でダニエルに示された。イエスのしもべたちに近々降りかかる出来事を示すために神がお与えになり、イエスは天使を送ってそのしもべダニエルに表された。約 500 年後、再びマタイ 24 章 15 節でそれに注意を向けられたのはイエスであった。ルカ 21 章 20,21 節の平行聖句で、この憎むべきものが何者であるかを正確に説明されたのもイエスである。

マタイ 24:15,16

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものが、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、その時、……山へ逃げよ。」

ルカ 21:20,21

「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは滅亡〔荒廃〕が近づいたとさとりなさい。その時、……人々は山へ逃げよ。」

マタイ 24 章は「荒らす憎むべきもの(abomination of desolation)について言及しているが、ルカ 21 章では用語が「滅亡(desolation)に短縮されている。「山へ逃げよ」という類似した文脈と勧告によって、これらは同一の意味であることが立証される。マタイにおいてイエスは「憎むべきもの(abomination)」について言及しているが、ルカではそれが単に「軍隊」として述べられている。聖書の相互参照によって、「憎むべきもの」はローマであることが分かる！

1 世紀以上もの間、神の安息日遵守者たちはマタイによる福音書とダニエル書の「荒らす憎むべきもの」をその過去と未来の歴史的役割においてローマ（最初は異教、それから法王教）としてきた：

「『預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものが』打ち立てられるとき、イエスの民は、脱出の日が安息日にならないよう祈ることになっている。イエスはダニエル 8 章 13 節と 9 章 27 節について言及していた。ダニエル 8 章に出てくる小さい角の勢力は、異教と法王教ローマの両方を表している。最初ローマ軍がエルサレムを脅かしたとき(紀元 66~70 年)、それが『荒らす憎むべきもの』を打ち立てた。．．．我々は再臨の直前に再び『荒らす憎むべきもの』が神の民の宗教自由を脅かすことを知っている…」安息日学校教課 1988 年 11 月 5 日、第六課。

すべての憶測と推論をわきにおいて、キリストの言葉から始めよう。聖書自身にその解釈をさせよう。この基礎的理解を得るまで、ダニエル 12 章を理解する用意はできない。荒らす憎むべきものは過去においても、現在も、また将来もローマである。

ダニエル 12 章を追究する者は、歴史主義者たちと提携することが必須である。

「荒らす憎むべきもの(ダニエル 9:27、11:31、12:11 を参照)。ルカによる福音書の類似聖句は次のようである：『エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは滅亡が近づいたとさとりなさい』（ルカ 21:20）。予告された事件は、明らかに紀元 70 年に起こったローマによるエルサレムの滅亡である」（マタイ 25:15 の注解）5BC499。

「…初めにダニエルは、ローマがその異教帝国の様相で、ユダヤ人と初代クリスチャンに戦いを挑み、それから法王教の様相で、我々の時代そして未来に至るまで真の教会に戦いを挑んでいるのを見た」（ダニエル 8:5-11 の注解）4 B C 841。

「…これは少なくとも部分的に、紀元 70 年にローマ軍がユダヤ国家に加えた恐怖と残虐行為について言及している」（ダニエル 9:27 注解）4 B C 855。

歴史主義者たちは「荒らす憎むべきもの」がローマを指していることを常に理解していた。これがプロテスタント宗教改革とアドベンチズムの一貫した見解である。これからの預言解説者たちがこの足場から離れるならば、暗闇と混乱は避けられない。この理解がないと、ダニエル 12 章にある三つのタイムラインの意味を洞察することはできない。

バイブル・コメンタリー(SDA 聖書注解)の引用文をまとめると、預言者ダニエルは「荒らす憎むべきもの」を次のように見たはずである：

ローマ—紀元 70 年に起こったエルサレム滅亡における異教の様相

ローマ—クリスチャンの迫害における法王教の様相（538-1798 年）

ローマ—未来の迫害における法王教の様相（4 B C 841）

未来の迫害における「荒らす憎むべきもの」は、ダニエル 12:7,11 のタイムラインで描かれている。それはエレン・ホワイトが書いた、これら未来の迫害に対する警告である：

「ダニエル書 12 章を読み、研究しようではないか。それは終わりの時まで、我々すべての者が理解を必要とするであろう警告である」
手紙 161、1903 年。

黙示録 13 と 14 章で見られる警告と連結するのが、このダニエル 12 章の警告である。「そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い」（13:3,13:15）にも警告がある。*

* この警告は政治的、霊的局面の広い意味がある。神の民の悩みは、迫害と恩恵期間の終了を含んでいる。

第4章



「荒らすもの（荒廃）」とは？

定義：

荒廃： 「破壊、荒涼、荒れ廃れること、混乱、無秩序、略奪」（ウェブスター辞典）

預言者ダニエルは、預言中三つの明確な荒廃（破壊）を見た：

ダニエル 9:26,27	宮とエルサレムの破壊（紀元 70 年）。
ダニエル 7:20,21,25 8:9-13,24 11:31	ヨーロッパにおけるキリスト教会の破壊（荒廃）または迫害。 法王至上権 No.1 （538-1798 年）。
ダニエル 12:11,7 11:41-44 黙示録 13:7	黙示録 1 3 章にあるような荒廃や迫害が未来にやってくる。 法王至上権 No.2 。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

法王至上権 No.2 は、538-1798 年までヨーロッパで吹き荒れたものとは異なる。黙示録 13 章で描かれているように、ヨーロッパだけでなく世界規模になる。

「…その致命的な傷もなおってしまった。そこで、**全地の人々**は驚きおそれて、その獣に従い…」黙示録 13:3。

「そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、**すべての部族、民族、国語、国民**を支配する権威を与えられた」黙示録 13:7。

「地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者は**みな**、この獣を拜むであろう」黙示録 13:8。

「…また、その獣の像を拜まない者を**みな**殺させた」黙示録 13:15。

預言者ダニエルによって言われたこの荒らす憎むべきものは、ダニエル 12:7,11 で言及されているのと同じ荒らす憎むべきものであり、このダニエル 12 章の預言は黙示録 13 章と平行している。

ダニエル書の預言のタイムラインにはすべてローマが登場する：

			<u>ローマは</u> ↓
ダニエル 2 章	像	鉄のすね	鉄
ダニエル 7 章	獣	第四の獣	小さい角
ダニエル 8 章	角	小さい角	荒すことをなす罪
ダニエル 11 章	王	(15-45 節)	荒らす憎むべきもの
ダニエル 12 章	(象徴がなく名前のみ)		荒らす憎むべきもの

ローマを象徴する像のすね、そして鉄と粘土はもみ殻のようになり、吹き払われて跡形もなくなるまで続く。7章に出てくる第四の獣には小さい角があり、滅ぼされて「燃える火に投げ入れられ」るまで続く(ダニエル 7:11)。すべてのタイムラインにおいて、ローマは時の終わりまで続く。それがダニエル書と黙示録の主な登場者の一つである。全時代にわたってその始めから、神の民の大迫害者そして荒らす者なのである。イエスの時代、神の民を荒らし迫害したのはローマ帝国(異教ローマ)であった。ユダヤ人を支配し、イエスの十字架刑を承認し、そして初代クリスチャンたちを迫害したのはローマであった。

ダニエル 7:25 と黙示録 12:6,14;13:2 の預言通り、1260 年間ヨーロッパにおいて至上権を振るい、キリスト教会を迫害(荒ら)したのは法王教ローマであった。1798 年に死ぬほどの傷を受けながら、その傷も治ってしまったのはローマ法王教であった。黙示録 13 章の中で、ローマは法王至上権 No. 2を確立する。今度はヨーロッパだけでなく、全地の人々(全世界)がローマに従うようになるのである(黙示録 13:3-7)。

イエスが弟子たちに答えられたとき、彼は荒らす憎むべきものとしてローマ軍のことを言われた。紀元 70 年にエルサレムを破壊した(荒廃させた)憎むべきものは、まさしくローマであった。ローマ帝国は 476 年に没落したが、それを引き継ぐかのように法王教ローマが興った。*

* 「憎むべきもの」のヘブル語はシグッツ(Shigguts)といい、清くない食物や神に忌み嫌われるものの意であった。またこの語は、基本的に太陽を拝んでいた偶像崇拜者である異教の国々に当てはめられた。これらの国々は、特に人身御供やあらゆる残虐行為がはびこって汚れた慣習や血なまぐさい宗教儀式で知られていた。法王教ローマは、異教の(憎むべき)慣習を強化吸収し、ヨハネは「イエスの証人の血に酔いしれているのを見た」のであった。



第5章

ダニエル 12 章の「荒らす憎むべきもの」とは？

荒らす憎むべきものについて、ダニエル 12 章に次のように表わされている:

「常供の燔祭が取り除かれ、荒らす憎むべきものが立てられる時から、1290 日が定められている」ダニエル 12:11。

マタイ 24:15 でイエスはこの用語を解説なさり、ルカ 21:20 で ローマの軍隊 として定義された。キリストの時代、憎むべきものは異教ローマすなわちローマ帝国とされていた。ローマ帝国は法王教ローマによって引き継がれた。

538 年から 1798 年までの荒らす憎むべきものについて言及しているダニエル 8 章と 11 章の預言を成就させたのは、法王教ローマであった。

従って、いかなる最終時代の適用も法王教ローマでなければならない。
将来ダニエル 12:11 の預言を再び成就するのは法王教ローマである。

荒らす憎むべきものは過去、現在、未来に迫害を行う法王教ローマを描いている。紀元 70 年にエルサレムを 荒らしたのはローマであった。1260 年間 (ダニエル 7 章) 聖徒たちを荒らしたのは法王教ローマであり、将来神の民を荒らす (迫害する) のは法王教ローマである (ダニエル 12 章)。

従って、「荒らす憎むべきもの」という用語は特に迫害に関与し、ダニエル 12 章における未来の脅威として描かれている法王教である。

ダニエル 12 : 11 の
「荒らす憎むべきもの」は
未来に復活する法王教ローマ

もしサタンが曖昧にする真理が一つだけあるとしたら、彼はこの点を曖昧にする。もしダニエル 12 章にある三つのタイムラインを理解するために必要な真理が一つあるとすれば、それはこれである。つまり「荒らす憎むべきもの」はイエスの再臨直前に聖徒たちを迫害する法王教ローマである。法王教ローマこそは黙示録 13 章の獣であり、黙示録 14 章にある第三天使の使命の焦点である。

第 6 章



「二重の適用」とは？

定義：

「…『どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか』と言った。イエスは弟子たちに答えるにあたって、エルサレムの滅亡と御自分がおいでになる大いなる日とを別々に取り上げられなかった。主はこの二つの出来事を一緒に混ぜて描写された。イエスが御自分のご覧になった通りに未来の諸事件を弟子たちに示されたら、彼らはその光景に耐えることができなかつたであろう。彼らに対する思いやりから、主は二つの大きな危機を混ぜて描写し、その意味を弟子たちが自分で学ぶようにされた。主がエルサレムの滅亡のことを言われたとき、その預言の言葉はエルサレムの滅亡という事件を超えて最後の大火の日にまで及んでいた。その日には、『主はそのおられる所を出て、地に住むものの不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやおおうことがない』。この話の全体は、ただ弟子たちのためだけでなく、地上歴史の最後の場面に住む者たちのために語られたのであった」Ⅲ希望 92 ページ。

「彼が言われた預言には二重の意味があった。それは、エルサレムの滅亡を予告するとともに、最後の大いなる日の恐怖をも予表していた」大争闘上 12 ページ。

「しかし、エルサレムに下った刑罰に関する救い主の預言は、もう一つの成就を見なければならぬ。あの恐ろしいエルサレムの滅亡も、そのできごとのほんのかすかな影にしかすぎないのである。すなわち、われわれは、選ばれた都の滅亡のなかに、神のあわれみを拒み、神の律法をふみにじってきた世界の運命を見るのである」大争闘上 25、26 ページ。

弟子たちは二重の質問をした：

1. 「いつ、そんなこと [エルサレム滅亡] が起るのでしょうか？」 マタイ 24:3。
2. 「あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか？」 同上。

イエスは二重の答えを与えられた。預言の解説者がマタイ 24:3 の二重の適用を理解するまでは、

預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものについての二重の言及を理解することはできない。

マタイ 24:15 の預言は、二重の適用があるが、預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものは、三つの歴史的イベントに当てはまる。

「三つの歴史的イベント」

1. ダニエル 9:26,27 紀元 70 年のエルサレム滅亡
2. ダニエル 7:8;11:31 538-1798 年の法王至上権 No.1 ヨーロッパにおける迫害
3. ダニエル 12:7,11 最終時代の傷が治ってしまった法王至上権 No.2 (全世界規模—黙 13 章)

538-1798 年法王至上権について言及しているマタイ 24:15 から、適切な適用がなされてきた。初期のアドベンチスト先駆者たちとエレン・ホワイトは神の靈感の下、この適用を確立した。ところが今日、これは二義的な適用であったことを我々は認める。それはまだ、最終時代の脅威でも「神のあわれみを拒み、その律法を踏みにじった世界の」最終的運命でもなかったからである。

定義：「首位」というのは、必ずしも時や順序ではなく、第一に重要なものという意味。二義的というのは、重要性において劣るということ。

今日、538-1798 年の法王至上権に関するマタイ 24:15 の二義的適用は、将来、最終時代の脅威を確かに目の当たりにする世代にとって、首位の重要性を占める適用に道を譲らねばならない。従って、マタイ 24 章とダニエル 12 章の未来への適用は、現在第一に重要とならねばならない。

最終世代の見地という利点から、マタイ 24:15 には二つの主な適用がなされることは明白である：

- a. エルサレムの滅亡、紀元 70 年
- b. 世の終わり

538-1798 年にかけての法王至上権に関する適用は、二義的なものである。

マタイ 24:15 の荒らす憎むべきもの に関する一義的かつ二重の適用

一義的適用その(1)
ダニエル 9:26,27
エルサレム、紀元 70 年

一義的適用その(2)
ダニエル 12:7-11
世の終わり

二義的適用
538-1798 年の法王至上権

「エルサレムの滅亡は、世界を襲う最後の滅亡の象徴である。エルサレムの破壊によって部分的成就を見た預言は、もっと直接的には、最後の時代に適用されるべきものである。わたしたちは今、大きな厳粛な事件の門口に立っている。かつてなかったような危機が目前にある」祝福の山 151 ページ。



第7章

マタイ 24:15 の「第一の適用」とは何であったか？

聖書研究者がマタイ 24:15 の二重の適用について明瞭な概念を持つまで、また第一の適用（紀元 66-70 年）についてよく知るまでは、ダニエル 12:11 で預言者が述べている「荒らす憎むべきもの」を引用して第二の適用をなすことはできない。これら二重の適用における第一と第二の両方について十分な見識を得たときのみ、ダニエル 12 章にある三つのタイムラインとその中に含まれる警告が理解できる。

従って、マタイ 24:15 の明瞭な見識を得るには、次の事が必要となる：

- a. イエスが用いられた言語、用語を理解する。
- b. エルサレム陥落の歴史的記録を再吟味する。

1. 歴史的背景：

「紀元 66 年の春^{*}、ローマに対する反乱が勃発したとき、エルサレムでは多くの血が流された。ユダヤ最後の総督ゲシウス・フルロスの下、ユダヤ人は異邦人を、異邦人はユダヤ人を虐殺し始め、ついには無秩序と無政府状態だけが残った。シリアの特使セステウス・ガルスはユダヤ駐留軍の指揮を執り、紀元 66 年秋、エルサレムに向かって進軍した。一時は神殿の北側まで侵攻したが、反撃されてどういう訳か撤退してしまった。イエスの警告（マタイ 24:15-20）に注意を払っていたクリスチャンたちは、この機会にエルサレムを離れてペレアのペラに逃げ場を見出した。紀元 66 年暮れから 70 年の春まで、エルサレムはローマのい

^{*} クリスチャンが紀元 66 年に都を離れたという事実に注目されたい。それは紀元 70 年のエルサレム陥落より 3 年半前であった。この 3 年半という期間は、ダニエル 12 章にあるタイムラインと平行している。

かなる直接攻撃も受けなかった。紀元 67 年にこの地にやってきたベスパシアンは、国を降伏させるという計画に従い、エルサレムの様々な政治派閥を互いに戦わせ、弱体化させた。紀元 69 年にベスパシアンが皇帝の宣言を受けたとき、パレスチナのほとんどはローマの手中にあったが、ほとんど荒野と化してしまっていた。ベスパシアンの息子ティトゥスは、軍隊の指揮を執り、直ちにユダヤの強力な首都エルサレム攻略の用意をした」8 B C 560。

2. 「聖なる場所」(マタイ 24:15) の定義

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものが、聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ」マタイ 24:15, 16。

荒らす憎むべきものであったローマ軍が立つことになっていた「聖なる場所」とは何であったのか。紀元 66 年にセスティウス・ガルスがエルサレム神殿の北壁まで侵攻したことは事実である。が、彼は神殿そのもの、すなわち聖所にも至聖所にも侵入しなかった。彼は「反撃されて、どういう訳か撤退してしまった」(8 B C 560)。当時ローマ軍が宮の聖所に侵入しなかったとすれば、マタイ 24:15 の成就として彼らが立った「聖なる場所」とは何であったのか：

「…エルサレムの城外、数マイルにわたる聖地に、ローマ人の異教の軍旗が立てられる時、キリストに従う者たちは、安全をもとめて逃げなければならなかった」大争闘上 12 ページ。

それならば、また疑問が浮かんでくる：壁の外側の「聖なる場所」とは厳密に何であったのか。それを神聖なものにしたのは。またその目的とは？

解説：

エルサレムの父祖たちは厳格な安息日遵守者であった。彼らは安息日が始まる時、必ずエルサレムの門に錠をかけ、安息日の間商人たちが商売を続けることのできないようにした。土曜日の夕方日が沈むまでは、通行止めであった。世俗の行商人たちは壁の近くにキャンプを張り、商品を広げて壁の上にいる人や、安息日の間出入りをするかもしれない門の近くにいる人の注意を引き付けようとした。そこで、このような人の気を散らす者や違反者を除外するために、壁から数キロにわたり「安息日の聖地」または「聖なる場所」が出来上がった。そこでは世俗の商売人たちがキャンプを張ることができなかった。

3. ローマ軍はその安息日の聖地にどうやって立ったのか？

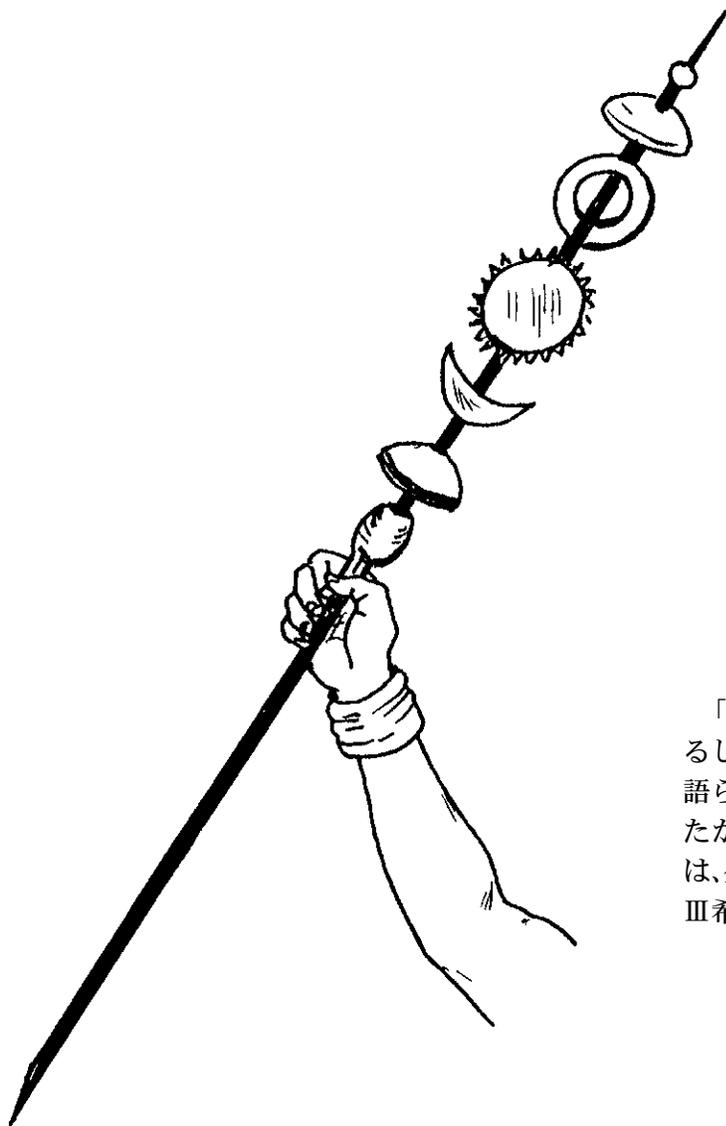
彼らは自分たちの偶像の旗印、軍旗また象徴を立てた。ローマの征服を宣言するため、それらを聖地に突き刺したのであった！

我々の旗と同様、ローマの軍旗はローマの権威のしるし、または象徴であった。異教ローマは宗教と世俗的権力の結合したものであった。異教ローマは太陽崇拝と世俗的権威の結合したものであったので、その旗印には太陽や、その他のものの象徴が見られた。

マタイ 24:15 で、ローマがその権威のしるし、すなわち太陽崇拝のシンボル(象徴)を安息日の聖地に置くとき、それが町を出て山に逃れる時であることを知るであろうと、イエスは弟子たちに説明された。

我々がこの重大な状況を理解するまでは、マタイ 24:15 の二重適用における終末の預言への適用を理解する用意ができない。





ローマの軍旗

「キリストはエルサレムにのぞむ滅亡のしるしを弟子たちに与え、逃れる方法を彼らに語られた。... クリスチャンはこの警告にしたがったので、エルサレムの陥落のときには、クリスチャンはひとりも死ななかった」
Ⅲ希望95。

★ M.C マックスウエル著、「神はかえりみられる」2巻、28ページにローマ兵の持つ軍旗の絵がある。太陽礼拝のシンボルが見られる。



第8章

マタイ 24:15 の「第二の適用」とは？

マタイ 24 章 3 節で、弟子たちは二重の質問をした：

1. 「いつ、そんなこと(エルサレム滅亡)が起るのでしょうか？」
2. 「あなたがおいでになる時や、世の終わりには、どんな前兆がありますか？」

イエスは二重の答えを与えられた：

「彼が言われた預言には、二重の意味があった。それは、エルサレムの滅亡を予告するとともに、最後の大きいなる日の恐怖をも予表していた」大争闘上 12 ページ。

最初の適用は彼らの時代に起ることになっていたが、より大掛かりな成就是世の終わりのものであった：

「しかし、エルサレムに下った刑罰に関する救い主の預言は、もう一つの成就を見なければならぬ。あの恐ろしいエルサレムの滅亡も、そのできごとのほんのかすかな影にしかすぎないのである。すなわち、われわれは、選ばれた都の滅亡の中に、神のあわれみを拒み、神の律法をふみにじってきた世界の運命を見るのである」大争闘上 25、26 ページ。

この終末の成就是、マタイ 24:15 の、より大掛かりな、あるいは主要な成就なのである。しかしユダヤ人になされたのと同じ警告が、終末の神の民に当てはまるのである。

「キリストは、エルサレムの滅亡について弟子たちに警告を与え、彼らが逃れることができるようにし、滅亡の近いことを示すしるしをお与えになった。そのように、彼は、最後の滅亡の日について世界に警告を発し、すべてのものが来たるべき怒りから逃れるように、その近いことを示すしるしをお与えになった」大争闘上 27 ページ。

イエスはどのようなしるしをお与えになったのか。どのような警告なのか。それが接近するしるしとは何なのか。しるしや警告はマタイ 24:15 に見出される：

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきもの [神の安息日という聖地

を踏みにじる法王教ローマ] が聖なる場所に立つ [その権威のしるしである日曜
遵守令を神の残りの民の本拠地に据える] のを見たならば (読者よ、悟れ)、そ
のとき、ユダヤ [神の民の間] にいる人々は山へ逃げよ」マタイ 24:15、16。

合衆国内の多くの州で、日曜休業令あるいは「青い法律(blue laws)が敷かれたことはあったが、
いまだかつて国家レベルで日曜休業令に踏み切ったことはない。他国で行われたことはあるが、アメ
リカ合衆国では、そのようなことは憲法が禁じているのである：

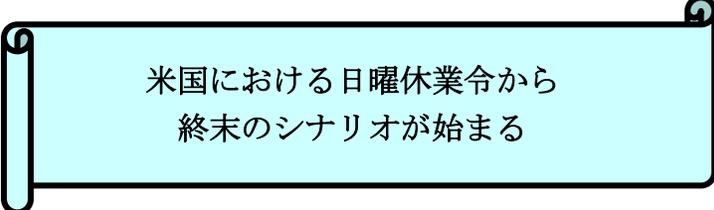
「憲法には、『国会は、宗教の設立に関する、もしくはその自由な活動を禁ずる
法律を制定してはならない』…国民の自由を擁護するこれらの条項にはなはだし
く違反することなしには、国権は、どんな宗教的法令も施行することはできない」
大争闘下 162 ページ。

「我々の国が憲法の原則をことごとくはね付けるとき、…我々は終わりが近いこ
とを知るのである」5 T451。

この宗教自由と繁栄の故に、合衆国は神の戒めと、イエスの信仰を守る残りの民の本拠地となっ
てきた。過去1世紀にわたり、三天使の使命という福音を世界中に携える手助けをしてきた。この事実
がアメリカ合衆国を終末の預言に一役買わせることになる (黙 13:11)。歴史を通じて、預言はずっ
と神の民に焦点を当ててきた。旧約時代、ユダヤ人は神の民であった。そして今日、黙示録 13 章と
ダニエル 12 章の中で、預言は神の民に焦点を当てている。

マタイ 24 章 15 節の警告がユダヤ人に与えられたように、世界歴史の終わりには、合衆国にいる
神の民がその同じ預言によって警告される。その成就が来たるべき荒廃から逃れるしるしとなる。

従って、アメリカ合衆国における**国家的日曜休業令**がマタイ 24 章 15 節の主な終末の成就であり、
ダニエル 12 章 7-12 節のタイムラインという最終シナリオの開始となる。



米国における日曜休業令から
終末のシナリオが始まる

第9章



「警告」とは？

マタイ 24:15 とダニエル 12 章に「警告」がある！

「ローマ軍によるエルサレム包囲がユダヤのクリスチャンたちにとって脱出のしるしとなったように、我が国〔合衆国〕が法王教の安息日を強制する法令でその権力を行使するとき、それが我々にとって**警告**のしるしとなる。その時こそ、大都会を出る時である。それはやがて、比較的小さな町から出て、人里離れた山の中の引っ込んだところに住まいを求めることの準備となる。」 5 T464, 465

「ダニエル 12 章を読み、研究しようではないか。それは終わりの時まで、我々すべての者が理解を必要とするであろう**警告**である」 エレン・G・ホワイト、手紙 161、1903 年。

マタイ 24:15 の同じ預言が、ダニエル 12 章で詳述されている。この警告がダニエル 12 章のタイムラインを開始する。

警告とは厳密に何のことなのか。それはアメリカ合衆国における国家的日曜休業令である。「我が国が、法王教の安息日を強制する法令でその権力を行使する…」。ではなぜ神の民は、大都会を出なければならないのか。どうしてそんなに急がねばならないのか。次に起ることは？イエスは何と言われたか？

「…山へ逃げよ。屋上にいる者は、家からものを取り出そうとして下におりな。畑にいる者は上着を取りにあとへもどるな。その日には、身重の女と乳飲み子を持つ女とは、不幸である。あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ。その時には、…**大きな患難**が起るからである」マタイ 24:16-21。

合衆国における日曜休業令とは？

「サタンの政策を制定し、為政者たちが自ら不法の者〔法王教〕の側につくのは、国家レベルで背教〔日曜休業令を制定〕する時である。その時、罪の柵目はいっぱいになる。国家レベルの背教が、荒廃（破滅）の合図である」2 SM373。

明らかにこの荒廃が、国家的—世界的日曜休業令に続いて速やかにやってくるので、イエスは、すぐに大都会を出るようにと警告されたのであった。持ち物や財産を処分したり、田舎での人生再出発の準備をしたりする時間はない。その時用意をするのでは遅すぎるのである。既に神の民の多くは、家族を連れて田舎に移っている。イエスの言葉を信じていた者で、エルサレムと共に滅びた者はひとりもないし、近い将来誰も町で滅びる必要はないのである。まだ大都会にいる人たちは、自らの生命を救うため、その時にはどのような方法を用いても直ちに出不ければいけない。そうなった時にどこへ行くべきか、今から考えておく必要がある。

国家的荒廃とは何であろう。誰もそれを経験したことはない。それは経済恐慌のことなのか。それは天災地変を伴う裁きのことなのか。戦争のことなのか。一斉に多くの事件が起きるのだろうか。合衆国は、いまだ国家レベルの荒廃を経験したことはない。この国の伝達機関が完全に麻痺し、食料や交通、薬品、電気がなくなるといのは想像し難いことであるが、そのような不和や混乱が町々を襲ってからは、出ることができなくなってしまう。

マタイ 24 章 15 節とダニエル 12 章の警告は、我々が自らの生命を救う手助けとなる多くの側面を持っている。但し、霊的な教えの方が、もっともっと大切である。

アメリカ合衆国における日曜休業令は、都市における神の裁きの開始を伝えるばかりでなく、天と地における諸事件、すなわちその頃地上に住んでいる人々の永遠の運命を決定する諸事件の開始を伝えるのである。



第 10 章



「最後のテスト」とは？

マタイ 24:15 の警告とダニエル 12:7-12 のタイムラインは、大都会を去るべき時が来たという警鐘を神の民に向かって鳴らすだけのものではない。アメリカ合衆国における日曜休業令は警報であり、預言の成就を知らせるサイレンの甲高い音である。地上での神の最後の働きにおいて、次の重大な動きを起こさせるきっかけとなる：

1. 獣の像を形成する。
2. 安息日対日曜日の闘争が最終世代にとって大いなる最後のテストとなる。
3. 最後のテストが生ける者の裁きを開始させる。
4. 生ける者の裁きの結果：
 - a. 獣の刻印が悪人に押され、
 - b. 神の印が義人に押される。
5. 十四万四千の形成。
6. 後の雨が降る。
7. 大いなる叫びにおいて三天使の使命が繰り返され、黙示録 18 章の天使によってふくれあがる。
8. 世界に向けての第三天使の警告。
9. 恩恵期間の終了。
10. 災害が降りかかり、死の法令が出される。
11. 神の民の最終的救出。

第 11 章



「獣の像」の形成とは？

「獣の像」の正体が明らかにされる前に、「獣」自身の正体を明らかにする必要がある。黙示録 13 章 1-10 節の「獣」は、紀元 538 年から 1798 年までヨーロッパで至上権を振るった法王教ローマを指す。この法王教勢力である「獣」は迫害者であった。しかし、法王教は教会と国家を合同させずして、迫害したり宗教上の法律を強制することはできなかった。ならば法王教は、政治的権力を用いて宗教上の法律を成立させ、それらを強制し、違反者を迫害することができたということである（黙示録 13:7 参照）。

黙示録 13 章 11 節で別の「獣」が登場する。突然龍のように物を言う小羊のような獣である。この「獣」は、プロテスタント・アメリカ（新世界）である。アメリカ合衆国におけるプロテスタント主義が、宗教上の法律を制定するために政教一致をもたらすとき、それが法王教という「獣」の像を形成するのである。

プロテスタント主義が合衆国において国家レベルの日曜休業令を制定するとき、「獣の像」が形成されるのである。

「米国が獣の像を造るためには、宗教権力が政府を支配し、教会が、教会自身の目的を遂行するために、国家の権力を用いるようにならなければならない」大争闘下 163 ページ。

「獣の像は恩恵期が閉じる前に形成されることを、主は私に明確に示された。それによって彼らの永遠の運命が決定されるという、神の民にとっての大いなるテストとなるからである」7 BC976。*

* 黙示録 13 章の獣は、ダニエル 12:7.11 の「荒らす憎むべきもの」である。米国における日曜休業令は、ダニエル 12 章のタイムラインで示されている最終時代のシナリオの開始である。



第 12 章

「最終世代にとって大いなるテストとなる 安息日論争」とは？

「安息日は、特に論争点となっている真理であるから、忠誠の大試金石となる。最後の試練(テスト)が人々を襲うとき、神に仕える者と神に仕えない者の区別が明らかになる。第四条の戒めに反して、国家の法律に従って偽りの安息日を守ることは、神に敵対する権力に忠誠を尽くすという表明であり、一方、神の戒めに従って真の安息日を守ることは、創造主に対する忠誠の証拠である。一方は、地上の権力に服従するしるしを受け入れることによって、獣の刻印を受け、他方は、神の権威に対する忠誠のしるしを選んで、神の印を受けるのである」大争闘下 375 ページ。

明らかに、この最後のテストに直面するのは過去の世代ではない。現在生きている者たちである。テストされるのは最終世代の残りの民であり、このテストによって彼らは裁きに出廷するのである。従ってこのテストが、生ける者の裁きの開始となるのである。

第 13 章



「生ける者の裁き」とは？

「審判において、記録の書が開かれるときに、イエスを信じたすべての人の生涯が神の前で調べられる。われわれの助け主であられるイエスは、この地上に最初に生存した人々から始めて、各時代の人々のためにとりなし、現在生きている人々で終わられる」大争闘下 215 ページ。

「審判は今、天の聖所において進行中である。長年にわたって、この働きは続けられてきた。間もなく—その時がいつかはだれも知らないが—生きている人々の番になる」大争闘下 224 ページ。

裁きがいつ生きている人々の番になるか、誰も知らないことは事実である。アメリカ合衆国における日曜休業令がいつやってくるのか、我々は知らないからである。そのような法律が通過するとき、それが生きている人々が吟味されるころの最後のテストとなることを、我々は確かに知ることができるのである。

「法令が出されて偽の安息日を強要し、第三天使の大いなる叫びが獣とその像を拝むことに対して警告するとき、偽物と本物との間にはっきりと線が引かれることだろう。その時、尚も罪にとどまる者たちは、獣の刻印を受けるであろう」E v 234, 235。

「第三天使の使命が閉じられると、もはや地の罪深い住民のためのあわれみの嘆願はなされない。…一人の天使が地から戻ってきて、自分の働きが終わったことを告げる。すなわち、最後の試み(テスト)が世界に臨み、神の戒めに忠実であることを示した者はみな、『生ける神の印』を受けたのである」大争闘下 385, 386 ページ。

アメリカ合衆国における日曜休業令を目の当たりにする残りの民、すなわち最後の世代は、それが自分たちに裁きをもたらす最後のテストであることを知るであろう。従って彼らは、大いなる叫びにおいて第一天使の使命をはっきりと打ち出すのである。それが第二、第三天使と結合する：

「大声で言った(大いなる叫び)、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからである。…』」黙示録 14:7。*

この地上で悪人に下る裁きと、天において進行中の裁きを混同させるべきではない。

* この地上に注がれるさばきは、人間自身の悪、または他の自然災害の結果であり、天で進行中の裁きと混同してはならない。



第14章

「ふるい」とは？

多くの時代にわたって、神の民は試み、迫害、悩み、誘惑、その他多くのふるいを経験してきたことは事実である。但し、最後のテストに直面する最後の世代は、その時自分たちが生ける者の裁きを通過していることを知るのである。生ける神の印を受けるため、彼らはキリストの血によって勝利者とならなければならない。その時彼らには、最後の七つの災害を仲保者なしで生き延びるための力が添えられる。これが特別なふるいである：

「わたしは、深い信仰と苦悶の叫びをあげて、神に嘆願している人々を見た。彼らの顔は青ざめ、深い憂いの色を帯びていて、彼らの内的苦悶を表していた。その表情には、堅忍不拔の精神と非常な熱心さとがあらわれていた。彼らの額からは、大きな汗のしずくが落ちた。彼らの顔には、時々、神の嘉納のしるしが輝くのであったが、また、元の同じ厳粛で熱心と憂慮に満ちた表情に戻る所以であった。

悪天使たちは、彼らを取り囲み、彼らを闇の中に閉じこめて、イエスを見えないようにしていた。それは、彼らが周りの暗黒に目を向けて、神に信頼せず、神に対してつぶやくようになるためであった。彼らの唯一の安全な方法は、目を上に向けていることであった。神の天使たちは、神の民を守っていた。そして、悪天使たちの悪影響がこれらの熱心な人々の周りに迫ってくるたびに、天使たちは、絶えず彼らの翼を動かして、濃い暗黒を追い払っていた。

祈っている人々が、彼らの熱心な叫びをつづけていると、時々、イエスからの光が彼らに輝き、彼らの心を励まし、彼らの顔を輝かせた。ある人々は、この苦悶と祈りに加わらないのをわたしは見た。彼らは、不注意で無関心なように見えた。彼らは周りの暗黒に抵抗しようとしなかったので、暗黒が厚い雲のように彼らを囲んだ。神の天使たちは、この人々を去って、熱心に祈っている人々を助けに行った。悪天使たちに抵抗するために全力をあげて戦い、忍耐強く神を呼び求めて努力しているすべての者を助けるために、神の天使たちが急いでいくのをわたしは見た。しかし、神の天使たちは、自らを助けようと努力しない人々を去った。そして、わたしは彼らを見失ってしまった。

わたしは、わたしが見たふるいの意味をたずねた。…

天使は、『聞きなさい』と言った。やがて、わたしは、多くの楽器が完全に調和して、美しい音楽を奏でているのを聞いた。それは、わたしがこれまでに聞いたこともない美しい音楽で、恵みとあわれみに満ち、高尚で聖なる喜びにあふれて

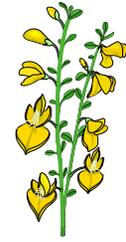
いた。それは、わたしの全身を感動に震わせた。天使は『見なさい』と言った。すると、わたしは前に大いに**ふるわれる**のを見たその一団の人々に注目した。わたしは、前に涙を流し、苦悶しているのを見たその人々を見せられた。彼らの周りの守護の天使は二倍に増やされた。そして人々は、頭から足まで、武具をまとっていた。彼らは、兵卒の隊のように、規律正しく動いた。彼らの顔は、彼らの耐えてきた激しい争闘と経てきた苦悶とを表していた。しかし、彼らの容貌は、激しい内的苦悶のあとがあったとはいえ、今は、天の光と栄光に輝いていた。彼らは、**勝利を得た**。そして、彼らは、深い感謝にあふれ、聖なる喜びに満たされていたのである」初代文集 437-439 ページ。

一連の最終諸事件を理解することが大切である。これらの諸事件には順序がある：

1. 米国における日曜休業令。これが獣の像を形成する。日曜休業令とその支持が獣の刻印となる。日曜日と安息日のどちらを選ぶかが、**最後のテスト**となる。
2. 神の民が最終的決断を下す段階で、霊的**ふるい**が起る。神の民は神の印という勝利を得る。こうして彼らは生ける者の裁きを通過する。
3. 彼らは後の雨という慰めを受け、それによって彼らは全世界に第三天使の大いなる叫びを与える資格を得る。

神の民がこのように準備されるまで、聖霊降下による大いなる叫びが与えられることはない。**裁きは神の家から始まり**、中でも老人たちから始められる。そして神の民の恩恵期間が終了する。その時、彼らは黙示録 18 章の天使の力を受け、世界に向け大いなる叫びを発する。その後世界も最終的決断を迫られ、**それから世の恩恵期間が閉じられる**。

第 15 章



「神の印」とは？

「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない」大争闘下 140、141 ページ。

仲保者なしに立つことのできるのは、最終世代の義人たちだけである。「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき」最後の七つの災いが注がれる。つまり、仲保者なしに立つ最後の世代は、最後の七つの災いを生き延びるということである。どうしてこのようなことが可能なのだろうか：

「生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない」初代文集 149 ページ。

最終世代がイエスのみ像(かたち)を完全に反映して、もはや仲保者が要らなくなるということがどうしてあり得るのだろうか。答えは極めて単純である。ふるいにおいて彼らが自己と罪に勝利するとき、彼らはイエスのみ像を完全に反映するための状態に印されるのである。それができるのは、天父のみ名(品性)を持つことにおいてであり、彼らの額(心)にそれが刻まれることによるのである。

「また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上ってくるのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、『わたしたちの神のしもべらの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない』」黙示録 7:2、3。

「…十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた。…彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは (神のみ座の前で—欽定訳) 傷のない者であった」黙示録 14:1-5。

この印する過程は、次のように描かれている：

「ヨシュアと御使に関するゼカリヤの幻は、贖罪の大いなる日〔生ける者の裁き〕の最後の場面における神の民の経験に、特別に当てはまる。その時、残りの教会は大きな試練と苦悩〔最後のテスト、ふるい〕に陥る。…神のあわれみだけが、彼らの唯一の希望である。祈りが彼らの唯一の防御である。…彼らは自分たちの生活の罪深さを、十分認めている。彼らは自分たちの弱さと無価値さを知っている。…彼〔サタン〕は彼らの信仰を失わせて、彼の誘惑に屈服させ、神への忠誠から引き離そう〔そして獣の刻印を受けさせよう〕と望むのである…。

しかしキリストに従った人々は、罪を犯しはしたけれども、全的に降伏してサタンの手下たちに支配されてはいなかったのである。彼らはその罪を悔い改めて〔捨て去って〕、謙遜と悔恨の念をもって主を求めた。…イエスは、彼らを火で練られた金のように取り出される。彼らは、世俗的なところが取り去られて、キリストのかたちを完全に表すようになるのである。…神の民の苦悩と屈辱とは、罪の結果失われた品性の力と高貴さを、彼らが回復しつつある間違いのない証拠である…。

…キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚される事はないのである。…今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全な者となった…。

…目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の印を押していた。…それは地上から贖われた十四万四千人…。

ここで御使の言葉が完全に成就する。…キリストは彼の民の贖い主、救い主としてあらわされる」国と指導者下 193-197 ページ。

生ける神の印は額、すなわち心(思い)に押されるということを理解することが必須である。またその正しいタイミングを知ることも重要である。つまりそれは生ける者の裁き(贖罪の日としても知られている)において押されるのである：

「真に悔い改めた者の罪が、ついに贖われて、天の記録から消されて、もはや思い出すことも心に浮かぶこともなくなるように、象徴では罪は荒野に追いやられ、会衆から永遠に切り離された」あけぼの上 422、423 ページ。

「彼らの罪は前もって裁きに持っていかれ、赦しの文字が書かれた。彼らの**罪は忘却の彼方へと取り去られてしまった**…」3SG135。

「彼らの罪は、前もってさばかれて、消し去られている。彼らは、**罪を思い出すことができない**」大争闘下 393 ページ。

これらの引用文は、最後の世代に臨む**生ける神の印**の意味を理解する上で、絶対に必要不可欠である。彼らは米国における日曜休業令という**最後のテスト**の下に、生ける者の裁きを通過しなければならぬ。^{*}

^{*} 「神の印」または承認の印は、全世代の神の民に与えられてきた。しかし、最終世代に与えられる「生ける神の印」と混同させてはならない。これは彼らが仲保者なくして、最後の七つの災いを生き延びるために与えられるものである。

第 16 章



「大いなる叫びの警告」とは？

今日、三天使の使命を理解し宣言する人たちがいることは確かであるが、ラッパの音色にミュート(弱音器)がかけられているようである。しかし、これらのメッセージは**大いなる叫び**をもって発せられねばならないと、聖書は言明している。世界中でイエスの御名を認めない人は何千万といる。アドベンチズムを聞いたことのない人はいくらでもいる。三天使の使命について説明することのできないアドベンチストも、数え切れないほどである。このような人たちにとって、第三天使の使命などほとんど謎に等しい。それでも世の終わりには、大いなる叫びをもって発せられるであろうと、預言者は言った。

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は…**大声**で言った、…」
黙示録 14:6, 7。

「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、**大声**で言った、…」黙示録 14:9。

「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。彼は**力強い声**で叫んで言った、…」黙示録 18:1、2。

これらのメッセージの内容とは？

1. a. 永遠の福音
b. 神を恐れ神に栄光を帰す
c. 神の裁きの時が来た
d. 第七日安息日を守ることによって創造主を拝む
2. a. バビロン(背教した宗教)は道徳的に倒れた
b. すべての国々は偽の宗教によって墮落
3. a. 獣(ローマ法王教)を拝むな
b. その像(背教したキリスト教界)を拝むな
c. 獣の刻印(日曜遵守)を受けるな
d. それを信じ支持するな
e. もし獣の刻印を受ければ最後の七つの災いで苦しめられる
f. 最後の七つの災いは混ぜものなしに注がれる
g. 獣を拝むすべての者は火の池に入れられる
h. 神の民は神の戒めを守りイエスの信仰を持ち続ける
4. a. バビロンは教会と国家の結合をもって完全に崩壊する

- b. 背教した宗教界が衰退：すなわち教会は悪霊の巢窟に
- c. すべての国々は偽の宗教で汚染される
- d. 我が民よ、彼女から離れよ
- e. 災いの時が来た：バビロンの最期

第四天使の使命は、後の雨、すなわちペンテコステの力と結果を伴って、全世界に、三天使の使命が結合されたものとして宣べ伝えられる。それは大いなる叫びにおいて発せられ、火の舌が全世界の人々に及ぶ。



第 17 章

「第三天使の警告メッセージ」とは？

「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなくたちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』」黙示録 14:9-12。

「イエスの信仰」と「神の戒めを守」ることが、着せられかつ与えられる、キリストの義の福音である。神の律法を守ることによる福音の良きおとずれである。この意味において、神の民は 1844 年以来、第三天使の使命を伝えてきたと言える。それは現代の真理のあらゆる側面を含む。健康改革など、イエスのみ像を反映するまでに回復されるための、更なる一步一步なのである。

但し、第三天使の使命の最初の部分は、特別に終わりの時に当てはまる：

1. 獣は今でも、1798 年以来、傷の回復段階にある
2. まだ全地が獣を拝むところまでは行っていない
3. 現時点で獣の像はまだ形成されていない
4. 獣の刻印はまだ制定されていない

従って：第三天使の警告は、米国日曜休業令によって獣の像が形成され、生ける者の裁きの開始となる獣の刻印が最後のテストとして打ち立てられるまでは、大いなる叫びの力を伴って与えられる

ことはない。その時こそ、最後の七つの災いについての大きいなる警告を発するのである。

従って：黙示録 14 章の第三天使は、マタイ 24:15 で与えられる警告やダニエル 12 章で与えられる警告と対になっている。これは終わりがやってくる前に、我々全員が理解しなければならないものである。

第Ⅱ部のまとめ



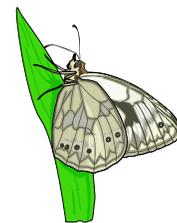
ダニエル 12 章の「警告」とは？

第Ⅱ部は様々な定義で構成されている。これらの基礎的語句や概念が明らかになるまでは、ダニエル 12 章に出てくる最終時代のタイムラインを研究することは不可能である。これらの定義を以下で要約する：

1. ダニエル 12 章とマタイ 24 章で同じような質問が出される：「いつになって終わるのでしょうか？」
2. ダニエル 12 章とマタイ 24 章は互いに関連する答えを含む—どちらも「荒らす憎むべきもの」に焦点を当てた警告
3. 「荒らす憎むべきもの」は過去にも未来にもローマを指す
 - a. 紀元 70 年にエルサレムを破壊した異教ローマ
 - b. 黙示録 13 章とダニエル 12 章で描かれている未来における法王教ローマ
4. ダニエル 12 章にある「荒らす憎むべきもの」は黙示録 13 章の獣と同一
5. マタイ 24 章は二重の質問を提示：二重の答えを提供
 - a. 最初の適用はエルサレムの滅亡(紀元 70 年)に関係
 - b. 第二の適用は世の終わり、特に米国における日曜休業令に関係
6. マタイ 24:15 とダニエル 12 章で与えられている警告は、米国における日曜休業令のこと：
 - a. 都会脱出のしるし

- b. 国家レベルの荒廃が間もなくやってくるというしるし
 - c. 「最後のテスト」が行われるというしるし
 - d. 生ける者の裁きが始まったというしるし
 - e. 最後の「ふるい」が間もなく起るといしるし
 - f. 恩恵期間の終了が近いというしるし(まず神の民から始まる)
 - g. 後の雨が今にも降るといしるし
 - h. 大いなる叫び、すなわち第三天使の使命が黙示録 18 章の御使の力を受けて全世界に向けられるというしるし
 - i. 迫害が間もなく始まるといしるし
 - j. ダニエル 12 章のタイムライン開始のしるし
- 7. 「生ける神の印」が額すなわち心に押される
 - 8. 「生ける神の印」は神の民に仲保者なしで最後の七つの災いを生き延びる用意をさせる
 - 9. ダニエル 12 章だけでなく、マタイ 24 章と黙示録 13 章において警告が繰り返されている
 - 10. これらの預言が今日の神の民に開かれているという事実は、これらの諸事件がごく近い将来に起こるといしるし

結論：警告は、町を逃れるという物理的安全を提供するだけのものではなく、**神の民を生ける神の印とそれに先立つふるいに備えさせるという霊的重要性**をより強調するものである。恩恵期間の終了が間近に迫るときに、彼らが神と協力する手助けをするためのものである。



第Ⅲ部



「1335 日」のタイムラインとは？

序文

質問：1335日のタイムラインの正しい研究法とは？

答え：「聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである」ペテロ第二 1:20。

「彼はだれに知識を教えようとするのか。…教訓に教訓、…ここにも少し、そこにも少し教えるのだ」イザヤ 28:9, 10。

最も明確に、ダニエル書と12章のタイムラインを理解する方法は？主は御自身のしもべを通して示唆をお与えになった：

「ダニエル書はヨハネの黙示録において開封され、我々に地上歴史の最終場面を垣間見せてくれる」牧師への証 115 ページ。

「黙示録の研究は、ダニエル書の預言に心を向けさせる。この両書は、世界歴史の終末に起きる諸事件について、神からの最も重大な教えを与えている」大争闘 下 32 ページ。

これら解釈上の規定が守られるとき、マタイ 24 章や他の聖句、**特に黙示録**からの聖句がダニエル 12 章タイムラインの開始点並びに終了点となる事件を明かしてくれるであろう。**聖書は聖書で解釈される**ものである。人間がやるのは、単にデータ(資料・事実)を集めて整理し、その正しい関係を容易に見られるようにするだけである。

聖書研究生はダニエル 12 章と黙示録 12-18 章の複合体に着目すれば、今にも開こうとしているバラのつぼみを見ることが出来るはずである。各花びらは、しっかりとたたみ合わさっている。義の太陽が世の終末を照らすとき、それらは一つの花として一斉に開くのである。

従って、ダニエル 12 章タイムラインに焦点が合ってくるにつれて、黙示録 16-18 章の謎も解けてくることを、聖書研究生は期待することができる。

ダニエル 12 章を黙示録の光に照らして研究するとき、ダニエル 12 章タイムラインは単に黙示録にある特定の預言の成就であることがじきにはっきりしてくる。そしてタイムラインの始点と終点は、黙示録にある特定の聖句の成就に過ぎないのである。

また、ダニエル12章タイムラインは、決して研究に値しないものではないこともはっきりしてくるであろう。タイムラインは、地上の国々の立法的、司法的法令や、天の法廷の開廷宣言について述べている。それらは救いの計画を含む永遠の真理に関わるものである。

預言解釈の親鍵（マスターキー）は、ダニエル12章タイムラインの始点、終点となる諸事件への洞察を与えてくれる。その親鍵は、次の引用文に見出される：

「…国家が『物を言う』とは、その立法および司法権の活動のことである」
大争闘下 161 ページ。

これらのタイムラインの性質と目的の謎を解いてくれるのは、預言の聖句に出てくる「物を言う」声である。

この章は次の質問に答えるよう意図されている：

1. これまでのタイムラインに関わった先の声(前例)とは何か？
2. 1335日のタイムラインの開始となる事件とは何か？
3. 国々の「物を言う」声とは何か？
4. ダニエル12:12の「待っていて…」とは何か？
5. 1335日のタイムラインの「さいわい(祝福)…」とは何か？
6. 神の声とは何か？

第1章



タイムラインの「先の声」とは？

預言のタイムラインの始点、終点となるのは声、すなわち立法および司法権の活動である。これが、過去に成就したタイムラインを解くために守られてきた規定（ルール）である。同じ規定が、未来について述べているダニエル12章のタイムラインにも、一貫して当てはまるはずである。

先例1：ダニエル8:14に出てくる2300日（年）のタイムラインはある立法行為、すなわち国家の「物を言う」声で始まった。

「それゆえ、エルサレムを建て直せという命令〔法律または立法行為〕が出てから…」ダニエル9:25。

2300日(年)のタイムラインは、紀元前457年に発せられた「物を言う」声または立法行為で始まった。またそれは1844年に「審判が行われ、数々の巻物が開かれた」(ダニエル7:10—欽定訳)という司法行為の宣言でもって終わった。

2300日(年)のタイムラインは、1335日の開始と終了を知る手がかりとなる。1335日のタイムラインは立法行為であるところの法令(国家日曜休業令)でもって始まる。それが国家の「物を言う」声となる。間もなく見られるように、それもある声(神の声)でもって終わる。

先例2:ダニエル7:25と黙示録13:5で述べられている1260日(年)のタイムラインは、ある法令(勅令)でもって始まり、ある司法行為でもって終わった。タイムラインの開始点となったこの立法行為が次の引用文に描かれている:

「東ローマの最も偉大な支配者ユスティニアヌス1世(527—565)は、…恐らく歴史上立法者、また法典編さん者として知られている。彼の介入がローマの司教の状況をことごとく変えた。…ユスティニアヌスのより重要な功績は、…ローマ法典の編さんであった。…第三番目の偉大な功績は、…皇帝令によってローマ司教を『聖なる教会の頭』の座に就かせたことであった。こうして、法王至上権のための法的基盤を据えた…彼の法典は、聖職者の権限を承認し拡大するものである。こうして法典を著した筆が、…ローマに法的承認を与えることとなった」
The Prophetic Faith of our Fathers, Vol.1, 504-517。

そして1260日(年)のタイムラインが終了したのは、司法行為によってであった。ナポレオンの将軍が法王を捕虜にしたとき、1260年にわたるヨーロッパでの法王至上権が終わった。

これらのタイムラインは手本である。ダニエル12章のタイムラインも、預言の成就となる立法、司法の声でもって開始し終了する。

先例3:シナイ山で与えられた契約のタイムラインは、十戒の宣言という神の声で始まった(出エジプト20:1—7)。それはユダヤの議会(サンヒドリン)が、ステパノを石で撃ち殺すために立法、司法行為に出たことで終わった。これは国家が「物を言う」声であった(使徒行伝6:12)。この法的行為が、紀元34年に、ダニエル9:24の70週タイムラインを終わらせた。この国家の法的行為は、天で記録されたシナイ山の(最初の)契約を終わらせたのであった。

キリストとサタンの大争闘は、法廷における原告と被告の法律上の争いであることを理解することが重要である。罪の問題のあらゆる側面は、しかるべき法手続きと法廷の規定に従って扱われている。個人個人の言動は、調査審判における司法手続きの下で吟味されるべく、天の巻物にすべて記録される。この手続きがダニエル8:14のタイムラインによって特定されており、それは特定の日時である、1844年10月22日に始まった。個人個人の決断や行為だけでなく、国家を代表して物を言う立法、司法権の行為も、大争闘において重要な役割を果たすものとして記録される。これらの立法体制が物を言い、これらの活動が天の法廷に記録される時、それらが初めて世と全宇宙に対する公的宣言となるのである。これらの正式な決定と宣言が、巻物を開く上で重要な役割を果たすのである。

聖書のタイムラインは、取るに足らないものとしてあしらわれるべきでなく、むしろ神の民に関わ

る天と地の政府によって規定される法的文書として扱われるべきである：

1. 永遠の契約は、ダニエル 9:27 のタイムラインに従って、紀元 31 年に批准された
2. ダニエル 9:24 に沿ったシナイ山の契約である 70 週タイムラインは、紀元 34 年に終了した
3. ダニエル 8:14 の 2300 日 (年) タイムラインは 1844 年に終了し、調査審判の開始を告げた
4. ダニエル書と黙示録の法王支配に関する 1260 日タイムラインは紀元 538 年から 1798 年まで
5. ダニエル 12 章の 1335 日タイムラインは待つ期間
6. ダニエル 12 章の 1260 日タイムラインは迫害の期間
7. ダニエル 12 章の 1290 日タイムラインは法王至上権 No. 2 の期間

聖書のタイムライン、中でもダニエル 12 章のタイムラインは、勝手に置き換えてもよい単なる装飾品ではないことを理解する必要がある。聖書中のタイムラインと一貫する解釈上の原則を見つけ出し、ダニエル 12 章にも同じ一貫した方法で適用することが、我々の責任である。

ダニエル 12:12 の 1335 日タイムラインは、章の中で最も長い期間を指していて、最も早い時期に始まるものである。次章における更なる研究は、米国における日曜休業令に続く諸事件に関わる、もっと短いタイムラインの文脈をも明らかにする。この日曜休業令は、マタイ 24:15 におけるしるしまたは警告と関係している。それは最後の危機が開始したという事実、神の民を覚醒させるべきものである。彼らに物質的かつ霊的に必要な行動を起こさせ得るものである。ダニエル 12 章におけるタイムラインの目的は、これらの概念を強化し、神の民にとって手助けとなる一貫した方法でこれらに焦点を当てさせることである。

我々には次のような勧告が与えられている：

「ダニエル書 12 章を読み、研究しようではないか。それは終わりの時まで、我々すべての者が理解を必要とするであろう**警告**である」エレン・G・ホワイト、手紙 161、1903 年。

マタイ 24:15 においてイエスが警告された事件が、ダニエル 12 章の 1335 日タイムラインの開始となる。

第2章



ダニエル 12:12 の 1335 日を「開始させる事件」とは？

「待っていて1335日に至る者はさいわいです」ダニエル 12:12。

ダニエル 12:12 の 1335 日タイムラインは、ある預言の成就でもって始まる。その事件は黙示録 13:11, 14 に見ることができる：

「わたしはまた、ほかの獣が地から上ってくるのを見た。それには小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った。…先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた」黙示録 13:11, 14。

この預言を補足してみると：

「わたしはまた、ほかの獣 [米国] が地から上ってくるのを見た。それには小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った [日曜休業令を制定]。…先の獣 [法王教] の像を造ることを、地に住む人々に命じた。」

アメリカ合衆国における日曜休業令が最終時代の危機の開始を合図し、神の民はそれが過ぎ去るのを待つであろう。ダニエル 12 章 12 節の 1335 日タイムラインは、「待っていて1335日に至る者はさいわいです」と言っている。従って、1335日タイムラインはアメリカ合衆国における日曜休業令で始まり、それから1335日間続くであろう。そして1335日目の幸い(祝福)で終わるのである。

第3章

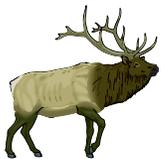


国家の「物を言う声」とは？

「…龍のように物を言った」黙示録 13:11。

「…国家が『物を言う』とは、その立法および司法権の活動のことである」大争闘下 161 ページ。

上の定義を強調しすぎることはあり得ない。それがダニエル 12 章のタイムラインすべてを理解するための鍵である。三つのタイムラインはどれも、政府（地上または天の政府）の物を言う声で始まり、また終わる。二つの角を持つ獣が龍のように物を言ったことを預言が示すとき、それは米国議会において日曜休業令の法案が通過するという立法行為について言及している。国家の物を言う声は、こうして獣の像を造り上げ、黙示録 13:14 を成就するのである。この国家の物を言う声は、最終時代のシナリオ（タイムライン）が封切られたことを神の民に知らせるのである。



第4章

ダニエル 12:12 の「待っていて…」とは？

「待っていて1335日に至る者はさいわいです」ダニエル 12:12。

この1335日タイムラインは、1335日待つと言われている。この聖句から、神の民は何かを待つであろうことが明らかである。神の民が待つとすれば、彼らは次の事柄を知らなければならない：

1. いつから待つのか
2. 何を待つのか
3. 何が待つことを終わらせるのか

最後の危機に入ったという警報を神の民に出す事件とは、アメリカ合衆国における日曜休業令である。その事件から、彼らは救出の時に待ち望むであろう。彼らは、ダニエル 12:1 で言及されている悩みの時から、救出を待ち続けるであろう。

「その日、人は言う、『見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち』

望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救いを喜び楽しもう』と」イザヤ 25:9。



第5章

1335日の「さいわいです」とは？

「待っていて1335日に至る者はさいわいです」ダニエル 12:12。

1335日待つことが、最終時代のシナリオを乗り越える秘訣のように思われる。ところが、ここで疑問が浮かんでくる：彼らが待っているさいわいとは何なのであろう？彼らを救出するこのさいわいとは何なのであろう？

「天から神のみ声が聞こえて、イエスのこられる日と時とが宣言され、永遠の契約が神の民に伝えられる。どんな雷鳴も及ばぬとどろきをもって、神の御言葉が地上になりひびく。神のイスラエルは、耳を傾け、目を上方に注いで立っている。彼らの顔は神の栄光に照らされて、シナイ山から帰ってきたときのモーセの顔のように輝いている。悪人たちは、彼らを見つめることができない。神の安息日をきよく守ることによって神をあげてきた者たちに、祝福（さいわい）が宣言されると、勝利の力強い叫びが起こる」大争闘下 418,419 ページ。

さいわい（祝福）は、永遠の契約の宣言である。それが第七の災いの下、神の声によって神の残りの民に語られるであろう（黙示録 16:17 参照）。

米国日曜休業令において、最終時代のシナリオが封切られたことを示すために与えられる警告の時から、神の民は祝福を宣言する神の声を聞くために、字義通り1335日間待つであろう。この永遠の契約は、法的声明として宣言されるものである。エデンの司法判決が回復され、永遠の生命が神の民に戻されるのである。

「待っている者はさいわいである」。1335年間待つことのできる人はいない。誰もそんなに長く待つことはできない。これが、1335日は象徴的時でなく、字義通りの時であることを示すもうひとつの証拠である。

日曜休業令から最後の危機に至るまで、神の民は第七の災いの下、神の声によって自分たちが救出されるのを待つであろう。1335日タイムラインは、イエスの再臨の日時を与えるものだろうか？否である。再臨の日時を発表するのは神御自身の声である。三つのタイムラインはどれも、再臨の日時を与えるものではない。

しかし、第七の災いの下で起こる神の声については、沢山の情報がある。これから数ページにわたって、神の声が何を述べるのか、その時どんな事件が起こるか、ということについての単純なリストを挙げていくことにする。



第6章

「神の声」とは？

ダニエル12章12節の1335日タイムラインを終了させる**神の声**とは何なのか。黙示録16:17では、神の声が登場する。そのタイミングが極めて重要である。それは第七の災いが始まる時に起こるのである。

この神の声を、イエスの再臨と混同させてはいけない。事実それが、再臨の日時を宣言する声なのである。神の民は、終わりの諸事件がすぐ戸口まで来ていることを知ることはできるが(マタイ24:33)、神の声が語られるまで、再臨の日時を知ることはできない。米国における日曜休業令から救出の時まで、神の民は正確に1335日を数えることができる。神御自身の声が語られるまで、その日時を知ることはないのである。

神の声は何と言っているか？

1. 「事はすでに成った」(黙示録16:17)
2. その声が、再臨の日時を知らせる(初代文集64ページ)
3. 神の民に永遠の契約を宣言する(初代文集461ページ)

神の声で何が起こるのだろうか？神の声で起こる出来事について、80もの声明が与えられている：(大争闘より)

1. それは真夜中に起こる—————大争闘下414
2. 太陽が現れる
3. 川の流れは止まる
4. 黒い厚い雲が互いに衝突
5. 天の真ん中に、一ヶ所言うに言われぬ栄光に満ちた澄んだ空間
6. **神の声**が天と地を震動させる
7. 大地震が起こる
8. 大空は、開いたり、閉じたりするように見える

9. 神のみ座からの栄光が、ひらめき渡る
10. 山々は、風にゆらぐ葦のように揺れる
11. ゴツゴツした岩があたり一面に飛び散る
12. 嵐が近づいているようなり声とする
13. 強風の甲高い音が、悪鬼らの声のように聞こえる
14. 全地は海の波のように隆起し揺れ動く
15. 地の表面は砕け散る
16. 地の基そのものが崩れつつあるように見える
17. 山脈は沈下
18. 人々の住んでいる島々が消えていく
19. 海港は、怒った水にのまれてしまう
20. バビロン（偽宗教）の正体が明らかに
21. 大きな雹が諸都市を破壊
22. 堂々たる宮殿が崩れ去る——大争闘下 415
23. 牢獄の壁が砕け落ち、神の民が解放される
24. 墓が開かれ、特別な復活がある
25. 第三天使の使命を信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現れる
26. イエスを刺し通した者たちもよみがえる
27. キリストの迫害者たちは、よみがえらせられる
28. 恐ろしい雷鳴が天からひらめく
29. 神秘的な恐るべき声が、悪人たちの運命を宣告（偽牧者らによって理解される）
30. 悪人たちの泣き叫ぶ声が、自然界の物音を越えて聞こえてくる
31. 悪鬼たちは、キリストの神性を認める——大争闘下 416
32. 人々は、あわれみをこい求めて、恐怖のうちにはいつくばる
34. 四倍も輝きを増した一つの星が光る
35. 義人が敵から救出される
36. 彼らの顔が、驚嘆と信仰と愛に輝く
37. 神の民が詩篇 46:1-3 を歌う
38. 天の都の栄光が、開かれた門から流れ出る——大争闘下 417
39. 折りたたんだ二枚の石の板（十戒）が、空中に現れる
40. 手が石の板を開く
41. 火のペンでしるされたかと思われる十戒の言葉が見える
42. すべての人が裁きの規準である十戒を見る（迷信と異端の暗黒が払いのけられる）
43. 悪人たちは恐怖と失望に襲われる
44. 彼らは自ら軽蔑した律法によって罪に定められる——大争闘下 418
45. 悔い改めて変わるには遅すぎる
46. **神の声**が、イエスの来られる日と時とを宣言
47. **神の声**が、永遠の契約を神の民に伝える
48. 契約の言葉は、どんな雷鳴も及ばない
49. 神の言葉が地上に鳴り響く
50. 神の民は耳を傾け、目を上方に注いで立っている
51. 彼らの顔は神の栄光に照らされる
52. 悪人たちは、彼らを見つめることができない

53. 勝利の力強い叫びが起こる
54. まもなく、東の方に、小さい黒雲、救い主の来臨のしるし
55. **神の声**は多くの水の音のよう—————初代文集 64
56. 十四万四千の生きている聖徒たちは、その声を知って理解した
57. 悪人たちは、それを雷鳴と地震だと思った
58. **神の声**で、再臨の時を告げられたときに、聖霊を注がれたので、神の民の顔はモーセの顔がシナイ山から下りてきたときに輝いたように、輝き始めた
59. 十四万四千の人々はみな印せられ、完全に一致していた
60. 悪人たちは激怒し、神の民に襲いかかって捕らえ、投獄しようとする
61. 義人たちが主の名によって手を伸ばすと、彼らは倒れる
62. サタンに属する人々は、聖徒たちの足元に伏して拝する
63. **神の声**で建物が揺り動かされる————— 1 T
184
64. 捕らえられていた神の民が解放される
65. さん然たる光が彼らを照らす
66. 彼らの顔はいかに麗しいことか
67. 疲労と心配の痕はことごとく消える
68. どの顔にも健康と美がみなぎっている
69. 敵は死人のように倒れる
70. 悪人たちは彼らの栄光に耐えられない
71. 救われた者たちの上に輝く光と栄光は、イエスが雲に乗って現れるまで残る
72. 建物がことごとく崩れる
73. 海の水が沸騰————— 1 T 354
74. 捕らえられていた義人たちが解放される
75. 義人たちは甘い厳粛な声で「私たちは救われた。あれは神の声だ」とささやき合う
76. 聖徒たちの歓喜とは裏腹に、悪人たちは恐れおののく
77. サタンとその使、そして悪人たちは神の律法を守った神の民の上に輝く栄光を目撃する
78. 義人たちの顔は、イエスのみ像（かたち）を反映
79. サタンとその使たちは、栄光に輝いた聖徒たちから逃げる
80. 彼らの力は永遠に消え去る

神の声とイエスの再臨を区別しない結果、大きな混乱が生じてしまった。第七の災いの時に聞かれる神の声は、再臨の前の出来事である。その**神の声**が再臨の日時を宣言する。神の声が聞かれるまで、我々がその日時を知ることはないが、ダニエル 12:7-12 にある預言のたいまつを高く掲げることができる。そしてこれらのタイムラインによって、一步一步、**最後の危機**といわれている歴史の諸事件の只中であって、自分たちの現在地を知ることができるのである。

第Ⅲ部のまとめ



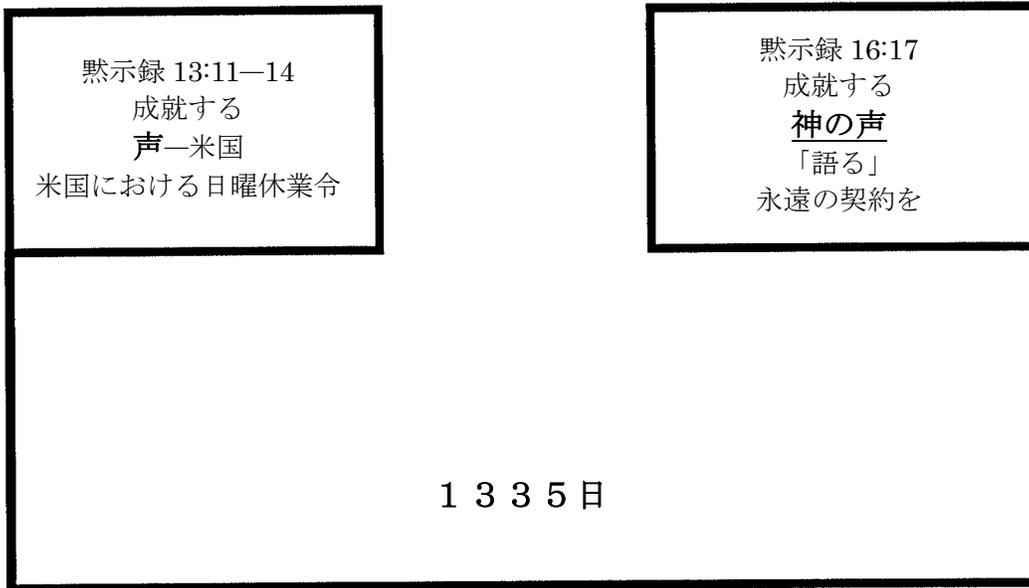
1335日タイムラインとは？

1335日タイムラインは：

1. 自分勝手な憶測や推測によって理解することはできない
2. 正しい解釈の原則を用いることによって理解されなければならない
3. 聖句の相互参照によって理解されなければならない（イザヤ28章）
4. 黙示録の研究によって開封されなければならない
5. 黙示録16-18章の謎と組み合わせられて、一緒に開かれる
6. 黙示録13:11と16:17の成就でもって始まり、終わる
7. ダニエル書と黙示録の他のタイムラインと構造において一貫している
8. 黙示録13:11で言われている国家の「物を言う」声で始まる
9. 黙示録16:17の神の声で終わる
10. 米国における日曜休業令で始まる
11. マタイ24:15で言われている同じ警告で始まる
12. 米国日曜休業令の間、神の救出の声を待望する
13. 永遠の契約を宣言する「さいわい」を待望する
14. 政府の立法、司法行為の宣言である
15. 三つのタイムラインの中で最も長い期間を指し、最終シナリオの開始となる
16. イエスの再臨、後の雨または恩恵期間終了の日時を与えるものではない
17. 最終時代の諸事件を理解させるよう、神の民を備え、手助けする
18. 神の民に、最後の危機を生き延びるための勇気を与える

ダニエル 12:12 の 1 3 3 5 日のタイムライン

「待っていて1335日に至る者はさいわいです」ダニエル 12:12。



祝福の宣言まで待つ



第Ⅳ部



ダニエル 12:7 の 「1260 日」 タイムラインとは？

「かの亜麻布を着て、川の水の上にいる人が、天に向かって、その右の手と左の手をあげ、永遠に生ける者をさして誓い、それは、ひと時と、ふた時と、半時である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろうというのを、わたしは聞いた」ダニエル 12:7。

序文

ダニエル 12:7 の 1260 日タイムラインは、最後の戦いの最終場面を照らすもう一つの局面である。この一節の中に、大争闘の二人の主役が登場する：キリストと反キリストである。キリストは、かの亜麻布を着た人として登場し、反キリストは、聖なる民を打ち砕く者として登場する（他にも荒らす憎むべきものや獣として知られている）。「聖なる民」とは、大争闘の渦中に巻き込まれる最終世代のことである。

1260 日タイムラインの開始点、終了点となる出来事は、大争闘の最終場面において極めて重要となる。神の民や地上の悪人たちのみならず、天の法廷にとっても重要なのである。そこで大争闘訴訟のあらゆる証言が取り上げられ、法的処理がなされるのである。

贖いの力と神の愛の回復を、神の民が証明（デモンストレーション）することによって、創造主が全宇宙の前で擁護されるのである。と同時に、罪の醜さが完全に表出するであろう。反キリストが「聖なる民」を迫害することによって、悪が完全に表出するであろう。神の民を地上から抹殺すべく、世界規模の死の法令が制定されることによって、罪が究極まで暴露される。1260 日タイムラインの終了までに、「これらの事 [悪人がなし得る事] はみな成就する」（ダニエル 12:7）であろう。この法令によって、悪人たちは自らの運命を定め、行動を開始する。義人たちはそれから救出される（アモス 3:7）。

今から 2000 年以上も前に、タイムラインは預言者に示された。が、それは必要な時にだけ理解されることになっていた。ダニエル 12:7 の 1260 日タイムラインに焦点がはっきり合わされる前に、学術的手順を踏んでいくことが必要となる：(a) 原本が書かれた原語の研究をしなければな

らない。(b) 定義が明確に述べられねばならない。他の預言のテキスト、特に黙示録のそれとの関連が預言の統一性を明らかにし、明確な意味を与えてくれるであろう。

次の質問は答えを必要とする:

1. かの亜麻布を着て、川の水の上にいる人とは誰か？
2. 聖なる民とは誰のことか？
3. 何が聖なる民の力を砕くのか？
4. 聖なる民の力を砕く事を成し遂げるものとは誰のことか？
5. ダニエル 1 2 章の歴史的見解とは？
6. ダニエル 12:7 のひと時とふた時と半時とは？
 - a. 預言用語とは？
 - b. 預言の時とは？
 - c. 字義通りの時とは？
 - d. 「時」とは？
 - e. 「ひと時とふた時と半時」とは？
7. 黙示録 1 3 章は過去、それとも未来？
 - a. 「主要な適用」とは？
 - b. 「二義的適用」とは？
8. 「法王至上権 No. 2」とは？
9. 1 2 6 0 日のタイムラインの開始、終了の合図となる「声」とは？
10. 1 2 6 0 日のタイムラインを開始するのは？
11. 1 2 6 0 日のタイムラインを終わらせる事件とは？
12. 「世界規模の死の法令」とは？
13. 黙示録 2:13 に出てくる「一瞬（1時間）」とは？
14. 預言の解釈における「1日を1年と計算する原則」とは？
15. ダニエル 1 2 章に出てくる 1 3 3 5 日タイムラインと 1 2 6 0 日タイムラインの関係とは？
16. 「ヤコブの悩みの時」とは？
17. ダニエル 12:7 でことごとく成就する「これらの事」とは？



第 1 章

かの亜麻布を着た人とは？

次に挙げる預言の中で、イエスは「人」として描かれている：

「… 見よ、その名を**枝**という人がある。彼は自分の場所で成長して主の宮を建てる。すなわち彼は主の宮を建て、王としての光栄を帯び、その位に座して治める。その位のかたわらに、ひとりの祭司がいて…」ゼカリヤ 6:12, 13。

対照的に、反キリストは「不法の者(罪の人)」として描かれている (テサロニケ第二 2:3 参照)。ゼカリヤ 6:12, 13 において、人であるイエス・キリストは、「その御座で祭司となる (欽定訳)」。ヘブル書 2:14-18 において、イエスが人として描かれているのは「あらゆる点において兄弟たちと同じようになら」れて天の祭司にふさわしい者となられた、イエスの人性について述べているからであることが分かる。「亜麻布を着た人」というのは、我らの大祭司としての務めをも表わしている：

「祭司は亜麻布の服を着…」レビ 6:10。

「朝の務めを完了して後に、大祭司はその金の衣を脱ぎ、平祭司の服に着替えた。それは自らの栄誉ある地位を放棄し、しもべの役を担うためであった。彼の行為は、『自らの王服と王冠を脱いで、その神性の上に人性を着られ、自らをむなしくされた我らの仲保者』(E・G・ホワイト)を表していた。彼は自らしもべのかたちを取り、…犠牲を捧げるために、祭司自らがいけにえとなられたのであった。イスラエルの大祭司は、通常金の衣を身につけていたが、贖罪の日だけは、平祭司の衣に着替えたのであった」レスリー・ハーディング著、キリストがすべて 37、38 ページ。

キリストの型であったイスラエルの祭司らは、亜麻布を身につけていた。ダニエル 12:7 において、御自身の民のために贖いをなす大祭司として、キリストが登場する。またダニエルは、彼が水の上にいるのを見た。聖書の中で水の上を立って歩けるのは、イエスだけである。

「イエスは夜明けの 4 時ごろ、海の上を歩いて彼らの方へ行かれた」マタイ 14:25。

ダニエル 12:7 において、我らの大祭司イエスは何をしておられるのだろうか？

「…天に向かって、その右の手と左の手をあげ、永遠に生ける者をさして誓い、…」ダニエル 12:7。

法廷で証言するとき、誰もが右手を挙げて真実を語ることを誓う。両手を挙げているのは、二重の約束を意味している。すなわち民への厳粛な誓いである。それによって彼は、民に希望と勇気を与えておられる。これらの事が皆成就するのは「ひと時とふた時と半時である」という厳粛な誓いである。彼は最終世代に、最後の危機がだらだらと引き延ばされることはないことを保証しておられる。最も暗い時代に希望を見出す光が、彼らには必要なのである。悩みの時と最後の七つの災いを通してに当たり、彼らはこの御言葉の約束のうちに信仰を固めることができるのである。これはイエスの愛する十四万四千に与えられた愛のメッセージなのである。



第2章

ダニエル 12:7 の「聖なる民」とは？

「…それは、ひと時とふた時と半時である。彼が聖なる民の力を打ち砕くことを成し遂げた時に、これらの事はみな成就するだろう…（欽定訳）」ダニエル 12:7。

ダニエル 12:7 とマタイ 24:34 は似通っている。

聖なる民は
これらの事はみな成就するだろう…。
ダニエル 12:7

この時代「世代」は
滅びることがない。これらのことが
ことごとく起こるまでは、
マタイ 24:34

預言者ダニエルは、最後の世代を「聖なる民」と呼び、イエスは「この世代」と呼んだ。イエスの再臨まで滅びることなく生き残っている訳であるから、まさしく最後の世代の事である。彼らこそが、これらの事がことごとく成就するのを目の当たりにする世代なのである。

オリブ山上で、イエスはこれらの言葉を弟子たちに語られたが、黙示録の著者である最後の弟子ヨハネの死で、「この世代」が弟子たちではなかったことが明らかになった。無論、紀元70年のエルサレム滅亡を目撃した人たちでもなかった。

その後、紀元538年から1798年の間にヨーロッパで殉教した沢山の人も、最後の世代とはならなかった。1755年のリスボン大地震を経験した人たちでもなかった。1780年の暗黒日を経験した人たちでも、血のように赤く染まった月を目撃した人たちでもなかった。1833年の流星を目撃した人たちでもなかった。彼らは皆、「終わりの時」の到来を目の当たりにしたが、すべての事が成就するのを目撃する世代ではなかった。1844年の大失望を経験した人たちも、イエスが

語られたところの世代とはならなかった。

1844年に調査審判が始まったという当時の現代の真理を宣べ伝えた人たちが、必ずしもすべての成就を目の当たりにする世代とはならなかった。決して滅びることのない最後の世代とは、調査審判が間もなく終了しようとしているという、この時代の現代の真理を宣言する人たちなのである。

最後の世代こそが、これらの事がことごとく成就するのを目撃する「聖なる民」なのである。彼らは次の事柄を遂行する：

ダニエル 12:7 の「聖なる民」、最後の世代の特徴：

1. 黙示録 14:6,7,14-18 の預言に従い、生ける者の調査審判の開始を告げる
2. 生ける者の裁きを通過し、罪の除去を経験する（使徒行伝 3:19）
3. 傷がなく、イエスのみ像を完全に反映する者となる（黙示録 14:5）
4. 父の名（品性）でもって、額（思い）が封印される（黙示録 14:1-7）
5. 後の雨を受ける（ヨエル 2:23）
6. 世に向かい第三天使の警告、すなわち大いなる叫びを発する（黙示録 14:9-18）
7. 獣とその像、しるしに対する警告を世に伝える（黙示録 13）
8. 「獣」の統治下で迫害の中を生き延びる（黙示録 13、ダニエル 12:7）
9. 仲保者なしで、悩みの時と最後の七つの災いを生き延びる
10. 神の声によって救出される（黙示録 16:17）
11. 世界規模の死の法令を生き延びる（黙示録 13:15）
12. イエスが天の雲に乗っておいでになるのを目の当たりにする
13. バビロン、すなわち偽の宗教の終焉を目の当たりにする（黙示録 18）
14. 死を見ずして天に移される
15. 四方から呼び集められる（マタイ 24:31）
16. 十四万四千となる

これが、ダニエル 12:7 で述べられている「聖なる民」である。彼らはひと時とふた時と半時（1260日）の間生き延びるであろう。これが、「これらすべてのことが成就するまでは、滅びること」のない最後の世代なのである。

第3章



聖なる民を「打ち砕く力」とは？

「…それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろうと言うのを、わたしは聞いた」ダニエル 12:7。

定義：

「打ち砕く」と訳されている [scatter] の原語は、ヘブル語で「ナーファッツ」という。もともとの意味は：粉々に砕く、打ち砕かれる、粉々に壊す、壊される、解任させられる、散らされる、一面に広がる…。

上の定義は、最後の世代である「聖なる民」が、散らされる、あるいは粉々に打たれることを表している。これは激しい迫害以外のなにものでもない。

定義：

聖なる民の「力」の原語は、ヘブル語で「ヤード」という。

もともとの意味は：力を表す開いた手

多様な適用がなされ、文字どおりにも象徴的にも解釈される…支配権、奉仕、貢献…。

「聖なる民の力を散らす（欽定訳）」とは、彼らの手が縛られ、あるいは壊されるまで迫害されるという意味である。全世界に宣べ伝えるべき使命は、いずれ終了する。使命を受け入れようとしない者の手、あるいは額に獣の刻印が押される（黙示録 14:9）。神の（封）印は、手に押されるとは書かれていない。神の印は額に押される（黙示録 14:1）。神の民は、神のためになす自らの業を手で示すことができなくなる。ダニエル 12:7 に表されているように、迫害や殉教のために、彼らの手は壊されるか、がんじがらめになるのである。

「…最後の戦いの前に、多くの者は投獄され、多くの者は命からがら町々を逃げ出し、また多くの者がキリストのために真理を擁護して殉教するであろう。…あなたは耐えられないほどの試練に遭うことはないであろう」3SM397。

「…また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊〔欽定訳では魂〕がそこにおり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいた」黙示録 20:4。

第4章

聖なる民の力を打ち砕くことを 成しとげる者とは？



ここで「者」を指す「He (彼)」とは、他の箇所で言及されている誰かの代名詞である。ダニエル書ではこの前に「彼」が数度言及されている。そしてダニエル 12:11 に、名が言及されている：

「常供の燔祭が取り除かれ、荒らす憎むべきものが立てられる時から、1290日
が定められている」ダニエル 12:11。

ダニエル 12:7 において「He (彼—欽定訳)」は、ダニエル 12:11 で「荒らす憎むべきもの」がしているのと同じことをしている。神の民を迫害しているのである。ダニエル 12:11 で彼、すなわち憎むべきものは、荒らすことをなす、あるいは迫害する。ダニエル 12:7 で「彼は聖なる民…を散らす（欽定訳）」、すなわち迫害する。つまり「He (彼)」とは、神の民を散らして荒廃させる迫害勢力であると言える：

彼が聖なる民を打ち砕く時に、これらの事はみな成就するだろうと言うのを、わたしは聞いた（欽定訳）
ダニエル 12:7

荒すことをなす（迫害）
憎むべきもの
ダニエル 12:11

第Ⅱ部の第3～5章において、「荒らす憎むべきもの」の正体がローマであることを証明した：

1. 紀元70年にユダヤ人と初代クリスチャンを迫害した異教ローマ
2. 紀元538年から1798年にかけてヨーロッパ中の神の民を迫害した法王教ローマ
3. 黙示録13、14章で予告され、ダニエル12章のタイムラインで詳細が加えられているように、最後の時代に法王教ローマが再び迫害を行う

法王教ローマは、次のように多くの預言の象徴（シンボル）で
その正体が明らかにされている：

ダニエル 7:25	小さい角	「聖徒を悩ます。…時と律法とを変えようと望む」
		「聖徒は…彼の手になたされる」
ダニエル 8:10	小さい角	「衆群…を地に投げ下して、これを踏みつけ」

ダニエル 11:31	憎むべきもの	「荒らすことをなす」
ダニエル 11:44	北の王	「多くの人を滅ぼし絶やそうと、大いなる怒りをもって出て行く」
ダニエル 12:7	He (彼)	「聖なる民を打ち砕く」
ダニエル 12:11	憎むべきもの	「荒らすことをなす」
Ⅱテサロニケ 2:4	不法の者	「神の宮に座す」
黙示録 12:3、4	[ローマを通して働く] 龍	「その子 [イエス] を食い尽くそうとかまえていた」
黙示録 12:13	[法王教ローマを通して働く] 龍	「女を迫害した」(欽定訳)
黙示録 12:15	へび	「女を押し流そうとした [迫害]」
黙示録 12:17	[法王教ローマを通して働く] 龍	「残りの子ら…に対して、戦いを挑むために出て行った」
黙示録 13:1-10	獣	「聖徒に戦いを挑んでこれに勝つことを許され」
黙示録 17:11-14	獣と王たち	「小羊に戦いを挑んでくる」
黙示録 19:19	獣と王たち	「馬に乗っているかた [イエス] …に対して、戦いを挑んだ」

反キリストである迫害勢力は、聖書の預言においてたびたび言及されているという事実から、ダニエル 12:7 で単に「彼」(欽定訳)として言及されていることは、驚くには及ばない。預言を研究する者なら誰でも、そのような理解にたどり着くはずである。

「多くの者は、自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう。しかし、悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう」
ダニエル 12:10。



第5章

ダニエル 12:7 に関する「歴史主義者の見解」とは？

サタンは、真理を誤りと混合させることによって、背教したキリスト教界に混乱と暗闇をもたらす。神の民が明かな誤りを拒むときには、その時代にとって重要な真理をも拒むようにさせることが、サタンの目的でもある。このような方法で、サタンは黙示録 13、14 章の「獣」あるいは反キリストが、近い将来支配権を握るという論点をぼかしてしまったのである。

背教したキリスト教界は揚挙(ラプチャー)説や、その他、様々な誤謬と一緒に、将来 3 年半の間反キリストが支配権を握るであろうと説いた。残りの民が他の様々な誤謬のみならず、黙示録 13 章で描かれている最後の危機や、それに伴うダニエル 12 章のタイムラインに関する預言の聖句をも拒むようになることが、サタンのもくろみである。

何世紀も昔、背教したキリスト教界は、法王教ローマにおいてその成就を見ることのできる、反キリストを暴いた歴史主義者の聖書解釈を拒んだ。法王教への非難をかわすために、「未来派」として知られる偽の預言解説者たちは、このような預言はすべて、最後の時代に 3 年半の間支配する未だ正体の分からない謎の反キリストを指していると断言した。この思想こそが、他の多くの誤りも含め、「未来主義」と呼ばれるものである。その主な目的は、過去に法王が至上権を握っていた頃、法王教に向けられていた非難をかわすことであった。将来至上権が再び確立されるときにも、この同じ説が用いられることだろう。

未来派の人達は、ダニエル書と黙示録のある預言に適用されるべき、1 日を 1 年と計算する原則を廃棄した。そうすれば過去において、法王教の正体を預言から暴くことはできなくなるのであった。そのような盲目を背教した教会に持ち込むことによって、法王教ローマは近い将来権力の座に返り咲くことができるのである。

従って、聖句の相互参照によってすべての預言の象徴を解読し続け、象徴の時を解読するために「1 日を 1 年と計算する原則」を用いるのは、真の歴史主義者だけである。ローマの正体を暴き、ダニエル 12 章と連結した黙示録 13、14 章による未来の至上権を理解するために、今日歴史主義者は、字義通りに解釈されるべき預言を正しく用いることができる。真の歴史主義者だけが、黙示録 14 章の第三天使の使命を伝えることができ、ダニエル 12 章を理解する賢い者となることができるのである。^{*}

^{*} ダニエル 12:7-13 は、字義通りの方法を適用するので、タイムラインも字義通りにとらなければならない。しかし、それは決して「未来主義」ではない。また、ダニエル 7、8、9 章の「二重の適用でもない。それは、預言解釈の歴史的原則を延長するものであり、成就しつつある預言の最後の部分なのである。

ダニエル 12 章のタイムラインは、未来に位置するものであり、過去の法王教による迫害 (538-1798 年) と黙示録 13 章に描写されている来るべき迫害に連結する、未来の事件である。

「未来主義」は、法王教から人々の目をそらすことを狙っているが、ダニエル 12 章は、過去の迫害を起したローマ法王が未来にすることに注目させるものである。

第6章



ダニエル 12:7 の「ひと時とふた時と半時」とは？

「…それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろう…」ダニエル 12:7。

まず、用語の明確な定義を知る必要がある：

1. 「預言用語」とは？
2. 「預言の時」とは？
3. 「字義通りの時」とは？
4. 「ひと時」とは？
5. 「ひと時とふた時と半時」とは？

1. 「預言の時」とは？

ダニエル書を通じて用いられている「時」という言葉は、預言的用語である。ヘブル語で1年と定義されていることからきている。ヘブルのカレンダーは12ヶ月から成っており1ヶ月、30日から成り立っている。このヘブルの1年、または「時」は、360日から成っている（現代のカレンダーは365日）。ヘブル人は相違を補うために時折余分の月を加えた。

ダニエルが「時」と用いた場合、360日を意味した。ダニエル4章のネブカデネザルに宣告された「時」は字義どおりの1年を意味した。また、ダニエル7章のように象徴的に用いる場合は、「ひと時とふた時と半時」は、1260日／年となり、またダニエル12章のような場合は、1260日となる。「時」を字義通りとするか、象徴的とするかは文脈で決まる。

ダニエル11、12章は、象徴的表現で表されていないことを覚えられたい。従って「ひと時とふた時と半時」というのは、象徴ではなく、単に「預言用語」である。1日を1年と計算する原則によって計算、解釈されるべきものではない。

2. 「預言的用語」とは？

どの預言も「預言的」であり、時の要素を含む、すべての預言も「預言的用語」を用いている。「預言的」という言葉は「象徴的」という言葉と混同してはならない（実はこれが多くの混乱と誤りの元となってきた）。預言が文脈上、字義的であるなら、字義通り

の「預言的時」と解すべきである。文脈が象徴的である場合は、1日を1年と象徴的に解釈しなければならない。「象徴的時」も「預言的時」である。字義通りの時も、象徴的時も「預言的時」である。上で言及されているように、「預言の時」は、その「時」が預言の象徴によって表記されている場合にのみ解釈されねばならない。

3. 字義通りとは？

字義通りに書かれているダニエル12章において、預言者がもし「時 (times)」という預言用語を用いなくて、単に「3年半」と述べたとしたら、その字義通りの時は、1年を365と4分の1日とするカレンダーの中で理解する必要が出てくる。このような誤りを防ぐために、ダニエルは「ひと時とふた時と半時」という預言用語を用いたのである。

4. 「ひと時」とは？

「ひと時とふた時と半時」という預言用語は、他の聖句における42ヶ月、あるいは1260日と同一の日数であるという事実から、一般に「ひと時」は聖書で用いられている1年、すなわち360日を表しているとして理解されている：

「類似する預言と比較してみると…[時を表している]他の表記法によって、[ひと時とふた時と半時に] 含まれる時の長さを割り出すことができる。黙示録12:14における期間は、…先の聖句で『1260日』と表記されている。黙示録11:2,3において『1260日』は、『42ヶ月』と同じ期間を指している。故に、『ひと時とふた時と半時 (聖書のカレンダーの3年半)』という期間は、…1260日と同一の期間であり、『ひと時』が12ヶ月あるいは360日を表していることは明確である」4BC833。

従って混乱を避けるために、「ひと時とふた時と半時」は、「3年半」よりはむしろ「1260日」または「42ヶ月」とするほうが賢明である。

結論を述べると、ダニエル12:7は、法王教ローマが1260日間神の聖なる民を迫害すると断言している。また、ダニエル12:12は、1335日の間待つ者は、悪人から救出する神のみ声によって祝福されることも断言している。

第7章



「黙示録 13章」は過去、それとも未来か？

黙示録 12章と 13章を章で区切らずに、一続きのものとするならば、黙示録 12章は 13章の予告編とすることができる：

「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」
黙示録 12:17。

黙示録 13章の大部分は、未来に成就するものである。3節以降は、未だ成就していない。

「全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い」黙 13:3

「地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう」黙 13:8

「... 彼は龍のように物を言った」黙 13:11

ほとんどすべての預言解説者が、黙示録 13:11-17 は未だ成就していないことを認めている。3節においてさえ、まだ全世界がこの預言通りに動いている訳ではない。この章の預言は、まだほとんどが成就していない訳だから、直接的には未来の適用ということになる。最初の数節に十分な情報が与えられていて、過去の歴史と連結させることによって、主な登場者の正体分かるようになっている。この章は法王教ローマ（過去、現在、未来）とアメリカ合衆国について述べていることを理解するための、十分な情報が与えられている。ところがこの事以外は、未来の出来事を略述しているに過ぎない。

黙示録 12:17 において、残りの民、または最後の世代に関するドラマが、簡単に紹介されている。13章の主要部分は、この世代の目の前で「第一義的に」成就するのである。他の過去への適用は、二義的なものに過ぎない。

定義：「二義的」1. 第一に重要なものの次 2. 元々のものか主要なものから直々に取られたもの、あるいはそれに依存するもの（ウェブスター辞典）

ペテロが引用したヨエル 2:28-32 は、二義的適用の優れた模範といえる（使徒行伝 2:14-21 参照）。しかしこれらの二義的適用に、最終時代の主要な適用、すなわち最終世代の成就を放棄させてはならない。一義的（主要な）とか二義的という語は、必ずしも事の起こる順序ではなく、その重要性にあるのである。

これらの概念を踏まえ、黙示録13章の一義的成就を決定することが大切である。全章をつなぎあわせ、前後関係をしっかり把握しながら、未来に関わる行為に着目して頂きたい。欽定訳を見ると、黙示録の各章、また節のほとんどが「And (そして、また、なお)」という語でつながっているという事実から、黙示録は、未来の事件に向かって連続的に展開しているように思われる：

「その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けた [1798年] が、その致命的な傷もなおってしまった [現在進行中]。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、…さらに…また、…42ヶ月のあいだ活動する権威が与えられた。そこで、…そして彼は、聖徒に戦いを挑んでこれに勝つことを許され、さらに…支配する権威を与えられた。[また] 地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう」(黙示録 13:3-8 欽定訳ではここだけで「and」という語が17回使われている)。

黙示録 13:3 - 8

「その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けた(1798年)が、(and) その致命的な傷もなおってしまった(今起こっている)。そこで(and)、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い(未来)、また(and)、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに(and)、その獣を拝んで言った、「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか」。この獣には、また(and)、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、(and) 四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた。そこで(and)、彼は口を開いて神を汚し、(and) 神の御名と、(and) その幕屋、すなわち、(and) 天に住む者たちとを汚した。そして(and) 彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに(and)、すべての部族、民族、(and) 国語、国民を支配する権威を与えられた。(and) 地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝む(shall)であろう。」

上の聖句は、1798年から現在、そして未来へと展開している。過去において、全世界が法王教の支配下に置かれた時代はなかったという事実から、3節以降は未来の出来事について述べていることが分かる。従って、黙示録13章の42ヶ月は、ダニエル 12:7 の1260日タイムラインと同様の期間であると理解される。

....四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた。そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。
黙示録 13:5,7

それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろうと言うのを、わたしは聞いた。ダニエル 12:7

※ エレン・G・ホワイトも黙示録13章の42ヶ月を未来に置いている：
サタンが光の天使として日曜日を忠誠のテストとして提示する時、黙示録13章が成就するであろう。最後の時代に、サタンは光の天使として現れる。... その時、ヨハネの預言の最後の成就が起こるであろう。... 「彼らは獣に権威を与えた龍を拝み、... 42ヶ月の間、続けて力が彼に与えられた」The Adventist Apocalypse, 230,pr.8

第8章



「法王至上権 No. 2」とは？

預言は二つの法王至上権を予告している。第一のものは、紀元538年から1798年にヨーロッパ中に及んだ「法王至上権 No.1」。第二のものは、全世界に及ぶであろう「法王至上権 No.2」。獣に「すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威」が与えられるからである（黙示録 13:7）。第一の法王至上権は、ダニエル 7:25 とその文脈において述べられている。この中で預言の日数は、1260年を象徴する。ところが第二の法王至上権は、ダニエル 12:7 とその文脈において、字義通りの日数（1260日にわたる迫害）として述べられている。

二つの法王至上権

法王至上権 No.1 ダニエル 7:25 ; 11:31 ; 黙示録 12:6 538年—————1798年 1260年 ヨーロッパ

法王至上権 No.2 ダニエル 12:7,11 ; 黙示録 12:17 ; 13-18 1260日 全世界

「我々は、大いなる厳粛な事件の起こる間際にいる。多くの預言が、次々と速やかに成就しようとしている。あらゆる権力の要素が、その働きを開始しようとしている。過去の歴史は繰り返されるであろう。昔の闘争が新しい命によみがえり、危険があらゆる方面から神の民を取り囲むであろう。人類家族に極度の緊張がみなぎる。その緊張は全地に蔓延する。…ダニエル書と関連して黙示録を研究しなさい。歴史は繰り返されるからである。…我々は、あらゆる宗教的利点を生かし、今日知っていることよりもはるかに多くを知るべきである」（牧師への証 116 ページ）*。

ダニエル 8:14 の 2300 日の預言には、二重の適用がなされ、最後の時代にも当てはめるべきだろうか。少なくとも現時点では、答えは「否」である。その理由を挙げてみると：

1. ダニエル書 12 章に、2300 日タイムラインは言及されていない。そのタイムラインは、黙示録でも言及されていない。従って、ダニエル書 12 章の三つのタイムラインにあるような、時に関する比較参照はどこにもない。
2. ダニエル書は漸進的である。章ごとに着実に前進していて国家や勢力間の歴史的動きを継続的

* 「神の摂理のうちにその時代の真理に関して、全世界がテストされる時が来るとき、真理が完全な鎖で結びつけられるまで断食してでも祈りをもって聖書を探り調べるよう、人々の心はみ霊によって動かされるであろう。…彼ら（前の世代）は我々と同じように聖書を持っていた。しかし、地上歴史の結末に関する特別な真理の展開は、この地上に住む最後の世代になされるのである」 2 T 692,693。

に拡大し、更に先へと進んでいる。そして最後に、12章で終末事件を締めくくる。過去の歴史的背景から外れて、2300年タイムラインを取り上げるために8,9章へと後戻りするの
は、おそらく賢明でない。

3. 終末の預言において、イエスははっきりと「荒らす憎むべきもの」を引用して、ダニエル12章のタイムラインについて触れられた。また証の書は、それが終末に成就することを裏付けた。が、2300日の二重適用については、イエスも証の書も全く触れていない。
4. 2300日の預言は、主に聖所をめぐる天のドラマと、尚も進行中の裁きを取り扱っている。尚も進行中で、まだ完全に成就していない預言に第二の適用を加えるのは賢明でないと、多くの解釈者は考えている。
5. 2300日(年)の預言に二重の適用を試みた人たちは、聖書を聖書に解釈させるという解釈上の必要条件とルールを満たしていない。自らの主観的憶測によって、様々な終末事件を強引にパズルにはめ込もうとする残念な試みがなされてきた。これは混乱と意見の分裂を招くだけである。
6. 真の見識に立った預言の解説こそが、特定の聖句の意味(主要な適用)を見つける試みである。



第9章

1260日を開始し終了させる「声」とは？

もし預言の解説が正しければ、1335日タイムラインのみならず、ダニエル12:7の1260日タイムラインにも同じ解釈の原則と、同じ手順が適用されるべきである。

ダニエル12:12の1335日タイムラインは、ある声でもって始まり、ある声でもって終わった。それは国家(米国)の「声」で始まり、「神の声」で終わる。国家が立法行為において物を言うこと(米国における日曜休業令)で始まり、永遠の契約の祝福を述べる神の声で終わる。それは預言(黙示録13:11)の成就で始まり、預言(黙示録16:17)の成就で終わる。

同様に、1260日タイムラインも「声」で始まり、「声」で終わる。それは「獣」の勢力(黙示録13:5)と結託するすべての国々の「声」で始まり、「獣の像」(黙示録13:15)と結託したすべての国々の「声」で終わる。

これらの「声」は、**法令を施行**するという国々の物を言う行為である。1260日タイムライン

は、聖書の預言の成就でもって始まり、そして終わる。1335日タイムラインと1260日タイムラインは、解釈上の原則と適用の両方において同一である。

1260日タイムラインは、黙示録 13:5 の成就で始まる。それは黙示録 13:15 の成就で終わる。これらの聖句は、どちらも物を言う声である。

ダニエル 12:7 の1260日のタイムライン

始まり

終わり

この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、42か月のあいだ活動する権威が与えられた。黙示録 13:5

それから、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。黙示録 13:15

1260日



第10章

1260日タイムラインを開始させる「事件」とは？

「この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、42ヶ月のあいだ活動する権威が与えられた」黙示録 13:5。

「国家が『物を言う』とは、その立法および司法権の活動のことである。」大争闘下 161 ページ。

黙示録 13:5 における「語る口」すなわち立法行為は、米国によってでなく、「獣」本人によってな

される。法王教ローマが法律を制定し、世界中の国々が司法行為に及ぶであろう。これは世界規模の政教一致である。

「…さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた [1260日間]。…その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拜むであろう」黙示録 13:7,8。

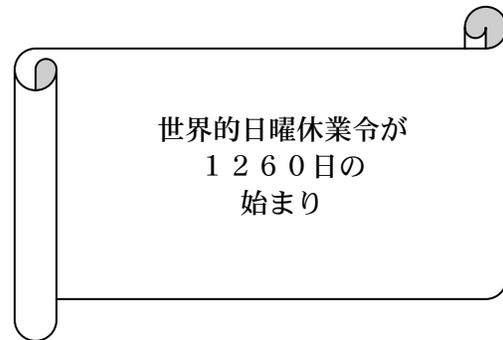
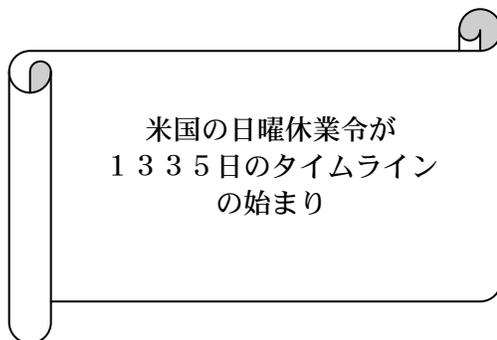
どのような法律が施行されると、すべての国々が獣を拜むようになるのだろうか。その権威のしるしとは何であろう。どのような立法によって、法王教はすべての国々の礼拝を要求することができるのだろうか？

「カトリックの著者たちも、カトリック教会の権威のしるしとして、『安息日を日曜日に変更したという、まさにその行為』を挙げ、それは『プロテスタントも承認している。…彼らは日曜日を守ることによって、祝祭日を制定し人々を罪に定める教会の権威を、認めているのである』と言っている」大争闘下 169 ページ。

「プロテスタント諸教会が、日曜日遵守を強要することは、法王制、すなわち獣を拜むことを強要することである」大争闘下 170 ページ。

従って、黙示録 13:5 の獣である法王教の権威の「しるし」とは、日曜遵守のことである。また、獣が「物を言う」とは、世界規模の日曜遵守（休業）令が法律化されることである。1335日タイムラインは、米国における日曜休業令でもって始まり、1260日タイムラインは、全世界規模の日曜休業令でもって始まる。そうすることによって、世界中の人々に獣を拜ませるのである。

「世界は、恐ろしい結果をもたらす問題に直面しようとしている。地の権力者たちは、合同して神の戒めに逆らって戦い、『小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に』、偽りの安息日を守ることによって教会の習慣に従うよう命じるのである」大争闘下 374 ページ。



一連の出来事の復習：

1. 米国における日曜休業令が1335日の終末シナリオを開始する
2. これが山々への避難に先立って都市を去るしるしとなる
3. 米国日曜休業令の結果国家レベルの荒廃が襲う
4. 世界規模の日曜休業令が1260日タイムラインの開始となる
5. 神の民の迫害が次の預言の開始となる：

「しかし、女は自分の場所である荒野に飛んでいくために、大きなわしの二つの翼を与えられた。そしてそこでへびからのがれて、1年、2年、また、半年の間、養われることになっていた」黙示録 12:14。*

6. 義人たちは「ふるい」を経験し神の印を受ける
7. 義人たちは後の雨の力を受けて大いなる叫びを発する
8. 悪人たちは獣の刻印を受ける

「こうして問題点が明らかにされるとともに、だれでも神の律法をふみにじて人間の法令に従うものは獣の刻印を受ける。彼は、神の代わりに服従することを選んだその権力に対する忠誠のしるしを受けるのである。天よりの警告は次のとおりである。『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲』む。

安息日は、特に論争点となっている真理であるから、忠誠の大試金石となる。最後の試練が人々を襲うとき、神に仕える者と仕えない者の区別が明らかになる。…一方は、地上の権力に服従するしるしを受け入れることによって、獣の刻印を受け、他方は、神の権威に対する忠誠のしるしを選んで、神の印を受けるのである」大争闘下 374, 375 ページ。

* 黙示録 12:14 を、ある人たちは、538-1798年の法王至上権に当てはめる。しかし、14-17節の**第一義的な適用**は、龍が戦いを挑んでくる「女の残りの子ら」すなわち、最後の世代になされるべきである。黙示録 12:14 を過去の迫害に当てはめる者は、法王教と迫害に関して「歴史は繰り返す」事を覚えていなければならない。未来に「女」が荒野に逃げるところは、過去のヨーロッパだけでなく、全世界の人里離れた荒野である。ダニエル 12章のタイムラインは、人類の永遠の運命が決定される、歴史上のクライマックスともなるべき事件と関係するものである。



第 1 1 章

1 2 6 0 日タイムラインの終了となる「事件」とは？

1 2 6 0 日タイムラインの終了となる出来事が、黙示録 13:15 に見出される。それは獣の像、そして国々の「物を言う声」であり、法令による制定のことである。

「それから、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた」黙示録 13:15。

1 2 6 0 日タイムラインの終了となる出来事とは、世界規模の死の法令である。それは神の民をすべて地上から抹殺するためのものである。誰がこのようなことを試みるのだろうか：1. 法王教であるところの「獣」すなわちローマ・カトリック。2. 新世界におけるプロテスタントを表している「獣の像」すなわちアメリカ合衆国。これらの双方が結託して、同じ目的を果たそうとする。故に、彼らは「獣」そして「獣の像」として知られているのである。一方がもう一方を反映している。

「獣の像」である合衆国に息を吹き込むのは、（他の国々に後押しされた）「獣」すなわちローマである。そしてついには、全世界規模の死の法令を制定する（物を言う）であろう。その運動を合衆国が先導し、他の国々がそれに続く：

「安息日がキリスト教世界全体の特別な論争点となり、宗教と政治の当局者が結束して日曜日遵守を強要するとき、少数の者は、世間の要求に屈することを断固として拒むために、全世界ののろいの的となる。教会の制度と国家の法律に反対の立場を取る少数者は許すべからざる者であり全世界が混乱と無法の状態に陥るよりも、彼らが苦しみを受ける方がよいと主張される。同じ議論が1800年前に、『民の役人たち』によってキリストに対してなされた。陰険なカヤパは、『ひとりの人が人民に代わって死んで、全国民が減びないようになるのがわたしたちにとって得だ』と言った。この議論は決定的なものに思われ、ついに、第四条の戒めにある安息日を聖とする者に対して法令が発せられ、彼らは最も重い刑罰に相当する者として非難される。そして人々は、一定期間ののちには彼らを殺してもよい自由が与えられる。旧世界のカトリック教と新世界の背教的新教とは、神の戒めの全部を尊ぶ者たちに対して、同じような手段をとるであろう」大争闘下 387, 388 ページ。

「物を言う」のは米国であるが、それは全世界規模の死の法令へと発展する。獣を拝むすべての国々が、声を発するようになるのである（黙示録 13:3, 7, 8, 11）。

最終的世界規模の死の法令と、日曜遵守令に伴う死の刑罰を混同してはならない。死の刑罰は、最後の七つの災いが始まる前にあちらこちらで起こるが、最終的世界規模の死の法令は、第六の災いの下で起こる。詳細については次の章で扱うことにする。死刑と最終的の死の法令を混同したために、あ

る人たちは終末事件の順序を完全に狂わせてしまった。最後の七つの災いが始まる前に、最終的死の法令を置こうとしたのである。これは誤りである。後に分かることであるが、最後の世代は、第七の災いのときに発せられる神の声によって、死の法令から救出されるのである（黙示録 16:17 参照）。最終的死の法令を制定するためになされる地の王たちの召集は、第六の災いの下で起こる。神の声による死の法令からの救出が、第六と第七の災いを分ける事件となる：

「人間の法律による保護が、神の律法を尊ぶ者たちから取り去られると、彼らを滅ぼそうとする運動が、あちこちの国で、いっせいに起こる。法令に定められた時が近づくとつれて、人々は、この憎い教派を根こそぎにしようとする。一夜のうちに決定的な打撃を与えて、異議と非難の声を、全く沈黙させようということが決定される」大争闘下 412 ページ。

「キリスト教国のさまざまな為政者たちが、戒めを守る者たちを抑圧するために出した法令によって、政府の保護が取り除かれ、彼らが彼らの滅亡を願う者たちの手にまかされると、神の民は都市や村から逃れ、群れを作って最も荒れ果てた寂しい場所に住む。多くの者は山のとりでに避難所を見つける。ピエモンテの谷間のキリスト者たち（ワルデンセス）のように、彼らは地の高い所を隠れ家とし、岩のとりでを神に感謝する（イザヤ 33:16 参照）。しかし、あらゆる国のあらゆる階級の人々が、身分の高い者も低い者も、富んだ者も貧しい者も、黒人も白人も、大勢の者が最も不当で残酷なとらわれの身に突き落とされる。神に愛されている者たちが、疲れきった日々を送り、鎖につながれ、牢獄の格子の中に閉じ込められ、死刑の宣告を受ける。ある者は暗くいまわしい土牢の中で、餓死するままに放置されているように見える。彼らのうめきを聞く人間の耳はなく、彼らを助けようとする人間の手はない」大争闘下 400、401 ページ。

1260日タイムラインは、神の民の迫害に関するものであることを覚えよう。「打ち砕く（散らす）」という言葉が、タイムラインの主部である。悪人たちが世界規模の死の法令を通過させようと決断するとき、この迫害はクライマックスに達するのである。



「ひと時とふた時と半時」の間
「聖なる民」を「打ち砕く」(迫害する)ダニエル 12:7

第 1 2 章



「世界規模の死の法令」とは？

世界規模の死の法令は極めて重大であるため、黙示録 13:15 で述べられている主な事件であり、ダニエル 12:7 の 1 2 6 0 日タイムラインにおける節目となっている。それは地上におけるドラマのクライマックスというだけでなく、天の法廷が民の救出措置を取るための目印となるので、極めて重要なのである。キリストとサタンの大争闘において、神の行動だけが先走ることはない。神が行動に移られる前には必ず、悪が全宇宙の前で自らを暴露しなければならない。旧約時代においても、この相互作用の原則は守られてきた。神がエジプトの長子の死を許される前に、悪どいパロがヘブル人の赤ん坊を殺させたのであった。エジプト軍がヘブル人を全滅させようと決起するまでは、神が紅海で彼らを滅ぼされることはなかった。悪どいハマンがユダヤ人に対する死の法令をけしかけるまでは、神がハマンの自滅をお許しになることはなかった。歴史を通じてそうであったように、大争闘の終わりにも、悪人たちが「物を言う」（すべての国が死の法令を制定する）ことによって神の民の抹殺を決断するまでは、神がその民の全面的救出に乗り出されることはない。

黙示録 1 2 章に出てくる大きな赤い龍の七つの頭を研究することで、サタンがどのようにして、七度にわたって世界王国を築こうと試みてきたかが分かってくる。彼は死の法令において、これを成し遂げようと試みる：

「サタンは、エサウを動かしてヤコブに立ち向かわせたように、悩みの時に、悪人たちを煽動して神の民を滅ぼそうとする。…もし彼が、彼らを地上から一掃することができるなら、彼の勝利は完全なものとなる」大争闘下 391 ページ。

もしサタンが一度でも、この地上の住民をすべて彼に従わせることができるなら、宇宙の前で地球の支配権を「法的に」主張できるだろうと、彼は考える。神は決して、このようなことが起こるのをお許しにならない。十四万四千という数で表されている神の民は、迫害に勝利するであろう。

「あなたがたは、聖なる祭を守る夜のように歌をうたう。また笛をならして主の山にきたり、イスラエルの岩なる主にまみえる時のように心に喜ぶ。主はその威厳ある声を聞かせ、…その腕の下ることを示される」イザヤ 30:29、30。

ダニエル 1 2 章のタイムラインを理解する者たちは、世界規模の死の法令を、自分たちの救出が近いというもう一つのしるしとして見るであろう。



第 13 章

黙示録 17:12 の「一時（1 時間）」とは？

「あなたの見た十の角は、十人の王のことであって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時（1 時間—欽定訳）だけ王としての権威を受ける。彼らは心をひとつにしている。そして、自分たちの力と権威とを獣に与える」黙示録 17:12, 13)。

この預言も終末事件についてのものであるが、どのように理解することができるだろうか？

「このような聖書の証言がある以上、黙示録は人間の理解を超えた神秘的なものであるなどと、どうして教えることができよう。それは啓示された神秘であり、開かれた書である。黙示録の研究は、ダニエル書の預言に心を向けさせる。この両書は、世界歴史の終末に起きる諸事件について、神からの最も重大な教えを与えている」大争闘下 32 ページ。

ダニエル 12 章のタイムラインをひもといて研究するまで、黙示録 17 章を理解することはできない。ダニエル 12 章のタイムラインの研究は、黙示録 17 章の研究と組み合わせるまで、完全に解き明かされることはない。ダニエル 12:7, 11 でダニエルが見た出来事は、ヨハネが黙示録 17 章で書いた出来事と全く同じものである。どちらもイエスの再臨直前に起こる終末事件を描いている。

黙示録 17 章は、ダニエル 12 章のタイムラインに大きな光を投げかけてくれる：

1. まず第一に認知されるべき重要な概念は、次の事実である：法律の制定とそれが施行される日との間には、一定の時間的隔りがある。死の法令の制定とそれが施行される日との間には、一定の時間的隔りがある。

「…ついに、第四条の戒めにある安息日を聖とする者に対して法令が発せられ、彼らは最も重い刑罰に相当する者として非難される。そして人々は、一定期間ののちには彼らを殺してもよい自由が与えられる」大争闘下 388 ページ。

「戒めを守る人々を死刑にするという全般的布告は、その時日を定めているにもかかわらず、敵たちは、ある場合には法令の時期を早めて、定められた時よりも前に彼らの命を取ろうとする」大争闘下 407 ページ。

2. 考察すべき第二の点は、法律が夜中から施行されるようになるという事実である。死の法令は、法律が定めた時である一定期間の後、すなわち「定められた時」の夜中に施行される。
3. 「神の声」も真夜中に発せられる。その声が、真夜中から施行される死の法令から民を救出する。

「法令に定められた時が近づくにつれて、人々は、この憎い教派を根こそぎにしようとたくらむ。一夜のうちに決定的な打撃を与えて、異議と非難の声を、全く沈黙させようということが決定される」大争闘下 412 ページ。

「神が、御自分の民を救うためにその力をあらわされるのは、真夜中である。…この怒ったような天の真ん中に、一ヶ所言うに言われぬ栄光に満ちた澄んだ空間があって、そこから神のみ声が、多くの水の音のように聞こえてきて、『事はすでに成った』と告げるのである」大争闘下 414 ページ。

4. 死の法令の制定は、ある定まった時に起こる。1260日タイムラインの終わりである。法令が施行される時も定められていて、はっきりしないものは何もない。

黙示録 17:12 の一時（1時間）は、明確な時の単位、つまり一定の確かな単位であって、不確定の時ではない。誰も不確定な短い時と言ってはならない。

5. 黙示録 17:12 の「一時」は、地の王たちがある目的で「獣」と結束する時のことである。この時に、「彼らは心をひとつにし、死の法令を全世界に敷くために「自分たちの力と権威とを獣に与える」であろう。その真の目的は、「小羊に戦いをいど」むためである。
6. 黙示録 17:12 のこの「一時（1時間）」は、獣の統治、または勝利を描いている。地の王たちを集めて死の法令を支持させるとき、獣が勝利したように思われる。法令が制定されてから施行されるまでの「一時（1時間）」、彼らは勝利の杯に酔いしれる。その間、神の民は「ヤコブの悩みの時」を経験するのである。

「そのとき神の民は、ヤコブの悩みの時として預言者によって描かれている悩みと苦しみの場面に投げ入れられる」大争闘下 388 ページ。

7. ある定められた日の真夜中に、世界規模の死の法令が施行される。制定から施行まで、字義通りの1時間というのはあまりにも短すぎる。従って、文脈が象徴的表現で書かれているこの預言の「一時（1時間）」というのは、象徴的時を表している。故に、解説を必要とする。

第14章



預言の解釈に当たっての「1日を1年とする計算法」とは？

「1日を1年とする計算法」は、標準的変換法である。ある意味で、インチをヤードに、あるいはその逆に変換するようなものである。この計算法は、象徴的時を字義通りの時に変換させる。それは象徴的時を解読する時、象徴的時の預言を字義通りの歴史的事件、または字義通りの言葉で書かれた預言に当てはめるのに、必要不可欠である。

ダニエル12章が字義通りの言葉で書かれた、時を扱った預言であることは明白である。ところが黙示録は、象徴的表現で示されており、そのような文脈内に書かれている時も象徴である。ダニエル書と黙示録の研究は平行してなされるべきであるならば、ダニエル書の字義通りの時を、象徴的黙示録で明記された時に連結させるために、「1日を1年とする計算法」を用いる必要が出てくる。

黙示録 17:12 の「一時（1時間）」を解読するために、「1日を1年とする計算法」を持ち出して、象徴的「1時間」が字義通りのどの時間に匹敵するかを見る必要がある。

$$\begin{aligned} & \text{象徴的1日} = \text{字義通りの1年} \\ & \text{象徴的} 1 / 24 \text{日 (1時間)} = \text{字義通りの} 1 / 24 \text{年} \\ & \text{字義通り1年の} 1 / 12 = \text{字義通り} 30 \text{日} \\ & \text{字義通り1年の} 1 / 24 = \text{字義通り} 15 \text{日} \end{aligned}$$

従って、黙示録 17:12 の象徴的「1時間」は、字義通りの15日を表す。

従って、世界規模の死の法令が制定されてからそれが施行されるまで、15日間あると結論づけることができる。この15日間というのは、ダニエル12章の三つのタイムラインの全構造にとって、極めて重要である。

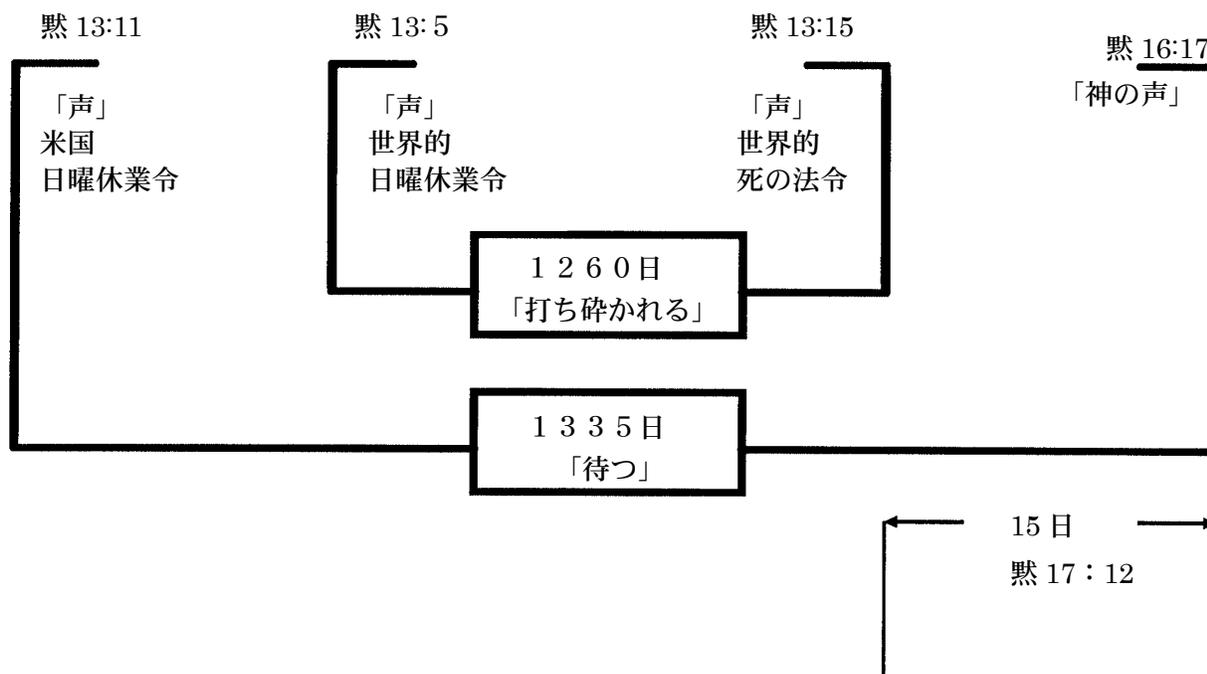
「1日を1年とする計算法」は、サタンの特別な攻撃的となっている。それを無効にすることによって、未来主義者らは、今日のプロテスタントがさまよっている混乱と闇に、ダニエル書全体を置いておくことができた。過去数十年間、この「1日を1年とする計算法」は、アドベンチズムにおいても攻撃されてきた。今日でも、この有益な道具を用いて黙示録 17:12 に光を与えるよりは、それを闇の中に残しておくほうがよいと抗議する者たちさえいる。この計算法は無効になったという証の書の言葉が全くないにもかかわらず、多くの人たちが、その計算法は1844年に消滅したと憶測する。



第15章

1335日と1260日の「関係」は？

二つのタイムラインの関係を、下に描いてみる：



1. これらのタイムラインは同じ時に始まらない。
2. タイムラインは一緒に終わらない。
3. 1260日タイムラインは、1335日タイムラインの期間内に入る。
4. これらのタイムラインは、どちらも「声」または法律の制定、すなわち政府の「物を言う声」で始まり、終了する。
5. 双方のタイムラインは、その開始と終了が黙示録の預言に記されている。
6. 1260日は迫害の期間を指す。
7. 1335日は、神の声を待つ期間である。
8. 死の法令の制定が、その施行までの「一時（1時間）」を開始する。

9. 「一時（１時間）」は、字義通りの１５日間を表す。
10. １２６０日に字義通りの１５日を加えると、１２７５日になる。
11. １３３５日から１２７５日をひくと、６０日という期間が割り出される。これが米国で日曜休業令が発せられてから、それが全世界規模になるまでの期間となる（この６０日という期間がはずれれば、この計算法はすべて誤りであることが分かる）。しかし、もしこの期間がぴったり６０日であれば、三つのタイムラインの研究がすべて正しかったという確信を得ることができる。

質問

何故、「打ち砕く（散らす）」１２６０日が神の民を救出する神の声ではなく、世界規模の死の法令が制定されるときに終了するのだろうか？

答え

ダニエル 12:7 の 1260 日タイムラインにおいて、彼（迫害者）が文の主語になっている。「彼」がその行為の主謀者である。文の主語となっている彼が「散らす（迫害する）ことを成し遂げる」というこの行為である。1260 日は、迫害者とその迫害行為がエスカレートし、クライマックスに至るまでの期間である。彼は行きつけるところまで行こうとする。それ（1260 日）は、神の民が圧倒され苦悩する時間を表しているわけではない。



第 16 章

「ヤコブの悩みの時」とは？

世界規模の死の法令が制定されてからそれが効力を発するまで、神の民は「ヤコブの悩みの時」を経験する。

「聖徒たちを殺す布告〔法令〕が発せられた。そのために聖徒たちは、昼も夜も救いを叫び求めた。これがヤコブの悩みの時であった。」初代文集 97 ページ。

「…第四条の戒めにある安息日を聖とする者に対して法令が発せられ、彼らは最

も重い刑罰に相当する者として非難される。そして人々は、一定期間ののちには彼らを殺してもよい自由が与えられる。…そのとき神の民は、ヤコブの悩みの時として預言者によって描かれている悩みと苦しみの場面に投げ入れられる」大争闘下 388 ページ。

「サタンは、エサウを動かしてヤコブに立ち向かわせたように、悩みの時に、悪人たちを煽動して神の民を滅ぼそうとする。そして彼は、ヤコブを訴えたように、神の民に対する非難を申し立てる。彼は、世界を自分の手中にあるものと考えている。しかし神の戒めを守る小さな群れが、彼の主権に反抗しているのである。もし彼が、彼らを地上から一掃することができるなら、彼の勝利は完全なものとなる」大争闘下 391 ページ。

法律の制定と悪人たちの狂暴なふるまいによって、サタンは「彼らを地上から一掃」しようと試みるが、保護天使たちが彼らを完全に守る：

「彼は、天使が彼らを守っているのを見て…」大争闘下 391 ページ。

「天の歩哨たちは、忠実に任務に服し、警戒を続ける。戒めを守る人々を死刑にするという全般的布告は、その時日を定めているにもかかわらず、敵たちは、ある場合には法令の時期を早めて、定められた時よりも前に彼らの命を取ろうとする。しかし、すべての忠実な人々の回りに駐屯している力強い警護者たちを通り過ぎることは、だれにもできない。なかには、町や村から逃げる途中に襲われる者たちもいる。しかし、彼らに向かってあげられた剣は、折れてわらのように力なく落ちる。また他の者たちは、軍人の姿をした天使たちによって守られる」大争闘下 407 ページ。

ヤコブの悩みの時における「悩みと苦しみ」は、サタンによって引き起こされる。彼らが悪人たちの手から救出されるという目に見える証拠は全くないが、神の言葉のうちにある信仰によって生きなければならない。神が彼らを救出なさるといふ具体的な確証がないため、「彼らは、彼らの多くの罪をこれまで悔い改めたことを指し示して、神の前で彼らの心を悩ま」す（大争闘下 393 ページ）。

「しかし、彼らは、自分たちが無価値なことを深く感じてはいるが、告白すべき罪を隠してはいない。彼らの罪は、前もってさばかれて、消し去られている。彼らは、罪を思い出すことができない」大争闘下 393 ページ。

ヤコブの悩みの時の始まりと終わり

始まり	終わり
世界的死の法令 黙 13:15	神の声 黙 16:17

ヤコブの悩みの時

黙示録 17:12 の象徴的 1 時間は字義通りの 15 日

初代文集と大争闘に描写されているヤコブの悩みのときの
始まりと終わりに関係する諸事件のリスト：

1. 命令書 [死の法令] が、ヤコブの悩みの時を開始させる..... 初代文集 456
 2. 聖徒たちは神を信頼し、冷静に落ち着いていた.....456
 3. サタンが彼らを滅ぼそうと試みる.....456
 4. 悪人たちが襲いかかったが、天使たちが聖徒たちを守る.....456
 5. 聖徒たちは、昼も夜も、神に救いを求めて叫んだ.....457
 6. 聖徒たちは都会や村を立ち去る.....459
 7. 神の民を殺そうとして振り上げられた剣は、わらのように折れて落ちた.....459
 8. 聖徒たちは神と格闘していた.....458
 9. 聖徒たちは真夜中に救出される.....460
 10. 神が、イエスのおいでになる日時を告げられる.....461
 11. 神の声が、彼らをヤコブの悩みの時から救出する.....460
-
1. 死の法令の制定がヤコブの悩みの時を開始させる..... 大争闘下 388
 2. エサウが一隊を率いてヤコブに迫ったように、悪人たちが聖徒たちを取り囲む.....389
 3. サタンは過去の聖徒たちの罪を正確に知っている.....391
 4. サタンは彼らの罪を神の前に示す.....391
 5. 主はサタンが、彼らを極限まで試みることを許される.....391
 6. 聖徒たちは、その全生涯の中に、良いところをほとんど見ることができない.....391
 7. 聖徒たちは、自分たちの弱さと無価値とを十分に自覚している.....392
 8. 彼らの状態は絶望的であると、サタンは言う.....392
 9. 聖徒たちは、神の前で彼らの心を悩ます「すべての罪を悔い改めただろうか？」392

10. 聖徒たちは、キリストの義を懇願する.....392

11. 聖徒たちは、悪人たちのよこしまが終わるように熱望する.....392

12. 聖徒たちの罪は、前もってさばかれて、消し去られている.....393

13. 彼らは、罪を思い出すことができない.....393

14. 聖徒たちは、疲労と遅延と飢えに耐える.....395

15. サタンがキリストを装う（但し、これが初めてではないかもしれない）.....398

16. 神の民は都市や村から逃れる.....400

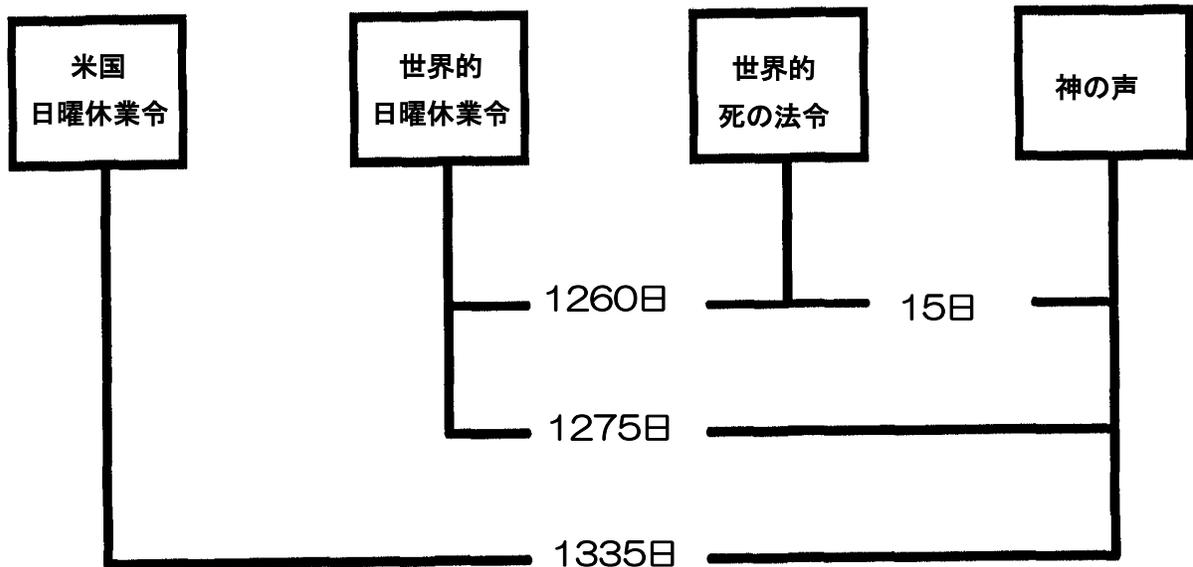
17. 聖徒たちは群れを作って最も荒れ果てた寂しい場所に住む.....400

18. 聖徒たちの多くは山のとりでに避難所を見つける.....400

19. 聖徒たちのある者は投獄される.....401

20. 聖徒たちは、軍人の姿をした天使たちによって守られる.....407

21. 聖徒たちは、神の声によって、ヤコブの悩みの時から救出される（黙示録 16:17）413



第17章



ダニエル 12:7 でみな成就する「これらの事」とは？

「…それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろうというのを、わたしは聞いた」ダニエル 12:7。

1260日の終わりにみな成就する「これらの事」とは何なのだろう。答えを知るには、善と悪の大争闘の意味を理解しなければならない。これが、罪の恐ろしさを理解する鍵となる。

約6千年もの間、この地球は、善と悪との大争闘の舞台となってきた。自らの主張を証明する場所として、サタンはこの世界の支配権を主張してきた。宇宙の墮落したことの無い住民たちは、この大いなる戦いを見守ってきた。勝敗の鍵をずっと握ってきたのが、神の民であった。

カインがアベルを殺害して以来、悪人たちは「聖なる民」を迫害してきた。ダニエル 12:7 において、1260日の終わりまでに、迫害者が死の法令の制定によって最後の手段を用いることが記されている。

1260日の終わりとなる死の法令は、各時代行われてきたすべての迫害の総決算となる。地上から神の民を完全に抹殺してしまうために、悪人たちは最後にある計画をめぐらす。この世界規模の死の法令が、悪人たちのなし得る限界点である。この法令によって、彼らは天の法廷において自分たちが受ける判決をも決定してしまうのである。

全世界が驚いて獣に従うとき（黙示録 13章）、また第六の災いの下、神の民を地上から一掃するために、地の王たちが悪霊の召集を受けるとき、死の法令が迫害のクライマックスとなるであろう。

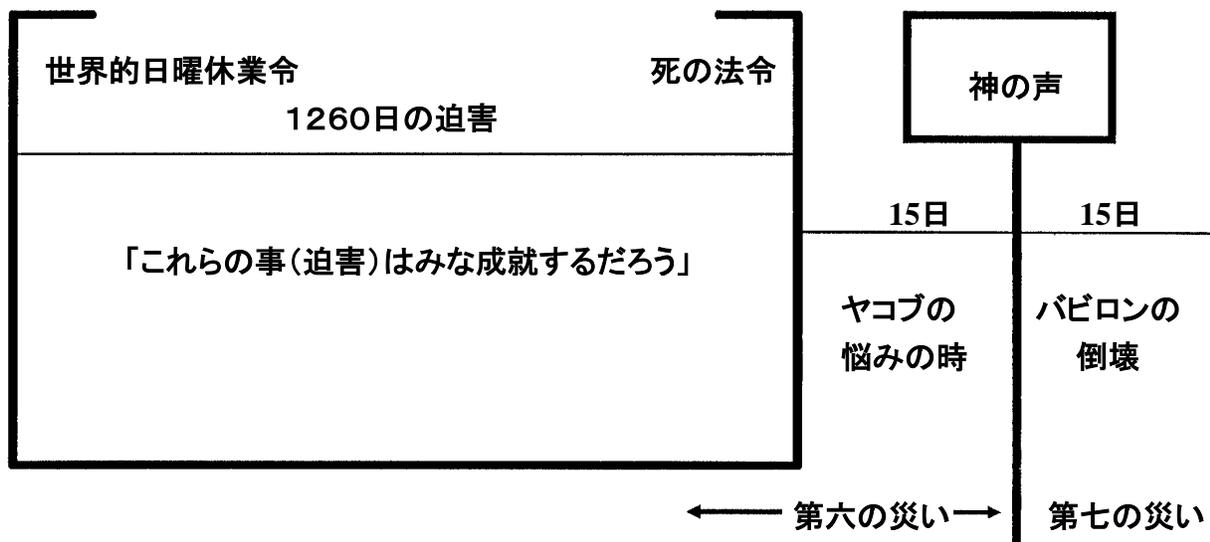
「これらの事」すなわち神の民に対して悪人たちが行ってきたことが、みな成就するのである。サタンとその軍勢は、立法行為において自らの悪を完全に暴露する。彼らは自らの運命を決定してしまうのである。

死の法令は、ヤコブに向かい隊を率いて進んで行ったエサウに似ているが、神の民もまた、法律が制定されてから施行されるまでの間、救出を日夜叫び求める。彼らは迫害の魔の手から守られ、「これらの事はみな成就する」であろう。

「これらの事」の成就となる1260日の終わりは、再臨の日時に関するものではない。神の声に関するものでも、バビロンの崩壊に関するものでもない。千年期に関するものでも、悪人の滅亡に関するものでもない。神の民が経験する、悩み苦しみの終わりに関するものでもない。

「これらの事」は、大争闘におけるあらゆる迫害行為の究極を表しているのである。

下の表を参考にされたい：



第Ⅳ部のまとめ

ダニエル 12:7 の「1260日」タイムラインとは？

ダニエル 12:7 の 1260 日のタイムラインは次のような事を表している：

1. 亜麻布を着た人で表されている大祭司イエスは、1844年以後から地上歴史終了までの期間内に、ダニエル 12:7 のタイムラインを置いている。
2. 贖いにおける大祭司イエス御自身が、最終世代の最後の迫害は、字義通りの 1260 日を超えることはないと言われた。

3. **最終世代**だけが、これらの事がみな成就するのを見る。
4. 法王教ローマが、1260日間最後の世代を迫害する。
5. 法王至上権 No.2 は、ヨーロッパだけでなく全世界に及ぶ。
6. 未来主義者ではなく、真の歴史主義者だけが、終末の反キリストの正体をローマとする。
7. ダニエル 12:7 の「ひと時とふた時と半時」は、字義通りの1260日である。
8. 1260日タイムラインは1335日タイムラインと共に、一貫して「声」でもって始まり、「声」でもって終わる。
9. ダニエル12章のタイムラインと黙示録13章は、平行関係にある聖書の預言である。
10. 「声」は、政府の立法行為を表している。
11. 世界規模の日曜休業令が、1260日タイムラインの開始点となる。
12. 世界規模の死の法令が、1260日タイムラインの終了点となる。
13. 世界規模の死の法令が、すべての迫害行為のクライマックスとなる。
14. 死の法令でもって1260日間の迫害は最高潮に達し、神の民は完全に保護される。
15. 死の法令が制定されてから施行されるまでの間に、一定の期間がある。
16. 法令が制定されてから施行されるまでの合間は、黙示録 17:12 によると15日間である。
17. 15日間、悪人たちは得意になって治める。
18. 15日の合間が、ヤコブの悩みの時となる。
19. 「1日を1年とする計算法」は今でも有効で、それにより、黙示録 17:12 の「1時間」を字義通りの15日に変換することができる。
20. 1260日と1335日は密接に関係している。双方が同じ時に始まり、同じ時に終わることはないが、一連の事件の輪郭を連結させている。
21. 死の法令が通過した後、神の民は悪人たちから守られる。死の法令で、罪のデモンストレーションが究極に達するからである。
22. 1260日タイムラインの終了で、「聖なる民」の悩み苦しみが終わる訳ではない。ダニエル 12:7 は、「彼」が「打ち砕く」時、死の法令によって、これらの事（迫害）がクライマックスに達し、終わる時までの**悪事を働く者**に焦点が当てられているのである。
23. 義人たちは1335日間、「神の声」による救出を待望する。
24. 死の法令から更に15日間、神の声を待つ。
25. 諸事件の描写は、再臨の日時を予告するものではない。神の民は最後の危機を生き延びるという希望と喜びを、最終世代の人々に与える。
26. これらのタイムラインは、神の民に強い確信を与えるためのものである。



第V部

ダニエル 12:11 の 1290 日の「常供」とは？

「常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、1290 日が定められている」ダニエル 12:11。

序論

ダニエルは、「終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい」と言われた（ダニエル 12:4）。終わりの時まで秘され、理解されなかった言葉のひとつが「常供」である。

「終わりの時」すなわち最後の世代まで、ダニエル 1 2 章は理解されないことになっていた。またダニエル 1 2 章の前後関係における「常供」も、終末まで開封されないことになっていた。

ダニエル書のある部分は、初めからずっと理解されてきた。預言のある側面は、少なくとも部分的には、ずっと理解されてきた。ヨーロッパの宗教改革者たちは、ダニエル 7 章の「小さい角」を法王教ローマであると認識し、これがローマとプロテスタントの分離をもたらしたのであった。1798 年、教皇が捕らえられるまでに、プロテスタントはダニエル 7:25 の 1260 日が、紀元 538 年に始まり 1798 年に終わると認識していた。ダニエル 8:14 の預言が中心となった大再臨運動によって、ダニエル書は更に開封された。1844 年以後、アドベンチストの先駆者たちは、ダニエル 8 章と 9 章を更に解明し、調査審判の理解へとたどり着いた。6 千年という見地から歴史を見ると、確かにアドベンチストの先駆者たちは「終わりの時」に生きていて、ダニエル 7、8、9 章に関する大きな光が彼らに与えられた。が、彼らは最後の世代が生きる終末時代にいた訳ではなかった。ダニエル 1 2 章がついに解明されるのは、この最後の時代においてなのである。

「神の摂理のうちに、その時代のための真理をめぐって世界が試みられる時がやってくると、人々の頭脳は聖霊に促され、断食と祈りをもって聖書を調べるようになるであろう。鎖の輪がひとつひとつ調べられて完全に連結されるまで、彼らは調べ続ける。…彼ら [先立つ世代] は我々のように聖書を持っていたが、地上歴史最後の場面に関係している特別な真理の解明は、最後の世代が生きている時代においてである」2 T 692,693。

「常供」は、銀行の地下金庫室にかかっている時限錠の様なものである。設定された時まで開かれることはない。預言とは「前もって書かれた歴史」のことである。そこに記されている出来事が今にも起ころうとしているその時まで、「巻物」をこじ開けることは決してできない。神が許されるその時にのみ、預言の解説者はその中にある宝を発見すべく、預言の地下金庫を開けることができるのである。

「常供」は、終末までしっかりと錠がかけられたままになっていた。これまで「常供」の意味を認識しようというこれまでの努力は、かえって不確実と挫折に終わった。例えば：

1. ユダヤ人は「常供」を、日毎の儀式と**犠牲制度**と考えた。それは宮を破壊し、**日毎のいけにえ**を停止させた異教徒らによって取り除かれた。
2. ある初代クリスチャンたちは「常供」を、ここ地上での**キリストの奉仕**と考えた。それは十字架で取り除かれた。
3. 3、4世紀の背教以後、あるクリスチャンたちは「常供」を、背教によって取り除かれた真の福音に関するものと考えた。
4. それを受けてヨーロッパの宗教改革者たちは「常供」を、**真の福音**に提示されている**祭司キリストとその天における奉仕**と理解した。そのような理解は、法王教によって民衆から取り除かれた。
5. 法王教ローマは「常供」を、**日毎のミサと聖餐**であると主張した。宗教改革者はそれを取り除いたと、ローマは主張した。
6. アドベンチストの先駆者たちは「常供」を、**異教または異教ローマ**と理解した。その**王座と権威は、法王教ローマによって取り除かれた**からである。他の初代アドベンチストたちは「常供」を、法王支配によって民衆の心から取り除かれた、キリストの継続的奉仕に関するものと考えた。
7. 現代の預言解説者たちは、意見がまちまちである：ある人たちは「常供」を、恩恵期の終了時に取り除かれる**キリストの天における奉仕**と考える。他のある人たちは「常供」を、永続的（不朽の）安息日と推論する。**真の安息日に礼拝する自由**は、日曜遵守令によって取り除かれるからである。他には「常供」を、恩恵期の終了で悪人たちから取り除かれる永遠の契約と説く人たちもいる。

上挙したリストのすべてに、重大な反対理由を見つけることは可能である。どれもすべて正しいとは言いがたい。ほとんどが推測か、せいぜい「人間の知恵」とみなすことができる。そのようなものは通常、人を暗闇と混乱に導くだけである。「常供」に関して、過去と現在のごたごたから啓蒙を求めるとは無益である。私たちは頭の中をきれいに片づけて、白紙の状態から始める必要がある。^{*}

^{*} 過去におけるいろいろな考え方は、L.E.フルームの“The Prophetic Faith of Our Fathers”の4巻に見ることができる。その中に、この「常供」の問題に関して、多くの大聖書学者たちの考えを挙げたチャートなど、詳しい情報がある。特に4巻の1118、1119を参照。警告の付録も参照。

従ってすべての先入観を取り除き、偏見のない思いで、ダニエル 12:11 の「常供」に取り組むことが肝心である。この重要な主題の研究は、学術的アプローチがなされ、次の解釈上の原則を守るのに細心の注意が払われるべきである：

1. 原語はその二義的意味ではなく、もともとの意味に従って考慮されねばならない。
2. 証の書の勧告と指導が守られるべきである。
3. イザヤ書による聖句の相互参照の原則に従うべきである。
4. 章や書の文脈的意味が守られねばならない。
5. ダニエル書に登場する大争闘のテーマが考慮されねばならない。
6. 預言の解説は「科学」である。一つ一つの概念が矛盾なく組み合わさっている。その理念が貫かれねばならない。
7. 黙示録の他の終末預言に調和して、最後の危機と救出のあらゆる側面から、結論はタイムラインの主題に適切にはまらなければならない。

もし研究が正しければ、読者は躊躇することなく、「これはあまりにも明らかだ。どうしてこんなことが分からなかったのだろうか？」と感嘆の声を上げることができるはずである。

この章では次の質問に答えていく：

1. 「常供の燔祭」とは？
2. 「常供」を意味する「タミード」とは？
3. 「常供」の前後関係は？
4. 「常供」の連続体とは？
5. 「常供」、連続体のサイクルとは？
6. 「常供」を表す王の笏(主権、王位)とは？
7. 「常供」はどのように取り除かれたのか？
8. 「常供」はどのように取り除かれる(未来形)のか？
9. 再臨運動先駆者とは何であったのか？
10. 「常供」について預言者は何と言っているか？

第1章



「常供の燔祭」とは？

ダニエル書を含む聖書のほとんどにおいて、「常供（日毎）の」という語は、「燔祭」という語にくっついている：

- ダニエル 8:11 「その常供の燔祭を取り除き」
ダニエル 8:12 「常供の燔祭と共に、これにわたされた」
ダニエル 8:13 「常供の燔祭…について、幻にあらわれたことは」
ダニエル 11:31 「常供の燔祭を取り除き」
ダニエル 12:11 「常供の燔祭が取り除かれ」

欽定訳や他のほとんどの英語訳聖書において、「燔祭」という語はイタリック体（傾斜書体）で書かれている。これはもともとの原語にはなかった、という意味である。つまり「燔祭」という語は、翻訳者によって付け加えられたということである。

何故そのようなことをしたのだろうか？「常供」という語が名詞ではなく、形容詞だからである。この事実がジレンマを引き起こす。主語がない！名詞あるいは主語がないと、当然次のような疑問が起こる：「常供」とは一体何なのか？

聖書の翻訳者たちは名詞がなくなっていることを知っていて、知り得る限りにおいて、それを補うために「燔祭」という語を挿入したのであった。どういう訳か、それは適切なことのように思われた。中でもユダヤ人は、それを宮の犠牲に関することとして理解しており、クリスチャンはキリストの犠牲、または宮務めに関することとして理解していた。

この「燔祭」という語は不適切で、神の民を暗闇と混乱に導くものであることを、主はその預言者を通して残りの民にお示しになった。

「それから、『常供の燔祭』（ダニエル 8:12）の『燔祭』（サクリファイス）という言葉は、人間の知恵によって附加されたもので、本文にはないものであることをわたしは見た。…暗黒と混乱が起こった」初代文集155ページ。

まず聖書研究生がなすべきことは、上挙した五つの「燔祭」という語を、ペンか鉛筆で塗りつぶしてしまうことである。そして燔祭という観念を、頭の中から完全に削除してしまうのである。「常供」は象徴的儀式、犠牲制度とは何の関係もないこと、またカルバリーにおけるキリストの犠牲とも無関係であることを、我々は理解しなければならない。聖所における日毎の犠牲や儀式、あるいはキリストの犠牲に結び付けようとするすべての議論は不適切である。

「常供」は、キリストの祭司としての役割と天における奉仕に関するものであると、ある人たちは推測する。キリストの奉仕は、その犠牲よりもはるかに偉大であると彼らは説く。しかしヘブル書のほぼ全体が、新しい契約の大祭司、仲保者としてのキリストの全奉仕は、その受肉とカルバリーの犠牲によってのみ有効であることを証明するための議論である。キリストの天における奉仕を、その犠牲から引き離すことは不可能である。それが贖罪の全過程の中心だからである。

従って、「燔祭（犠牲）」という語が本文に属するものでなく、「燔祭」という概念はダニエル書の「常供」と関連させるべきものでないと、預言者が明確に述べたのならば、「常供」はキリストの継続的天の奉仕に関するものであるという思想にも、強力に反対すべきである。*

第2章



「常供」を意味する「タミード」とは？

定義：

「常供（日毎）の」の語源となる「タミード (tamiyd)」—伸ばすこと、不定の延長：但し限定的にはあるが、日常の…継続…（連続）、いっそう永続的なものとしてのみ用いられた（ストロングのコンコルダンスのヘブライ、カルデヤ語辞典 125 より）。

「常供」という語は、その原語である「タミード」から訳された。もともとは「伸ばす、不定の延長」—連続体の意味があった。

ダニエル書においてそれが「常供」と訳されてしまったのは、極めて残念なことである。それは読者に、何度も繰り返し起こる何物かを連想させてしまう。その語を聖所に関するあらゆる事に結び付けるという面倒な問題を、長年にわたって引き起こしたのであった。これは完全な誤りである。その語源「タミード」は、連続体、不定の長さにおける延長、つまり何度も繰り返し起こっている何かというよりも、永遠から永遠のものに関係がある。

「常供」を何度も繰り返す何かから、どちらの端にも際限のない境界に伸びる連続体として理解するならば、ダニエル12章で用いられている終末概念に関する真実の発見に向けて歩み出すことだろう。

* 付録Bの「ダニエル書の『常供』でなく、キリストの広義の奉仕」を参照。

第3章



「常供」の前後関係は？

名詞がなく、「不定の延長へと伸びる」何かを意味する形容詞だけの場合、前後関係と主題（テーマ）を調べるために、言語学的研究以上のものが必要となる。預言の解説者は、次の事柄を調べなければならない：

1. ダニエル書**全体**の性質と目的
2. ダニエル**12章**の主題（テーマ）
3. ダニエル**12章11節**中に提示されている概念
4. **聖書全体**の主題（主要テーマ）

まず、ダニエル書全体の主題を調べるべきである。1章から12章まで、国々の興亡に焦点を当てている。権力の笏(主権)がバビロンからメド・ペルシア、それからギリシア、ローマ、ヨーロッパの国々、また異教ローマから法王教ローマ、そして最後に巨大な石の王国へと移り変わっていく様子をたどっている。ある預言の解説者は、その事を的確に述べている：

「ダニエルは、国々の見地から世界の歴史を著した。…彼は主に、国々の事柄を取り上げている」S. N. ハスケル著、パトモスの先見者 289 ページ。

ダニエル書に関して、現代の解説者は、カイアズマ(交差対句法)として次のように述べている：

「…この文学的構造は、神学的主旨を伝えている。その神学的主旨は、『誰が支配権を持つのか?』という質問をめぐってのものである。その事は、7章で頻繁に出てくる言葉に集約されており、幻を理解するうえで、鍵となる神学用語となっている。7章において、地上の各国が興っては亡びていく。しばらくの間支配権を受け継ぎ、それから後任の国に主権を渡している。これらの移り変わっていく主権は、交差対句 [chiasm] の前半に描かれている。交差対句の先端（頂点、極み）に、天の法廷における裁きの場面が出てくる。この天の法廷での判決の結果、交差対句の後半で描かれているように、すべての地上権力が終焉を迎える。その時の型は、主権の一つがづいに取り去られる。それから、最終的、永遠の、そしてすべてを網羅する主権を人の子に与えて幻を閉じている」ウィリアム・シ

エー著、ダニエル書討論2巻、176,177 ページ。

ダニエル書において、権力の笏(主権)が国から国へと移り変わり、最後の章で「荒らす憎むべきもの」がそれを手中に収める。これが世界をひとつの体制下に置き、神の声によって最後の救出が行われるまで神の民を迫害する、前例のない勢力である。この概念の故に、ダニエル 12:11 と黙示録 13 章を連結することができる。終末において、「獣」が権力の笏(主権)を手にするのが、次に描かれている：

「…その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、…この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、42ヶ月のあいだ活動する権威 [権力の笏(主権)] が与えられた。…さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威 [権力の笏(主権)] を与えられた」
黙示録 13:3-7。

ダニエル書は、国から国へと移り変わっていった権力の笏(主権)、「力と位と権威」「主権」に焦点を当てている。12章11節も、全く同様である：

「[すべての部族、民族、国語、国民から] 常供 [権力の笏(主権)] が取り除かれ、荒らす憎むべきもの [法王教] が立てられる [確立する] 時から、1290日が定められている」ダニエル 12:11。

第4章



「常供」「タミード」「連続体」とは？

「常供」の語源である「タミード」という語は、「伸ばすこと、不定の延長の」という意味である。

「常供」 — 「タミード」

永遠から永遠に

聖書全体における「常供（タミード）」の前後関係は、どうなっているだろう。もしダニエル書の主題が、永遠の神の国に至るまで、国から国へと受け継がれていく権力の笏(主権)の移行であるならば、それは聖書全体、すなわち救済の計画の主題ともなるのではないか？

権力の笏(主権)は、永遠の神の御座に由来する。この地球が造られたとき、アダムにその主権(権力の笏)が委ねられた。

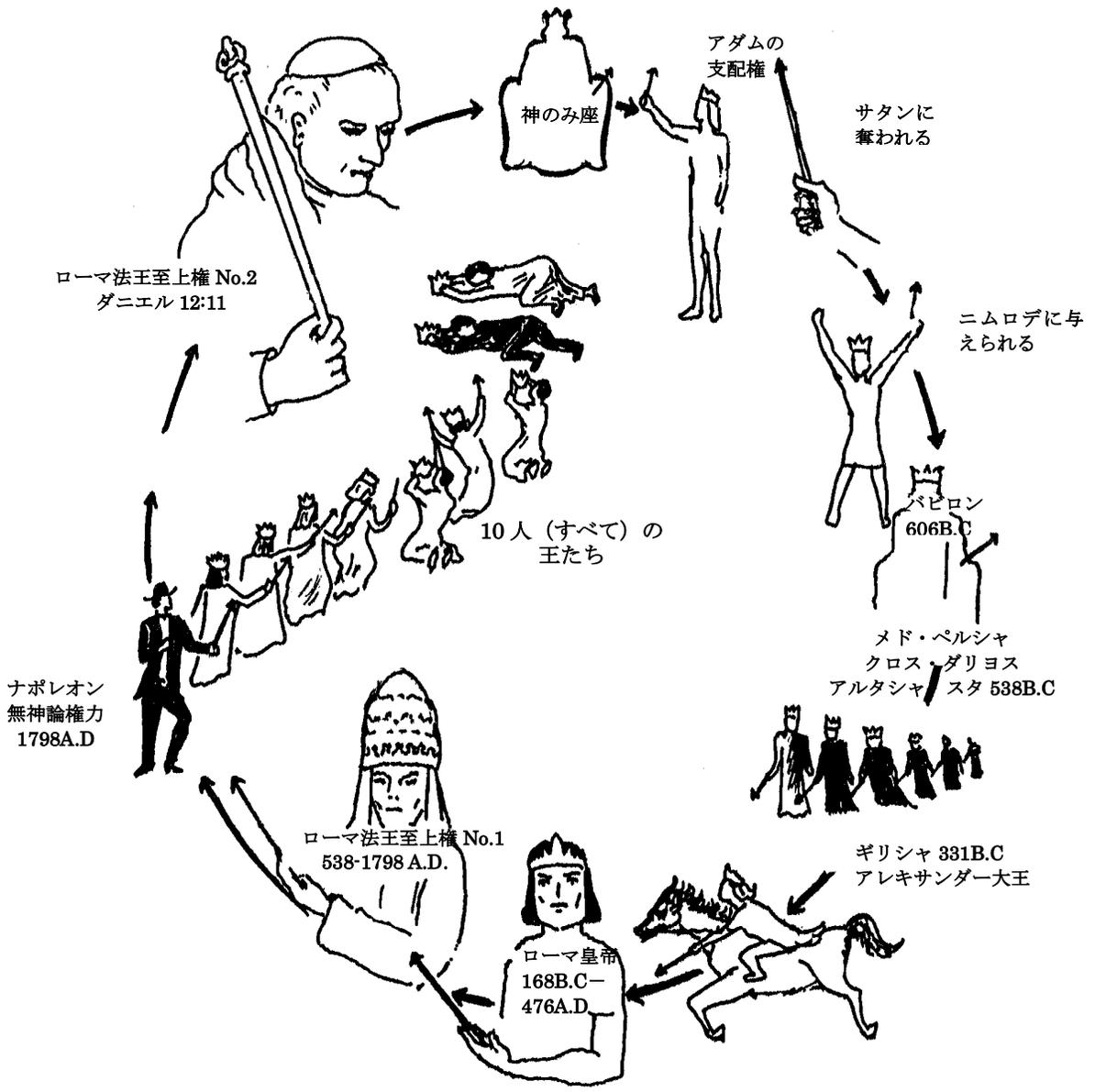
「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに…治めさせよう」
創世記 1:26。

人間の墮落で、悪魔がその主権(権力の笏)を奪い取り、神の許される限りにおいて、彼が地球の代表者となった。悪魔は国々を支配し、それらの国々を用いて神の民を支配、迫害しようと試みる。ノアの洪水直後、ニムロデが権力の笏を握り、バベルという町を建設した。それが太陽崇拜という偽の宗教体制を持つ帝国、バビロンへと発展していった。ダニエルはバビロンの黄金時代に生きていた。従ってダニエルは、このバビロンから始まって、権力の笏がキリストの王国に戻されるまでの国々の興亡をたどっている。

大きな円のように、この権力の笏は永遠から永遠に至るものである。権力の笏こそが、大いなる「タミード」つまり、永遠から永遠に伸びる「常供(日毎)の」連続体である。ひとつの手から次に手渡される場合にのみ、それが取り除かれるのである。この意味においてダニエルは、詳細に説明する必要がないほど、明らかだったので名づけ損なったと言える。これはダニエル書のみならず、聖書全体の主題である。

次ページのイラストは聖書、特にダニエル書の中に見られる「権力のサイクル」を明らかにしている。このサイクルはダニエル 12:11 においてクライマックスとなる。

「常供」 (Continuum)
 すなわち、力と位と権威 (み座、冠、王笏)
 は
 永遠から永遠に、限りなく続く



第5章



「タミード」すなわち 「常供」で表されている「王の笏」とは？

「神から賜わったあなたの位は永遠にかぎりなく続き、あなたの王のつえは公平のつえである」詩篇 45:6。

「王の笏(主権) (scepter)」とは、権威の象徴として王様が手に持っている笏[束帯のとき右手に持つもの]のことであるが、その語だけでも王位、王権を意味する。モーセが手に持っていた笏にも、同じ語が用いられる。部族長が手に持っている物もそうであり、祭司であることの象徴であり、後に花を咲かせて実をつけたアロンの杖または「枝」もそうであった。

そのような笏(棒)は、しばしば木の「枝」から取られたものであった。古代バビロンのように、いにしえから多くの文化において、支配権の概念は枝に関連していた。王権や支配権は、もともとは神の御座から起こった。御座にいます大祭司、また王としてのキリストは、「枝」あるいは「その名を枝という人」として述べられている。

「…見よ、その名を枝という人がある。彼は自分の場所で成長して、主の宮を建てる。すなわち彼は主の宮を建て、王としての光栄を帯び、その位に座して治める。その位のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間に平和の一致がある」ゼカリヤ 6:12,13。

ダニエル書だけでなく聖書の全書が、何らかの形で、失われた主権(王権、王の笏)とその回復について物語っている。大争闘が終わるのは、キリストがおいでになり、神の聖徒たちが「神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配」してからである(黙示録 20:6)。ダニエル書全体は、国から国への王の笏(主権)の移り変わりを物語っている。*

そしてついには：

* ダニエル 11 章はダニエルの時代から時の終わりまでの王たちの興亡の繰り返しである。王から王へと主権が移行するとき、新しく「起こって」と表現されている。ダニエル 11 章に 12 回もこの言葉が使われている。ストロングのコンコルダンスによると、「起こって」"stand up"という言葉は、ヘブル語の"amad"から来ている。"amad"はヘブル語の語源、"MD"「ミード」から来ている。「タミード」と同じ発音。

ダニエル 12 章の「タミード」「常供」は、11 章の王たちの興亡の繰り返しの続きに過ぎない。11 章の王権が次々に移行され、ついには、12 章で地上の王たちから、「荒らす憎むべきものが打ちたてられる」、法王至上権に譲り渡されるときまで続く。ヘブル語の"MD"は、"amad", "tamyd"の両方の発音を略したものである。

See Wigram's Englishman's Hebrew Chaldee Concordance of the Old Testament Numerically Coded to Strong's Concordance 1843, 5th edition, on "MD."

「... いと高き者の聖徒が国を受け、永遠にその国を保って、世々かぎりなく続く」のである(ダニエル 7:18)。

「見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。彼に主権と光栄と国、[力と位と権威の笏] とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることなく、その国は滅びることがない」ダニエル 7:13,14。

回復はまた、黙示録のテーマでもある (3:21、5:9-14、11:15-17、19:16、20:3-6、21:10-27、22:3)。それが聖書全体の基本概念であり、それがダニエル書における「常供」のなくなっている名詞なのである。この名詞を省くことにより、賢い者だけが悟るように保護された。ところがこの秘密は、最後の世代まで、解かれぬまま残されたのであった。

第 6 章



「常供 (タミード)」は どのようにして「取り除かれる」のか？

定義：

「取り除く、わたされる」(ダニエル 8:11, 12, 13) 「RUWM」ルームと発音——高める、吸収する (ストロング・コンコルダンス、7311 より)

「取り除かれる」(ダニエル 1 1、1 2 章) 「CUWR」スールと発音——そむける、取り除く、未完成のままにしておく、捨てる (ストロング・コンコルダンス 5493 より)

法王教によってローマ帝国から「常供」(権力の笏) が取り除かれたのと、将来法王制によって地上の王たちから「常供」が取り除かれるのには (未来)、その方法に相違がある。ダニエル 8 章で、「取り除く、渡される」として訳されている「ルーム」という語は、高めるとか、吸収するという意味がある。ところが、ダニエル 12:11 の「スール」というヘブル語は、「捨てる」という意味で、つまり地上の王たちが自分たちの王の笏(主権) を「捨て」て、将来それを自ら法王教に与えるのである。

ダニエル 8:11 を見てみよう :

「また [小さい角は] みずから高ぶって、…その常供の [権力の笏] を取り除き [異教ローマから吸収し、高め]、…。」

かつて、異教ローマから法王教ローマへと、連続体としての権力の移行があった :

「ダニエル8章の小さい角は、まさしくローマ帝国とその後継者であるローマ教会でしかあり得ない。…その獣のような側面において、異教そしてキリスト教ローマは、連続体を構成した。ローマの司教が、ローマ皇帝の後継者であった」
Mervyn Maxwell, God Cares Vol.1, p. 154.

無論、異教ローマから法王教ローマへの継承は、連続体の一段階に過ぎない。



ローマ帝国というのは国と教会の結合、すなわち政教一致の勢力であった。その宗教は異教、または太陽崇拝であった。従って、国の権威である王の笏(主権) が移されたとき、その取り引きには異教も関わっていた。異教の礼拝を吸収しそれを高めることによって、法王教はローマ帝国の好意を得、それによって権力の笏を我が物としたのであった。

従って「常供」(権力の笏、王権)「力と位と権威」は、その異教の文化と宗教も共に、法王教ローマによって吸収され高められた。これらはすべて一揃いなのである。ダニエル 8:11 における「ルーム」という語は、「常供」(権力の笏)が異教文化と宗教の吸収と高揚によって、異教ローマから法王教ローマへと移行したことを表すのに用いられている。従って、ローマ・カトリックは「洗礼を受けた異教」と呼ばれている。

ダニエル 1 2 章と黙示録 1 3 章に描かれている、未来の法王至上権に関して言えば、「常供」(権力の笏)「主権」は、異なった過程で取り除かれる。現在多くの王たち(地上の国々)が手に持っている王の笏(主権)が、彼らの意志によって捨てられるであろう。その時彼らは、法王に自らの王座と王の笏(主権)を明け渡すであろう。地上の王たち、政府、民族、国語、国々から王の笏(主権)が「取り除かれ」、「荒らす憎むべきもの」(ダニエル 12:11)に与えられるのである。

アドベンチスト先駆者たちは、この枠組みの中でダニエル 8 章を探り調べた。「常供」とは王の笏(主権)、王権のことで、権威が異教ローマから法王教ローマへと移行したことを、彼らは理解していた。彼らはまた、異教(太陽崇拝)であるローマの国教との組み合わせについても理解していた。法王教が権力の笏を手中に収めたのは、太陽崇拝の吸収と高揚であったことを、彼らは知っていた。彼らはこれらのことを次のような言葉で「省略」したのである :

ユライア・スミス： 「常供」は異教であった。Daniel and Revelation, 176, 177, 282, 285

S. N. ハスケル： 異教—ダニエル 8:12 の「常供」は取り除かれた。Story of Daniel the Prophet, 112.

残念ながら先駆者たちは、これらの概念に関する彼らの知識を、十分書き物に記さなかった。こういった解説の不足が、以来困惑の要因となった。

しかしながら、ダニエル 1 2 章の「常供」が正しく理解され得る前に、8 章でこの見解を得ておくことが必要である。「常供」を真に理解することが、ダニエル 8 章と 1 2 章の関係を明瞭に理解することにつながる。また、終末の諸事件に関する、ダニエル 1 2 章と黙示録 1 3 章の関係を明らかにしてくれる。

ダニエル 12:11 と黙示録 13:2, 3, 7, 10 をわかりやすく言い換えてみよう：

ダニエル 12:11

常供—すなわち、力と位と権威の王の笏(主権)が地の王たちから取り除かれ、あるいは放棄され、荒す憎むべきもの—すなわち、法王至上権 NO. 2 が立てられ、確立される時から 1 2 9 0 日が定められている。その後法王権は滅ぼされるのである。

黙示録 13:2, 3, 7, 10

龍(サタン)は自分の力と位と大いなる権威(力と位と権威の王の笏(主権))とを、この獣(法王権)に与えた。...
そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、...そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威(王の笏)を与えられた。...
つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。

ダニエル 8:9-14

ほとんどの読者にとって、ダニエル 8:9-14 は最も難解な箇所となってきた。「常供」という語が権力の笏、王座、権威を意味することをよく理解するまでは、聖句の意味を理解するのは不可能である。「取り除く」という句の両方の意味を把握するまでは、それを正しく適用することができない。ここでは、ダニエル 8:9-14 を分かりやすい言葉に言い換えて説明してみる。

ダニエル 8:9 それらの角の中から、ひとつの小さい角が出てきた—法王教ローマ。それは非常に大きくなって、自らありとあらゆる方向に伸びていった。

ダニエル 8:10 それ(法王教ローマ)は巨大になって、真の神の民を抑圧し迫害することさえした。それは大勢の者—キリスト教信仰の偉人を含む、何千万もの人々—を死に追いやった。彼らを完全に抹殺するために、彼らを迫害という足で踏みつけた。

ダニエル 8:11 法王を高めることを確立した法王教は、自ら高ぶって、君であられるキリスト御自身の役目、任務さえも奪った(法王は次のような称号で呼ばれている—主なる神、教皇、聖なる父、

平和の君、キリストの代弁者、最高司祭)。法王教によって、「常供」(権力の笏、王座、権威)が、太陽崇拝の吸収と高揚といった方法で、異教ローマから取り除かれた。キリストの聖所である地上の教会は、投げ落とされた。

ダニエル 8:12 何千万という神の民の大群は、法王教の手で迫害に渡された。法王教は罪と不法で満ちていた故に、また法王教が権力の笏(常供)を手中に収めていて、政治権力を十分活用したために、この事は可能であった。法王教は、真理を地に投げ落とした。そして自らの権力を行使して栄え、全世界に及んだ。

ダニエル 8:13 それからわたしは、ひとりの聖者が語るのを聞き、またもうひとりの聖者が、その語っていた聖者にこう言った：『常供』(神の民を荒らし、迫害する法王教の手に収まっている権力の笏)についての幻は、いつまで延びるのですか?と。つまり「神の民の群れは、どれくらいの期間迫害されるのですか?これらの恐ろしい迫害の記録は、いつまで天の書に記録され続けるのですか?天は、このような残虐行為の記録で汚されています。これら悪の記録をことごとく納めている天の聖所は、いつ清められるのですか?」ということである。

ダニエル 8:14 彼はわたしに言った：「聖所が調査審判の過程に入るまで、2300の夕と朝があるであろう。これらすべての残虐行為は、裁きの場で取り上げられる。これらの罪の記録は聖所から除かれ、汚れが清められるであろう」と。

第7章

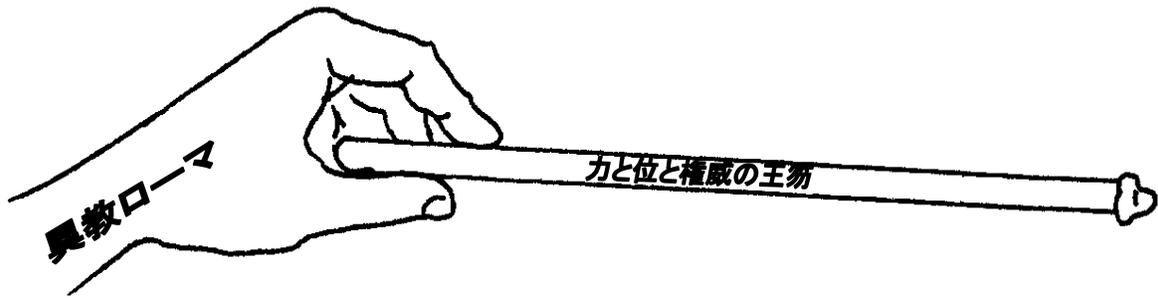


「アドベンチスト先駆者たち」とは?

アドベンチズムの先駆者たちは、誰もが預言解説の達人であった。彼らは帝国の興亡という歴史的背景のもとにダニエル7-9章を理解していた。彼らは「常供」に関する、何世紀も続いた試験的憶測を捨てた。そして「常供」は、権力、王座、権威の移行に関係している、という理解にたどり着いたのであった。このような研究によって、彼らはローマを、第三天使が述べている「獣」と断定し、黙示録14章の警告を発したのであった。

今日我々は、どういうわけか彼らの膨大な研究の記録を持ち合わせていない。神の摂理により、彼らは自分たちの理論的根拠を、本書に成されているような形では解説しなかった。「常供」に関する彼らの結論は、異教ローマから法王教ローマへの権力の移行を含め、その適用においても正しいものであった。

残念ながらユライア・スミスとハスケル、またその他の人たちは、(少なくとも我々には)権力の笏そのものとそれを持っていた手を区別して提示しなかった。



次の言葉などに明瞭さの欠けていることが現れている：

ユライア・スミス： 「常供」は異教であった。
Daniel and Revelation, 176, 177, 282, 285.

S.N.ハスケル： 異教—ダニエル 8:12 の「常供」は取り除かれた。
Story of Daniel the Prophet, 112.

しかしながら、これらの先駆者たちが基本概念を理解していたことは、疑いの余地がない：

「この異教 [ローマ帝国] から法王教への移行は、権力の移行として表されている…」 S. N. ハスケル著、預言者ダニエルの物語 129 ページ。

王の笏(主権) と、それを持っていた異教ローマの解明は、反対者に対する答えである。異教主義は決して取り除かれなかった。もしも「常供」が異教であって、それが取り除かれた(ダニエル 8:11) ののだとしたら、この時点で世界は異教の縄目から解かれるはずであった。しかし今日でも、異教は私たちの周りに蔓延していて、異教から直接取られた偽の安息日である「獣の刻印」をめぐる最後の戦いが、尚も控えているのである。従って、「常供」である王の笏(主権) と、それを持つ異教ローマの区別をはっきりさせることが絶対必要であり、それが誤解の回避につながる。

1 世紀以上も私たちが安全に導いてきた、教理と預言的理解の土台を築いてくれたアドベンチスト先駆者たちを嘲笑するような態度に、気を付けようではないか。このような態度の者たちは、歴史主義者の預言解釈までも放棄する危険がある。

「彼らは勇士のように走り、兵士のように城壁によじ登る。彼らはおのこの自分の道をすすんで行って、その道を踏みはずさない。彼らは互いにおしあわず、おのこのその道をすすみ行く。彼らは武器の中にとびこんでも、身をそこなわない」ヨエル 2:7,8。

「…勇士がそのまわりにいる。イスラエルの勇士で、皆、つるぎ(神の言葉)をとり、戦いをよくし(エキスパート)、おのこの腰に剣を帯びて、夜の危険に備えている」雅歌 3:7,8。

アドベンチストの先駆者たちは、自分たちの時代をよく理解し、ダニエル7、8、9章を解釈する必要を強く感じていた。彼らは偉大な勇士であった。彼らに託されていた事柄を、我々が改善することはない。我々の時代に適用されるべき事柄を、彼らが即座に解明できたはずもなく、従ってダニエル12章の理解は、彼らには期待されていなかった。それは我々の世代に託されているのである。

何世紀も前に存在した多くの預言解説者のように、アドベンチストの先駆者たちは、ダニエル12章を理解しようと試みた。その中のタイムラインを、彼らの時代に起こった諸事件に当てはめようとしたが、うまくいかなかった。従ってダニエル12章は、余計に付け加えられたもののように思われた。ダニエル12章に関する彼らの解釈は的外れで、重要性に欠けていた。彼らの時代には意味があったかもしれないが、あくまで二義的適用にすぎないわけである。今日最後の世代は、終末の主要な適用を追究すべきである。ダニエル12章の最終適用は、「常供」の基礎的解釈における先駆者たちのものと調和し、かつ大いなる危機における最後の諸事件に当てはまるものでなければならない。



第8章

預言者は「常供」について何と言ったか？

実は、ほとんど何も述べていない。エレン・ホワイトは預言者であったが、預言の解説者ではなかった。神の民が光を見出すために自分たちで聖書を調べ、彼らに各時代のための真理を宣べ伝えさせようと神が意図された分野にまで、彼女がでしゃばって足を踏み入れるようなことはなかった。教会を弱めるほどの論争と困難が生じた場合、惨事を防ぐため彼女には最小限の情報が示された。彼女は「常供」に関して、次のようなコメントを残している：

「それから、『常供の燔祭』の『燔祭』という言葉は、人間の知恵によって附加されたもので、本文にはないものであることをわたしは見た。そして、主は、審判の時の叫びをあげた人々に、それについての正しい見解をお与えになった。1844年以前に、人々が一致していたときには、ほとんどすべての者が、『常供』について正しい見解を持っていた。しかし、1844年以後の混乱のなかで、他の意見をもつ者が現われて、暗黒と混乱が起こった。1844年から後において、時は、テストでなくなった。そして、時は、二度とテストとはならないのである」初代文集 155,156 ページ。

フルーム博士の、The Prophetic Faith of Our Fathers 第四巻は、ミラー運動の主だった指導者たちの解釈を挙げている。彼らは、「常供」は異教ローマであることで一致していた。「常供」は異教ローマから、法王教ローマへの権力の移行であると解していた。ホワイト刊行協会からの手紙を参照(付録)。

明らかに1844年以後、「他の見解」が「暗闇と混乱」をもたらしている。そしてそれが今日に至っているのである。しかしまた、「常供」に関する知識が1844年以後取り去られたために、ダニエル12章の解釈が、それが本当に必要な時までとって置かれたとも言える。

「東西南北すべての兄弟方にお話ししたいことがあります。**現在**、盛んに争われている問題を解決するために、私の書いたものがその主な議論として用いられないようにしてください。H・I・J長老、その他の指導の立場にある兄弟方が、『常供のもの』についての自分たちの意見を支持するために私の書いたものに言及するのを、やめていただきたいのです。

…この問題を決着させるために、私の書いたもののどれであろうと用いられることに私は同意できません。…

教役者である兄弟方が、この問題についての議論において、私の書いたものを**今**は利用しないようにお願いします。というのは、私は議論されている点については何も示されてはいませんし、論争の必要を認めてもないからです。**現在の状態**では、この問題については沈黙を守ることが一番いいのです」1 SM164、165 ページ。

再度、「常供」を理解するうえでの正しいタイミングの要素が、次の引用文に強調されている：

「私たちが語ることのできる多くの主題がそこにはあります。単純で美しい、テストとなる聖なる真理です。それを熱心に強く語ることができます。しかし、『常供のもの』や、兄弟方の間に論争を巻き起こすようなことは、**現在のところは**持ち込まないようにしましょう。そうでないと、主が兄弟たちに今心を注いでほしいと思われている働きを遅らせ、妨げることになってしまいます」1 SM167 ページ。

「この問題に関して意見の相違がある**現状**では、それを大きくしないようにしましょう。すべての論争をやめましょう。**このような時**は、沈黙が一番いいのです」1 SM168 ページ。(手紙 62.1910)

上の引用文が書かれた1910年は、「常供」について追究する時ではなかった。しかし今日、この主題は迫り来る危機に関わっている。もし兄弟方が「常供」についての十分な理解を持っていて、それをダニエル12:11に関して用いたならば、80年以上も早くに、興奮が起っていたであろう。「常供」には時限錠(タイムロック)が掛けられていて、ダニエル12章に関してそれが開かれつつあるという事実は、私たちがごく近い将来、終末の最終危機を迎えることを物語っている。「預言者は何と言ったか？」という質問の答えであるが、それは「ほとんど何も」である。「賢い者」だけが悟るであろう。

第9章



「常供」の重要性とは？

「常供」に対する見方が変われば、大きな違いが出てくる。次の事柄を考察してみよう：

1. 「常供」は、今後大いなる叫びのうちに伝えられるべき第三天使の警告における、必要不可欠な礎石である。

ダニエル8章中の「常供」が正しく理解されるとき、法王教である「小さい角」がどのようにして権力の笏、王座と権威を異教ローマから受け継ぎ、1260年間神の民を迫害するに至ったか、説明がつくようになる。異教ローマから取り除かれた「常供」は、紀元538年ユスティニアヌス帝によって発布された勅令文を補強するものである。それが、ダニエル書と黙示録にある1260日（年）の始まりとなった。「常供が権力、王座、権威の移行として理解されるとき、黙示録13章と14章の迫害勢力である「獣」は、法王教ローマであることが判明する。

ダニエル8章の「常供」は、第三天使が述べている「獣」として法王教ローマに注意を向けさせるばかりでなく、最初に言及された解釈の規則を守れば、一貫してダニエル12章でも、近い将来、全世界に法王至上権 No. 2 への権力の移行が行われることが述べられていることになる。この王の笏（主権）の移行によって、法王教は将来、迫害勢力となり得るのである。

従って「常供」の正しい理解は、黙示録14章にある第三天使の大いなる叫びの宣告にとって極めて重大である。ダニエル12章にある三つのタイムラインの理解にとっても、極めて重大である。

2. 「常供」は、正確な解釈と共に、一貫した定義を要求する。「常供（日毎）の」は、キリストの聖所における務めのことであると考えられる人たちがいる。「燔祭」という語は原文になかったと警告する証の書の言葉を彼らは知っているが、キリストの奉仕は燔祭（犠牲）以上のものであると説明するのである。

この立場を保持する人たちは、ダニエル12:11で「常供」が取り除かれるのは、恩恵期と調査審判の終了を意味していると考えられる。この定義は、次のような問題を引き起こしてしまう：

確かに恩恵期の終了は、罪を負われるお方としてのキリストの役割を終わらせ、罪の贖いとして御自身の血の犠牲をもって嘆願なさることはなくなり、彼の民を仲保者なしの状態に置かれながら、（犠牲以上のものである）キリストの奉仕は民のために続けられるのである。イスラエルを荒野へ導かれたように、十四万四千にも水と食物を備えられ、最後の七つの災いと敵の迫害から彼らを守られるであろう。

キリストの犠牲の奉仕と贖罪は、調査審判の終了すなわち恩恵期が閉じる時に終わる。しかし、その犠牲以上の奉仕は、決して止むことがない。従って、「常供」をキリストの奉仕と考える人たち

が、「キリストの奉仕はその犠牲以上のものを含む」と述べている定義そのものによって、それが恩恵期の終了で取り除かれるのではないことが明白となる。

3. 「常供」については聖書解釈学の正確な定義がなされねばならない。

「常供の」“daily”という言葉

「常供の」“daily”という言葉が、キリストの奉仕に関連しているとする立場は、ヘブル語の語源からではなく、形容詞的な使い方から来ている。(ダニエル書に使われている「タミード」は名詞であり、CONTINUUM「連続体」という意味である)。形容詞的な使い方は、日毎の奉仕や儀式といったレビ人の制度へと導く。この的外れな転用は、次の事柄から注意をそらせる：

- a. ダニエル書全体の主題 (テーマ) 一国々の興亡とエデンの回復、キリストの王国と聖徒たちに返される王の笏(主権)
- b. 「法王至上権No.2」の樹立による来たるべき迫害についての「警告」—黙示録 13 章の成就

4. 預言の性質と目的という光に照らして見た「常供」

預言が「前もって書かれた歴史」であるならば、主にこの地上で起こった過去、現在、そして未来の歴史的諸事件を扱っているはずである。預言のタイムラインが神の民にとって意義のあるものならば、神の民の幸福につながる諸事件が、目に付くしるしとなっているはずである。天における調査審判が開始された1844年でさえ、注目に値するしるしを伴った。そして、ここ地上では大失望が起こった。

ダニエル 12:11 のタイムラインにおいて取り除かれた「常供」は、ここ地上で注目に値する事件を伴うはずである。「常供」が地上の王たちから法王教ローマの権力 (主権) への移行を表し、それが法王至上権 No. 2 の樹立であるならば、これはすべての人が見て認知できる歴史的な事件を伴うであろう。それが、容易に目に付く黙示録 13、14 章の成就ともなる。

恩恵期の終了は、それと正反対である。恩恵期がいつ終了するのかは分からないと、預言者は言った。それは天において起こるのであり、地上の人々はそれをダニエル 12 章のタイムラインにおける目印として用いることはできない。

5. 「常供」は論理と順序のうちに保護されている

ダニエル 12:11 のタイムラインはまず、「常供」が取り除かれ、「荒らす憎むべきもの」が確立されることを明言している。それが法王至上権 No. 2 である。ここに、守るべき順序がある。

権力の笏を手中に収めるまで、法王教がその印や数字を強制することはできない。「常供」すなわち王の笏 (主権) は、地上の王たちから取り除かれてローマ法王の手に渡されねばならない。そうして初めて、神の民を荒らし、迫害することができるからである。ここに、守るべき順序がある。

「獣の刻印」をパワー全開にするのは、「荒らす憎むべきもの」すなわちダニエル 12:11 の法王教の確立である。すべての人の永遠の運命を決定する「大いなるテスト」または「最後のテスト」をもたらすのが、この「獣の刻印」をきっかけにかもし出される論点である。これは恩恵期終了前に起こらねばならない。

「荒らす憎むべきもの」が確立される前に、キリストの奉仕「常供」が取り除かれると推測することは、馬の前に馬車を持って来るようなものである。恩恵期の終了時をはっきりと知ることはできない。その事に関する特別な事件がこの地上で起こる訳ではない。だから、いつから始まり、いつ終わるかというはっきりとしたタイムラインはないのである。

結論：「常供」の定義は、聖書のテーマ、ダニエル書のテーマ、大争闘のテーマ、そして最終諸事件における法王教の役割から注意をそらすべきものではない。また終末事件の順序を乱すものであってはならない。



第V部のまとめ



ダニエル 12:11 に登場する 1290 日の「常供」とは？

1. 「常供」という語は、終わりまで秘され、封じられる。
2. 「常供」は解釈上の原則を用いることによって正しく理解され得る。
3. 「燔祭」という語は原文にない。
4. 「燔祭」という概念が、暗闇と混乱へと導く。
5. 「常供」の意味は、ヘブル語の語源「タミード」から得られるべき。
6. 「タミード」のもともとの意味は、「不定の延長へと引き延ばすこと」。
7. 「常供」が取り除かれるのは、国々の継承に関係がある。すなわち権力の笏が別に渡ること。
8. 「常供」とは、権力、王座、権威を表す笏（主権）のこと。
9. もともと神の王座にあった権力の笏は、アダムに手渡され、サタンに奪い取られ、国から国へと受け継がれた。それは神の御座と、キリストの王国を共に治める聖徒たちの手に戻されるまで続く。
10. 「タミード」は不定の延長を含む。それは永遠から永遠にわたる王の笏（主権）だからである。
11. 権力の笏である「タミード」が取り除かれるというのは、それがひとつの国から取り除かれて、別の国に渡されるという意味においてのみである。
12. 「常供」である王の笏（主権）は、ローマ帝国から取り除かれた（ルーム）。異教の吸収と高揚という過程を通して（ダニエル 8:9-11 参照）。
13. 「常供」である王の笏（主権）は、将来地上の王たちから取り除かれ（スール）、法王教ローマの手に渡される。王たちは自ら進んで権力の座を明け渡す。
14. ダニエル 12:11 を分かりやすく言い換えると：権力の座、王の笏（主権）が地上の王たちから取り除かれ、法王教（荒らす憎むべきもの）の手に渡される時からその統治の終わりまで、字義通り 1290 日ある。
15. ダニエル 8:9-13 も分かりやすい言葉で説明される必要がある。
16. アドベンチスト先駆者たちは、「燔祭」に関するあらゆる概念を捨てた。
17. アドベンチスト先駆者たちは、「常供」が異教ローマから法王教ローマに手渡された王の笏（主権）、すなわち権力、王座の移行に関するものであることを理解した。
18. 彼らはその事に関する明確な理論的解説を我々に伝えなかった。
19. アドベンチスト先駆者たちは、王の笏（主権）である「常供」とそれを持つ手の違いをはっきり述べなかった。あるいは理解していなかった。

20. アドベンチスト先駆者たちは、1844年以前は「常供」について一致していた。
21. 預言者は、1798年における法王教ローマの崩壊とダニエル7、8、9章における法王教ローマの正体確認に焦点を当て、「常供」に関する1844年以前の認識を支持した。
22. 100年前、「常供」の主題は論争点となるべきものではなかった。
23. 「常供」とその意味は、ダニエル12章のタイムラインを研究する最s後の世代には必要不可欠である。
24. 「常供」は明確に定義付けられ、一連の終末事件にぴったり当てはまり、かつ解釈上の規則に沿うものでなければならない。
25. 王たちの興亡と権力の笏の移行を反復しているダニエル11章は、ダニエル12:11でその続きが簡単に述べられている。王の笏(主権)が最後に地上の王たちから取り除かれ、法王教ローマに手渡される。
26. 権力の笏である「常供」は、最後に神とキリストそして聖徒たちに戻される。



第Ⅵ部



ダニエル 12:11 の「1290日タイムライン」とは？

「常供…が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、1290日が定められている」ダニエル 12:11。

序論

ダニエル 12:11 の1290日タイムラインが正しく理解されるとき、世界歴史の最終諸事件についてすばらしい洞察を与えてくれる。ダニエル書の三つのタイムラインは、それぞれが一本立ちした独自のものである。一つの単位として見るならば、お互いにうまくかみ合っている、最後の戦い、すなわちこの世の悪からの最終的救出場面の詳細について理解を与えてくれる。

1290日タイムラインは、1260日や1335日タイムラインと全く同じ方法で解釈すべきである。つまり、黙示録にある特定の預言の成就として。1290日タイムラインも、地上や天における立法行為を發布する「声」でもって始まり、「声」でもって終わる。どのタイムラインにも、同じ解釈上の原則と手順が当てはまる訳である。

ダニエル書最後の部分は、黙示録の最終場面と関連して理解すべきである。繰り返し述べるが、三つのタイムラインのうちどれも、イエスの再臨の日時を教えていない。第七の災いの下、神の声がその日時を発表するまで、神の民がこの時を知ることはない。しかし、タイムラインの研究によって、「それが戸口まで近づいている」ことを知ることができるのである。預言のたいまつは、最後の艱難という暗闇にあっても、神の民の通り道をずっと照らしてくれる。歴史上最も過酷な時代にあっても、最後の世代は天の国に至るまでつまずき倒れることがない。かえって花婿が間もなくおいでになることを待望し、夜の闇を楽しく歌いながら進んでいくことだろう（イザヤ 30:29 参照）。



第1章

「常供」の王の笏(主権)は何故取り除かれるのか？

「常供…が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、…」ダニエル 12:11。

SDAバイブル・コメンタリーの注釈が、この聖句の意味を明確に述べている：

「この句は字義通り訳すことができるであろう：『憎むべきものを確立するために、絶え間ないもの〔権力、権威の笏の連続体〕を取り除く時から、…』。これは憎むべきものを打ち立てるという直接の意図をもって、取り除かれることを示しているのであろう」（4BC880）。

政治的見地から、地上の各政府がその王の笏(主権)を放棄し、それを獣の手に渡すまでは、獣である法王教が「すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威」の笏を持つという黙示録13章の預言が成就することはあり得ない。サタンがこの事を成し遂げるのを、主はお許しになる。大争闘において、善と悪との戦いに最後の決着をつけるためである。「地上の神、法王」として君臨するひとり人間を通して、サタンは全世界を自らの支配下に置く。この人間が権力と権威の笏を手中に収めるまでは、彼は「聖徒に戦いをいどんでこれに勝」ち、これを「荒らす」（ダニエル 12:11）ことはできないのである。

霊的観点から考えて、サタンは何故この事を成し遂げようとしているのだろうか？もしサタンが異議を唱える声をすべて抹殺し、一度でも全世界を自らの支配下に置くことができれば、彼は全宇宙の前でこの惑星の法的支配権を主張することができるのである。時の終わりに世界統一政府を打ち立て、一般の同意によって、神の民を抹殺する決定をさせることがサタンの目的である。この危機そのものが、三つのタイムラインの焦点である。

このサタンの終末作戦という概念が、ダニエル 12:11 と黙示録 13—19 章の錠を解く鍵となる。サタンは「荒らす憎むべきもの」の手に権力の笏を持たせて、1260日の迫害を敢行するばかりでなく、最後の死の法令をも考案してしまう。特に第六の災いにおいて、地の王たちが招集される。互いに戦争をするためではなく、最後の死の法令を世界規模で制定するためである。そして第七の災いの下、「神の声」により聖徒たちは死の法令から救出されるのである（黙示録 16:17）。

地の王たちが王の笏(主権)を法王に手渡すきっかけとなる状況を、現時点で正確に示すことは不可能である。が、現在世の流れがその方向に向かっていることは確かであり、間もなく詳細が我々に知らされることだろう。

第2章



1290日の始まりとなる「事件」とは？

ダニエル 12:7 は、散らされて迫害される神の民に焦点を当てている。

ダニエル 12:11 は、迫害を成し遂げる「憎むべきもの」に焦点を当てている。

これら二つの聖句と二つのタイムラインは、単純に「同じ硬貨（コイン）の両面」である。

「荒らす憎むべきもの」に権力の笏を与える出来事が、神の民の迫害を開始するのと全く同じ出来事である。

法王至上権 No. 1 において、法王は紀元 538 年に権力を手中に収めた。それと全く同じ頃から 1260 年間、「女は荒野へ逃げて行った」（黙示録 12:6）。

ダニエル 7:25 において、迫害者である「小さい角」が描かれている一方、黙示録 12:6 において、迫害された「女」が描かれている。それと似たような形で、ダニエル 12:11 は迫害者を描いているが、ダニエル 12:7 は「女」を、迫害される「聖徒」として描いている。

紀元 538 年は、迫害者が権力を握る年であったが、教会が荒野へ逃げる時でもあった。同様に、ダニエル 12:7 と 12:11 のタイムラインは、同じ出来事で始まる。

ダニエル 12:7 の 1260 日タイムラインの開始となるのは、世界規模の日曜休業令である。それと同じ出来事が、1290 日タイムラインの開始となる。記憶を新鮮にするため、次の引用文を再度読みたい：

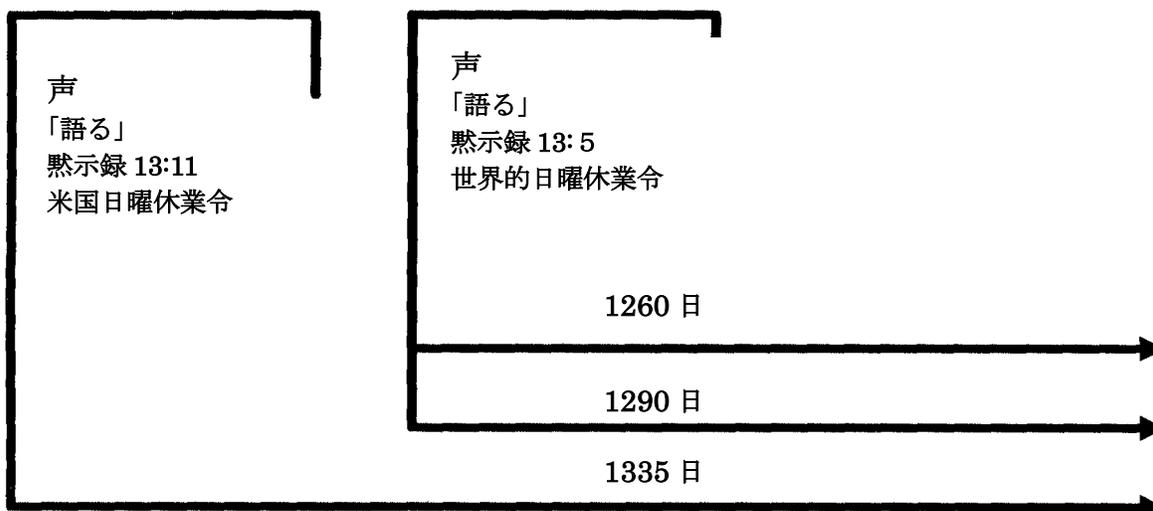
「地の権力者たちは、合同して神の戒めに逆らって戦い、『小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に』、偽りの安息日を守ることによって教会の習慣に従うよう命じるのである」大争闘下 374 ページ。

偽の安息日とは、獣の権威、王座そして権力の「刻印」である。そのような法律が制定される時、それが法王至上権 No. 2 の開始となる。それは「すべての部族、民族、国語、国民を支配する」（黙示録 13:7）に至るであろう。法王を頭とする世界統一政府の支配体制が、ダニエル 12:11 で描かれている「荒らす憎むべきもの」の統治の開始となる。*

* 「物を語る」という表現は、法令化を意味する。それは黙 13:5 にある、法王至上権 No. 2 の開始となる「語る」声である。それはまた、ダニエル 12:11 の「荒らす憎むべきもの」が立つことである。「この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、四十二ヶ月のあいだ活動する権威（王の笏）が与えられた」黙示録 13:5。

次の表は、ダニエル 12:7,11,12 の各タイムラインの始まりを示している。

ダニエル 12 章の三つのタイムラインの始まり



第 3 章



ダニエル 12:11 の 1290日タイムラインを終わらせる「出来事」とは？

「第七の者 [天使] が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声¹が聖所の中から、御座から出て、『事はすでに成った』と言った。すると、いなすまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、…」黙示録 16:17,18。

ダニエル 12:11 の 1290日タイムラインも、他の 12 章中のタイムラインと同様、声でもって始まり、声でもって終わる。これらの声とは、立法、司法行為のことである。神の救出の声に続くこれらの声とは、一体何を語るものなのだろうか？

「神が、ご自分の民を救うためにその力をあらわされるのは、真夜中である。…この怒ったような天の真ん中に、一ヶ所言うに言われぬ栄光に満ちた澄んだ空間があって、そこから

神のみ声が、多くの水の音のように聞こえてきて、『事はすでに成った』と告げるのである。その声が天と地とを震動させる。大地震が起こる。…墓が開かれる。…第三天使の使命を信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現れ、神がご自分の律法を守った者たちと結ばれる平和の契約を聞くのである。…恐ろしいいなずまが天からひらめき、地球を一面の炎で包むように見える。恐ろしい雷鳴を圧して、神秘的なおそるべき**声**が、**悪人たちの運命を宣告する**。この時語られる言葉は、すべての者に理解されるわけではないが、偽教師たちには、それがはっきり理解される。ついさっきまでは、向こう見ずで、高慢で、反抗的で、神の戒めを守る民を残酷にあしらって勝ち誇っていた者たちが、今はもうあわてふためき、恐れおののいている。彼らの泣き叫ぶ声は、自然界の物音を越えて聞こえてくる。悪鬼たちは、キリストの神性を認めて、キリストの力の前に震えあがり、一方人々は、あわれみをこい求めて、目も当てられないような恐怖のうちにはいつくばる」大争闘下 414-416 ページ。

「神秘的なおそるべき声（複数）」は、「悪人たちの運命を宣告する」。これらは天の法廷から下る判決の声である。立法、司法行為の最終決定を宣告している。天の法廷において、これらの証人や判事たちが、バビロンの失墜と刑の執行を宣言する。ダニエル 12:11 の 1 2 9 0 日タイムラインを終わらせるのは、これらの判決を言い渡す声である。

第 4 章



「バビロンは倒れた」とは？

古代バビロンは、メド・ペルシアの前に倒れた。この歴史的ルーツ（源）から、黙示録の預言の象徴は、悪らつなバビロンの最終的失墜と滅亡を描いている。終末におけるこの霊的バビロンの失墜は、黙示録 16:17-21 で描かれている。これは第七の災いとして知られている。それは「神の声」で始まり、大きな雹が降ることで終わる。「神の声」と降雹との間に、数々の事件が起こる：

「第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声〔神の声〕が聖所の御座から出て、『事はすでに成った』と言った」黙示録 16:17。

1. [悪人たちの運命を宣告する] 声（複数）
2. いなずま、雷鳴
3. 地上にかつてなかったような大地震
4. 三つに裂かれた大いなる都 [バビロン]
5. 倒れた諸国の町々
6. 神が大いなるバビロンを思い出す
7. 激しい怒りのぶどう酒の杯を与える

8. 逃げ去った島々
9. 見えなくなった山々
10. 「また1タラントの重さほどの大きな雷が、天から人々の上に降ってきた。人々は、この雷の災害のゆえに神をのろった。その災害が、非常に大きかったからである」黙示録 16:21。

「神の声」による救出とイエスの再臨の間に、一定の空き時間がある。その間に、バビロンの失墜と悪人たちに降りかかる裁きが起こる。「神の声」が「荒らす憎むべきもの」を終わりに至らせるのである。

第七の災害の下で起こるバビロンの失墜を解説するために、「各時代の争闘」では、章全部を費やしている。その章全体を読むことを、読者にお勧めしたい。第七の災いの間に起こる諸事件を理解することは、最も重要である。悪人が完全に滅ぼされる前に、ある期間を要する訳である：

「天から神のみ声が聞こえて、イエスのこられる日と時とが宣言され、永遠の契約が神の民に伝えられる。…まもなく、東のほうに、人の手の半分くらいの大きさの小さい黒雲が現れる。…神の民は、これが人の子のしるしであることを知っている。…イエスは、偉大な勝利者としておいでになる」大争闘下 418,419 ページ。

上で用いられている「まもなく」という言葉により、ある人たちは「速やかに」という意味であると結論づけた。ところが次の章「千年期と地上の荒廃」では、半分以上にわたってバビロンの失墜が描かれている。これらのできごとは「神の声」の後に起きる。章の初めには、バビロンの失墜を描いた黙示録 18章が引用されている。その期間に起こる出来事に着目されたい：

「神のみ声が神の民をとらわれの身からかえされるときに、人生の大きな争闘においてすべてを失った人々に、恐るべき覚醒が起こる。…金持ちは、自分たちの豪壮な邸宅が破壊され、金銀が四散するのを見て悲しむ。…悪人たちは、無念の思いに満たされる。…人々の歓心を得るために真理を犠牲にした牧師は、今、自分の教えがどんな性質のもので、どんな影響を及ぼしたかを見る。…牧師たちと人々は、自分たちが神との正しい関係を持ってこなかったことを悟る。…

人々は、今まで自分たちが欺かれていたことを知る。彼らは、破滅に陥ったことを互いに責め合う。しかし彼らはみな一致して、最も激しい非難を牧師たちに浴びせる。*
…今、これらの教師たちは、絶望して、自分たちの欺瞞行為を世の前に告白する。*
…群集は激しい怒りに燃える。*
…そして彼らは、偽りの教師たちにつめ寄る。*

* ここに描かれていることを実施するまでには時間がかかる。それらは、救出の「神の声」の後に起こる。質問は、どれくらいの時なのかということである。黙示録は、正確な時、答えを与えている！バビロンが倒壊する時は、どれくらいかを3回も正確に告げている。

…神の民を滅ぼすために用いられることになっていた剣が、今、その敵を滅ぼすために用いられる。至るところに、争闘と流血が起こる。
…今や、エゼキエルの幻の中で、その手に滅ぼす武器を持った人々に命令が与えられたように、死の天使が出て行く。『老若男女をことごとく殺せ。…まずわたしの聖所から始めよ。』
…偽りの夜回りがまず第一に倒れる。
…『その日、主に殺される人々は、地のこの果から、かの果に及び…』 エレミヤ 25:33
大争闘下 436—440 ページ。

第5章



黙示録18章の「一瞬（1時間）」とは？

我々が絶対に見逃さないようにと、聖書は三度にわたり、バビロンの失墜が正確にどれくらいの期間で起こるかについて述べている：

1. 「ああ、わざわざだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、わざわざだ。おまえに対するさばきは、一瞬 [1時間 (欽定訳)] にしてきた」黙示録 18:10。
2. 「これほどの富が、一瞬 [1時間] にして無に帰してしまおうとは」黙示録 18:17。
3. 「…この都も一瞬 [1時間] にして無に帰してしまった」黙示録 18:19。

「1時間 (欽定訳)」とは、ある特定の時間の単位である。不特定のある短い時間 (一瞬) のことではない。はっきりした時間測定の単位である。

果たしてこれは字義通りの時間なのか、それとも象徴的な時間なのだろうか？黙示録18章は、その主な登場者である「バビロン」のような、象徴的表現で描かれている。故に、ここの「1時間」は象徴として考察すべきである。「各時代の争闘」で描かれているような、バビロンが倒れるときに起こる数々の諸事件は、明らかに字義通りの1時間以上の時を要する。

では、預言の象徴的1時間を、どのように計算すればよいのだろうか？象徴的時間から字義通りの時間に変換するための道具は、たったひとつ。それが「1日を1年とする計算法」である。黙示録17章の「1時間」も、これによって字義通りの時間に変換される。黙示録17章の「1時間」が字義通りの15日を表しているように、黙示録18章の「1時間」も別の15日を表している。従って、「神の声」による神の民の救出からバビロンが倒れるまで、「1時間」あるいは15日を要する。1290日タイムラインは、バビロンの失墜すなわち「荒らす憎むべきもの」の滅亡へと至る。

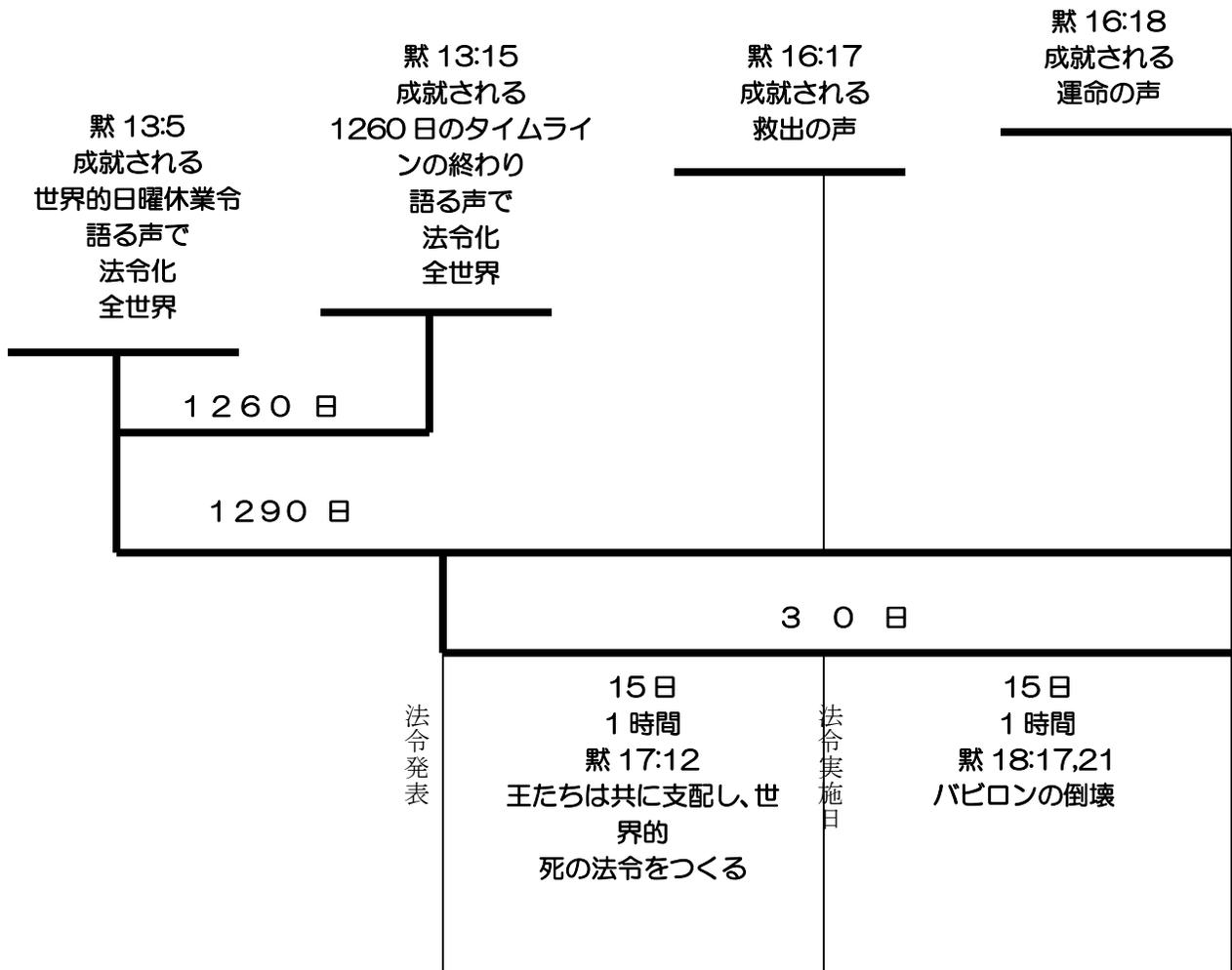
「常供…が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、[憎むべきものが終局を迎えるまで] 1290日が定められている」ダニエル 12:11。



第6章

「30日の差」とは？

ダニエル 12:7 の 1260 日タイムラインと、ダニエル 12:11 の 1290 日タイムラインの間には、30 日の差がある。その 30 日の差が、下のタイムライン（複数）に表されている：



1260 日タイムラインと 1290 日タイムラインの間の 30 日という差は、黙示録 17、18 章においては、二つの 15 日という期間から成っている。最初の 15 日は、勝ち誇って全世界規模の死の法令を制定する、獣と地上の王たちの統治期間である。次の 15 日は、バビロンが倒れる期間である。

第7章



黙示録 8:1 の「半時間ばかりの静けさ」とは？

「小羊が第七の封印を解いた時、半時間ばかり天に静けさがあった」黙示録 8:1。

約「半時間」という静けさは、第七の封印という背景において起こる。第七の封印が解かれて後に初めて、「半時間ばかり天に静けさ」が起こるのである。

黙示録 8:1 だけでは、「半時間ばかり」に関係する時、または事件を確認するための十分な情報を得られない。従って、この「半時間ばかり」の時間的位置づけを得るには、第六の封印に戻る必要がある。第六の封印の下で、一体何が起こるのか？

「小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が起って、太陽は毛織りの荒布のように黒くなり、月は前面、血のようになり、天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落とされるように、地に落ちた。天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と鳥とはその場所から移されてしまった。地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩陰に、身を隠した。そして、山と岩とにむかって言った、『さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか』」黙示録 6:12-17。

天はまだ「巻物が巻かれるように消えて」おらず、その他の諸事件もまだ起こっていないという事実から、これらの場面はまだ未来のことであると結論づけることができる。

「天体〔日、月、星〕は神の声によって揺り動かされる。そのときに、日、月、星は、それぞれの場所から動かされる。それらはなくなってしまふのではなくて、神の声によって揺り動かされるのである。．．．それから神のみ声が、日、月、星、を揺り動かして、この地球をも揺り動かす」初代文集 104 ページ。

黙示録 6:14-17 は、神の声が聞かれてからイエスの再臨までの間に起こる諸事件を要約している。第六の封印の下に起こる諸事件とは、次のようなものである：大地震、日、月、星のしるし、押し戻される天〔大気圏〕、イエスを乗せた雲を見て恐れおののく悪人たち。第七の封印は、「半時間ばかり」という時間的要素を加えている。

エレン・G・ホワイトは、ある特定の光景と事件を描写している中で、第六の封印と第七の封印とを結び付けた。彼女は、第六の封印の最後の質問の部分引用して、それから第七の封印、すなわち約半時間ばかりの天の静けさを描写している。この静けさの期間の意味を次のように描写している：

「まもなく、東のほうに、人の手の半分くらいの大きさの小さい黒い雲が現れる。．．．これが人の子のしるしである。．．．ついには大きな白い雲となって．．．イエスを前にして．．．義人たちは、震えながら、『だれが立つことができようか』と叫ぶ(黙 16:17 の第六の封印)．．．恐ろしい沈黙のひとつときがくる。すると、『わたしの恵みはあなたに対して十分である』というイエスのみ声が聞こえる。．．．王の王は、燃える炎に包まれて、雲に乗ってこられる。天は巻き物が巻かれるように消えていき、．．．すべての山と島とは、その場所から移されてしまう」大争闘下 419—420。

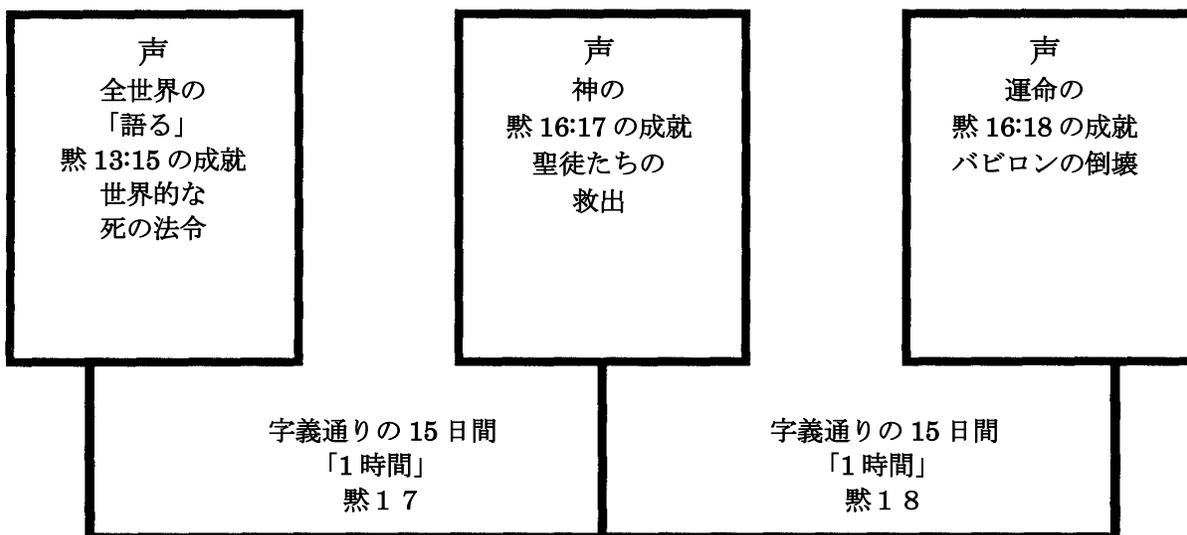


第 8 章

第六、第七の災いの「ドラマ」とは？

第六、第七の災いの「ドラマ」は、ダニエル 12:7—11 の 1 2 6 0 日と 1 2 9 0 日タイムラインの差となっている 3 0 日の間に、クライマックスを迎える。その 3 0 日という期間に、歴史上最大の事件が起こる。世界規模の死の法令から始まり、「神の声」による民の救出で頂点に達し、バビロンの完全な失墜でもって終わる。

3 0 日



第六と第七の災いは、文学的な形態で書かれている。第六の災いは、世界規模の死の法令でクライマックスに達する。第七の災いは、死の法令からの「神の声」による救出で始まる。最終回において、ヒーローとヒロインの勝利を描いているだけでなく、悪玉が最後に裁かれる様子も描いている。

「我々は、第七の鉢が注がれる場面を研究する必要がある。悪の勢力は、ただでは降参しない。が、ハルマゲドンの戦い [第六の災い] において、神の摂理が介入する。黙示録18章の天使の光で地が明るくされるとき、善と悪の宗教的要素が眠りから覚め、生ける神の軍隊が戦闘を開始するであろう」7BC983。



第9章

「いなずまと雷鳴」とは？

「すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった…」黙示録 16:18。

いなずまと雷鳴が「運命の声」に伴う。いなずまと雷鳴は、何を意味するのだろうか？聖書の相互参照研究は、神の律法を宣言する声に、いなずまと雷鳴が伴うことを明らかにしている。例を挙げてみる：

「神はこのすべての言葉 [十戒] を語って言われた。…民は皆、かみなりと、いなずま…とを見た」出エジプト 20:1-18。

更に研究してみると、声やいなずま、雷は神の御座からくることがはっきりしてくる。その根拠は、神の律法である。

「御座からは、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが、発していた…」黙示録 4:5。

「そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱 [律法が入れている] が見えた。また、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴と、地震とが起り、大粒の雹が降った」黙示録 11:19。

第七の災いの下、バビロンの失墜においてダニエル 12:11 の 1290 日タイムラインを終わらせる「運命の声」には、神の御座から発せられるいなずまと雷鳴とが伴う。神の御座から出るこれらの声は、神とその律法を擁護している。その天の法廷から語り、神の律法を踏みにしてきた悪人たちに判決を言い渡すのである：

「神が、ご自分の民を救うためにその力をあらわされるのは、真夜中である。…この怒ったような天の真ん中に、一ヶ所言うに言われぬ栄光に満ちた澄んだ空間があって、そこから神のみ声が、多くの水の音のように聞こえてきて、『事はすでに成った』と告げるのである。

その声が天と地とを震動させる。大地震が起こる。…神は大いなるバビロンを思い起こし、『これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられ』る。…雲は退き、両側の暗い怒ったような大空とは対照的に、言うに言われぬ栄光に輝く星空が見えてくる。天の都の栄光が、開かれた門から流れ出る。そのとき、折りたたんだ**二枚の石の板**を持った手が、空中に現れる。…シナイ山から雷鳴と炎のなかで、人生の指針として宣言された神の義であるあの**聖なる律法**が、今やさばきの規準として人々に示される。その手が石の板を開くと、火のペンで書かれたかと思われる**十戒**の言葉が見える。その言葉は、はっきり書かれていて、だれでも読むことができる。記憶が呼び覚まされ、すべての人の心から迷信と異端の暗黒が払いのけられて、簡単に理解しやすく、権威に満ちた**神の十の言葉**が、地上の全住民の前に示される。

神の聖なる要求をふみにじてきた者たちの恐怖と失望とは、描写することができない。主は彼らに**神の律法**をお与えになった。彼らは、自分たちの品性をそれと比較して、まだ悔い改めて改革する機会のあるうちに、自分たちの欠点を知ることができたはずであった。しかし、世の支持を受けたいために、彼らは律法の教えを捨て去り、またほかの者にも、それを犯すように教えたのである。彼らは、神の民が安息日を汚すように強制してきた。今となつては、彼らは自ら軽蔑した**律法によって罪に定められる**のである。…悪いしもべよ、わたしから離れ去れと神から言われる者の運命は、実に恐ろしいものである」大争闘下 414-418 ページ。

神の御座から発せられるいなずまと雷鳴は、地上ではっきりと認識される。それらは、神の律法を犯してきた悪人たちに宣告される運命の声に伴う。

「恐ろしいいなずまが天からひらめき、地球を一面の炎で包むように見える。恐ろしい雷鳴を圧して、神秘的なおそるべき声が、悪人たちの運命を宣告する。この時語られる言葉は、すべての者に理解されるわけではないが、偽教師たちには、それがはっきり理解される。ついさっきまでは、向こう見ずで、高慢で、反抗的で、神の戒めを守る民を残酷にあしらって勝ち誇っていた者たちが、今はもうあわてふためき、恐れおののいている」大争闘下 415 ページ。

神の御座から語られるこれら「運命の声」は、神の律法に基づいている神の統治を代表している。国家や政府の「物を言う」声は、その立法、司法行為である。これらの声が、悪人たちに裁きを宣告して物を言い、倒れたバビロンについて司法行為を開始する。その期間は、預言の「1時間」で、字義通りには15日間である。声が語られるのは「1時間」の初めだけなのか、それともその期間中ずっとなのかは定かでない。声による判決という司法行為は、15日間という裁きの終了によって、バビロンを終わりに至らしめる。

そこまで分かって、まだ再臨の日時は分からないことに注意されたい。人々はまだ生きていて、霧の故に神をのろう（黙示録 16:21）が、悪人たちは主の来臨の輝きによって滅ぼされる。

「その時になると、不法の者が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう」テサロニケ第二 2:8。

ダニエル 12:11 の 1 2 9 0 日タイムラインの研究は、バビロンの失墜を強調し、神とその律法を擁護しつつ、キリストとサタンの大争闘の核心にまで触れている。

「ルシファーは、神の御座のすぐ近くにある自分の座を離れて、天使たちの間に不満の精神をひろめるために出て行った。彼は…天の住民を支配している律法によって不必要な束縛が加えられているとほのめかしながら、律法に対する不満の念を引き起こそうと努力した。
…

…神の統治には天の住民だけでなく、神がお造りになったすべての世界が含まれていたの
で、サタンは、天使たちを反逆に加わらせることができるならば、他世界もまきこむことが
できると考えた。…

…そこで、すべての世界の住民はもちろん、天の住民の前に、神の統治が正しく、神の律
法が完全であることが実証されねばならなかった。…

サタンは、彼自身が天に引き起こした不和を、神の律法と統治のせいにした。…

…彼は、神の律法は彼らの自由を束縛するものであると言って攻撃し、このような律法を
廃止することが自分の目的である、…と断言した。…

…サタンが束縛のくびきであると非難してきた神の律法は、自由の律法として尊ばれる」
大争闘下 231-242 ページ。

ダニエル 12:11 の 1 2 9 0 日タイムラインは、最後の危機にスポットライトを当てている。そ
の頃、天において十戒が見られ、罪人を断罪する律法のメッセージが理解されるであろう。それがバ
ビロンの失墜の焦点、天の御座からの声が語る立法、司法行為である。全宇宙がそれを目の当たりに
する。それが神の律法と、その統治を擁護する。ダニエル 12 章に出てくる三つのタイムラインは、
どうでもよい事柄に取り組んでいるものではない。これらのタイムラインは、サタンの反逆と罪の力
から全宇宙を救うことをテーマとした、永遠の真理にまで心を引き上げてくれる。



第Ⅵ部のまとめ

ダニエル 12:11 の 1290 日タイムラインとは？

1. イエスの再臨の日時を与えてくれるものではない。
2. 終末事件を理解する鍵である。
3. 黙示録 16：17 から 18 章までを理解する鍵である。
4. 黙示録との相互参照がなければ理解することはできない。
5. 各時代の争闘を参照しなければ理解することはできない。
6. それ自体独立したものではあるが、1290 日タイムラインは、1260、1335 日タイムラインと組み合わせられる。
7. 神の律法をめぐるキリストとサタンの争闘の大きなテーマに焦点を当てている。
8. 1290 日タイムラインは、黙示録 18 章の預言の成就である。
9. 立法、司法行為というすべての国々の物を言う声で始まり、天の声で終わる。
10. 世界規模の日曜休業令という、すべての国々の物を言う声で始まる。
11. 「運命の声」すなわち裁きという司法行為で終わる。
12. 裁きという司法行為におけるバビロンの失墜で終わる。
13. バビロンは第七の災いの下で倒れる。
14. バビロンは「神の声」の後に倒れる。ある期間を占める。
15. バビロンは象徴的「1 時間」で倒れる。
16. 象徴的「1 時間」は、字義通りの 15 日を表す。
17. 黙示録 17 章の「1 時間」と黙示録 18 章の「1 時間」をたすと、 $(15 + 15 =)$ 30 日になる。
18. ダニエル 12 章の 1260、1290 日タイムラインの差は 30 日である。
19. 30 日の差は、締めくくりとなる終末のクライマックスを包含する：世界規模の死の法令、「神の声」、そして「運命の声」。これらはバビロンを完全に失墜させる。
20. 「運命の声」はバビロンに裁きを宣告し、いなすまと雷鳴を伴って全宇宙の前で神の律法を擁護する。
21. 30 日の差が、第六と第七の災いの働きを説明する。

ダニエル 12 章の 1290 日タイムラインは、黙示録 13-18 章で描かれている法王至上権 N0.2 の興亡を説明する。それはバビロンの最期に至るものであるが、イエスの再臨の日時については光を与えない。あくまで道中を照らしたいまっなののである。

結論

ダニエル 12:5-13 にある三つのタイムラインは、巻物を解く最終段階である。それぞれの解釈が、この預言を過去の歴史的諸事件と、ごく近い将来の諸事件を結び付ける試みにおける最後の部分、あるいは適用となる。それはドラマの最終回につけられるアクセント（強調）である。

ダニエル 1 2 章の三つのタイムラインを理解することが、最終世代のための「現代の真理」である。終末の「現代の真理」を見出そうと研究する者は、神の恵み深いご配慮に沿った、最後の危機への備えができることだろう。「真理には、どの時代にも新しい発展があった」（実物教訓 105 ページ）。そしてどの時代においても、人の心は、その真理によって試されるのである。心の深い動機を探るために。

三つのタイムラインは、未来の主な諸事件のアウトライン（概要）を供給するだけに過ぎない。それらは、祭についての予型論に関係がある。これらのあるものがこの骨組み（構造）につながっている、あるいは挿入されていることはあり得るが、それがこの研究の目的ではない。聖書研究生は、このアウトラインとその特定の情報が多くの主観的憶測で飾り付けられるなら、危うくされ得ることを知っているべきである。

確かに抜け目のない聖書研究生なら、これらのタイムラインにそって、多くの興味深い点を発見することだろう：後の雨の注ぎ、第三天使の大いなる叫び、「花婿だ、迎えに出なさい」という夜中の叫びのメッセージ、また調査審判の終了、バビロンの失墜、七つの災いに対する警告に関する三天使の使命の全面的拡大、等々。神の民、すなわち十四万四千の封印、獣の刻印、またバビロンの最終的失墜につながるあらゆる出来事が起こるのであろう。教会と世に対する恩恵期間が終了する時がやってくる。ところがこれらの出来事は、三つのタイムラインの文脈において何も示されていない。これらのタイムラインは、基本的枠組みを提供しているに過ぎない。それによって最終世代は、目の前に迫っている戦いに関する、一連の広い概要と順序を見ることができるのである。一人の解説者が、真理をすべて持っていることはない。各々が、巻物を解くための様々な面を加えてくれる。あなたが行う本書の批評は、著者が高く評価するであろう。もし米国における日曜休業令と、世界規模の日曜休業令との間に、60日の開きがあれば、神の民は信仰と確信をもって、本書のタイムラインの研究を指示することができる。もしそうでなければ、より妥当に思われる他の見解や解説を考慮すればよい。

これら三つのタイムラインをひとつの絵のようにまとめた図表が、読者には必要であろう。

ダニエル 12 章のタイムライン

(1260. 1290. 1335 日)

黙 13:11
「語る」声
米国日休

黙 16:17
神の「声」

字義どおり 1335 日 「待つ」 ダニエル 12:12	
黙 13:5 声 世界日休令	黙 13:15 声 世界的死の法令
字義どおり 1260 日 ダニエル 12:7 「彼は…聖なる民を打ち砕く」 声 世界日休令	+15 日 「一定期間」 大下 388 黙 16:18 破滅の声
字義どおり 1290 日 「荒らすことをなす憎むべき者」 ダニエル 12:11	
王たちの支配 黙 17:12 「1 時間」 あるいは 15 日間	バビロンの没落 黙 18:10 「1 時間」 あるいは 15 日間

ダニエル1 2章の三つのタイムラインを組み合わせる

厳密な解釈の原則を用いて、三つのタイムラインを未来に当てはめると、終末の危機に光を投げかけてくれる連動単位となる。物を言う声、または立法、司法行為がタイムラインの開始、終了となることは、過去の前例から単純に分かる。これらの声は、聖書の明確な言葉に基づいており、証の書によって説明されている。こうして時の各単位は、全世界が見ることのできるように、その両端が公式の法律制定によって区切られている。

三つのタイムラインを組み合わせると、各タイムラインを不動の確実な立場の中で全体にしっかり固定する、結合単位となる。複雑に組み合わせるといふ仕掛けは、それが神からのものであるという証拠である。開始と終了の各声は、各タイムラインの意味を明らかにするだけでなく、各事件を正しい順序に並べてくれる「鍵」である。それぞれの鍵は、全体の構図に必要である。これらの鍵は、ダニエル書と黙示録において最も頻繁に見られる。理解の扉を開くこれらの鍵を書き連ねてみる：

鍵1. 1日を1年とする計算法

鍵は終末に関する二つの象徴的「1時間」を解いてくれる——黙示録17、18章の「1時間」は、字義通りの15日を表し、二つの15日はダニエル1 2章の三つのタイムラインに組み込まれる。

鍵2. 「物を言う」声

これは各タイムラインが、政府の立法、司法行為でもって始まり、終わるといふ解釈に至らせるマスターキー（親鍵）である。

鍵3. 「神の声」

この鍵は：(a) 黙示録17、18章の二つの「1時間」という期間と、(b) 神の声によってクライマックスを迎える第六の災い、バビロンが倒れる第七の災いの間を結びつけてくれる。

鍵4. 「1時間」——字義通りの15日間

この鍵は、二つの時の隔たりを解く、あるいは説明してくれる：

- (a) 世界的死の法令の制定とその施行日
- (b) 神の声による救出と、第七の災いの下、完了するバビロンの失墜

鍵5. 30日

1260日と1290日タイムラインの差が、この30日である。これは黙示録17章と18章に出てくる二つの15日に、しっかりと組み合わせられる。

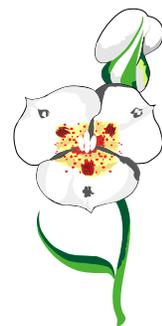
鍵6. 歴史主義者の原則

これらの原則による数々の鍵は、ダニエル12章における預言用語と、黙示録12-19章における象徴的表現を解いてくれる。それにより、1290日間統治する「荒らす憎むべきもの」の正体を暴き、それが頭の傷が癒された黙示録の獣、すなわち法王教と同一の者であることを突き止める。近い将来、その獣は、全世界に及ぶ法王至上権 No.2 を確立するのである。これらの原則は、ダニエル7、8章において敷かれた基盤に基づいており、ダニエル12章においてその活動を締めくくる。

鍵7. 正確さを試すテスト

アメリカ合衆国における日曜休業令と、世界規模の日曜休業令の合間となる60日が、最後の危機に突入する者にとって、正確さを試すテストとなる。もし60日という合間がなければ、比較的早い段階で、この適用に誤りがあることを知ることができる。しかし、もし60日という合間が存在すれば、信頼のおけるタイムライン単位として確信を抱くことができる。このテストが、信頼性の鍵となる。

結論： 未来を扱うすべての預言の注釈は、それが成就するまでは、あくまで試験的なものとすべきである。但し、預言は未来の諸事件に至る道中を照らす光として、聖書で明確に定義されている。未来の諸事件に関して神が示そうとしておられる事柄を知ろうという願望と、注意深い慎重な態度との間の緊張が、天国に至る信仰と行いの絶妙なバランスである。この緊張こそが、クリスチャンを謙遜に保ち、途上において日々イエスを見上げ、一步一步天の御国を目指す原動力となるのである。



付録A

黙示録 14章と 18章の七天使の使命とは？

序論

黙示録 14 : 6-12 には三天使の使命が描写されている。しかし、黙示録 14 : 15-20 にはさらに三人の天使が現れる！聖書の解釈においては、一貫していることが重要である。6-12 に現れる「大声で言う」最初の三天使が、人間によって与えられる使命を表しているなら、15-20 に出てくる最後の「大いなる声で叫ぶ」三天使も人間によって与えられる使命を表している。

黙示録 14 章には使命を持つ六天使が現れる。しかし、黙示録では 7 という数字が完全数である。七つの教会、七つの手紙、七つの星、七つの封印、七つのラッパ、七つの雷、七つの頭、七つの災害など。故に天使の使命も七つあるべきだと考えるのが妥当である。もう一人の天使の使命は黙示録 18 章にある。

ここでは、これらの七天使の使命の一つ一つの宣伝のタイミングを検証してみたい。それは、過去、現在、未来の預言の成就に関係しているのでその大要を見てみよう。第四と第五天使の使命は、ダニエル 12 章のタイムライン宣言の時の枠組みを提供していることを発見するであろう。

1. 第一、第二、第三天使の使命の時期

A. 第一天使の使命の時期

1831年、ウイリアム・ミラーは初めて公に自分の信仰を説明した。大争闘下 19。

1833年、ミラーはバプテスト教会から説教をする許可を得る。大争闘下 21。

ミラーとその同僚は、ダニエル 8 : 14 の 2300 日の終結を発表した。大争闘下 45。

再臨直前のさばきの働き、すなわち黙示録 14 : 7 の第一天使の使命を述べ伝えたのだった：

「『神を恐れ、神に栄光を帰せよ、神のさばきの時が来たからである』と。この警告の使命を述べ伝えた者たちは、正しい時に、正しい使命を伝えたのであった」大争闘下 46。

B. 第二天使の使命の時期

「黙示録 14 章の第二天使の使命は、最初、1844年の夏に述べ伝えられた。そして、それは当時の米国の諸教会に直接当てはまるものであった。米国においては、審判の警告が最も広く宣言されたにもかかわらず、大部分の教会はそれを拒否して、急速に墮落してしまった」大争闘下 92。

「バビロンは倒れた」と初めて 1844年の夏に宣言された第二天使の使命は、第一天使の使命、すなわちさばきの宣布を拒んでしまっていたキリスト教界に当てられた。1844年の失望の後、神の民は、1844年に始まるのは執行審判ではなく、調査審判であることを悟った。この第一天使の使命は 1844年以來現代にいたるまで述べ伝えられてきた。「バビロン」の背教した状態は今日にいたるまで続いている。

C. 第三天使の使命の時期

「1844年の時(大失望)が過ぎて、その次に、まだ再臨の信仰を持っている人々には、大きな試練の時期が来た。彼らの真の立場を確かめることについて唯一のたのみは、天の聖所に彼らの心を向けた光であった。...彼らは、彼らの大祭司が、奉仕のもう一つの業を始められたのを知った。そして彼らは、信仰によって彼に従っていき、教会の最後の働きをも知るに至った。彼らは、第一と第二天使の使命を、いっそう明瞭に理解した。そして、黙示録14章の第三天使の厳粛な警告を受けて、それを世に伝えるよう準備させられた」大争闘下 149、150。

第三天使の使命は、法王教制度（過去、現在、未来にわたる）によって、この地上に偽りの祭司制度が設立されたこととは対照的に、天における大祭司キリストを提示している。

「これまで人類に与えられたことのない恐ろしい威嚇の言葉が、第三天使の使命の中に含まれている。...この罪に対する警告は、神の罰が下る前に世界に伝えられなければならない(未来)」大争闘下 171。

結論として、第一天使、第二天使の使命は、1844年のすぐ前から始まり、第三天使の使命は、その後すぐ始まった。三つのすべての使命がそれ以来世界に宣べ伝えられてきた。第一天使の使命が拒まれたので第二天使がそれに続いた。第一天使の使命である創造主を礼拝せよとの安息日の使命は、第三天使の使命の偽りの安息日に対する警告使命の積極的な面にすぎない。

第一、第二、第三の全ての使命は、真理の大体系と一緒に織り込まれているのである。時の枠は1844年ごろから始まり、今日まで続いてきており、未来にわたって続き、繰り返されるのである。

2. 第四天使とは誰か？

黙示録14章では、第一天使と第二天使のことをただ単に「もうひとりの御使」と言っている。* 「第一」「第二」と言わずに、第三天使だけ「第三の御使」と数字がついている。第三天使から後に戻って「第一」「第二」天使だと判断するのである。同じように、「第四」天使も「もうひとりの御使」としか表されていないが、我々はそれが第四であることがわかる。なぜなら、それは「第三天使」に合流し、力を添えるからである。

「そこで、この天使一天から下って来、栄光をもって地を照らし、力強い声でバビロンの罪を知らせる天使一によって象徴されているところの運動が起こる。この天使のメッセージと関連して、『わたしの民よ。彼女から離れ去れ』という呼びかけが聞かれる。これらの布告は、第三天使の使命とともに、地上の住民に与えられる最後の警告なのである」大争闘下 372。

3. 第四天使の使命の時期

「これらの布告は、第三天使の使命とともに、地上の住民に与えられる〔未来〕最後の警告なのである」大争闘下 372。

* 欽定訳の場合、第二天使も「もうひとりのみ使い」となっている。

「(黙示録18:1, 2, 4) この聖句は、黙示録14章(8節)の第二天使によってなされたバビロンは倒れたという宣言が、くり返して行われる〔将来〕時を指し示すものであり…」大争闘下 371。

上の引用文から、第四天使の使命は、未来の時を指していることが分かる。それは「最後の警告」、恩恵期間の終了が近づくと述べ伝えられる使命である。

しかし、なぜ、第二と第四天使は「バビロンは倒れた」と同じ使命を伝えるのであろうか？なぜ、黙示録18章の第四天使は、第二天使の「バビロンは倒れた」との使命を繰り返すのであろうか？

「黙示録14章の第二天使の使命は、最初、1844年の夏、宣べ伝えられた。そして、それは当時の米国の諸教会に直接当てはまるものであった。米国においては、審判の警告が最も広く宣言されたにもかかわらず、大部分の教会はそれを拒否して、急速に墮落してしまっただけでなく、しかしその墮落は、全面的なものではなかった。諸教会は現代に対する特別な真理を拒否しつづけてきたために、ますますひどく墮落してしまっただけでなく、しかし、バビロンは倒れた。…その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者」と言うまでには、まだなっていない。彼女はまだあらゆる国民に飲ませてはいない。世俗と妥協する精神と、われわれの運命を決定する現代の真理に対する無関心とが、すべてのキリスト教国のプロテスタント諸教会内で力を得ている。こうした教会も、第二天使の厳粛で恐るべき告発のなかに含まれる。しかし、背教の活動は、まだその頂点に達していない」大争闘下 91, 92。

バビロンはどのように「あらゆる国民」にその怒りの不品行のぶどう酒を飲ませるのであろうか？彼女は、まだすべての国にそのことをしていない。どのようにするのであろうか？

「世界は、恐ろしい結果をもたらす問題に直面しようとしている。地の権力者たちは、合同して神の戒めに逆らって戦い、『小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に』、偽りの安息日を守ることによって教会の習慣に従うよう命じるのである(黙示録 3:16)。…安息日は、…忠誠の大試金石となる。最後の試練(テスト)が人々を襲う…」大争闘下 374, 375。

「地の権力者たち」すなわち全世界が「偽りの安息日」を立法化する。これが世界的日曜休業令である。この時こそ第四天使の使命が「バビロンは完全に倒れた。彼女はすべての国民に激しい怒りのぶどう酒を飲ませたからである」と大いなる叫びをする時である。

もし安息日が「大いなる試練」「最後の試練」で、この地上の住民に対する「最後の警告」であるなら、それはまた、すべての人の恩恵期間の終わりが来た警告でもある。テストが与えられ、天に記録が残り、すべての者は、神の印か獣の刻印かを受ける。

従って、黙示録18章の第四天使は、獣の刻印に関する第三天使の宣布に力を添えて「最後の警告」をする。黙示録18章の第四天使は、世界的日曜休業令に目を向けさせ、恩恵期間が終わる前の最後の機会であることを宣言する。第一天使は、第七日の真の安息日に人々の目を向けさせ、第三天使は、獣の刻印としての偽りの安息日に人々の目を向けさせる。第二天使は背教した宗教が完全に倒れたことを宣言し、第四天使は

「わが民よ、彼女から出てきなさい」と叫ぶ。第四天使は、聖霊の力、「後の雨」によって「大いなる叫び」がなされる時に来る。

第三天使の使命も、第四天使の使命も共に**警告の使命**である。
後半の、第五、第六、第七天使の使命は**収穫の使命**である。

4. 黙示録 14:15 - 20の第五、第六、第七の天使の時期はいつとすればいいのか？

第五、第六、第七天使の使命

イエスは言われた：

「収穫とは世の終わりのこと…」マタイ 13:39

第五、第六、第七天使の使命は、はっきりと**収穫の時期**を示している。それは、世の終わりのこと、恩恵期間終了の最後の世代の時である。

「また見ていると、見よ、白い雲があって、その雲の上に人の子のような者が座しており、頭には金の冠をいただき、手には鋭いかまを持っていた。

すると、もうひとりの御使が聖所から出てきて、雲の上に座している者にむかって大声で叫んだ、『かまを入れて刈り取りなさい。地の穀物は全く実り、刈り取るべき時がきた』。雲の上に座している者は、そのかまを地に投げ入れた。すると、地のものが刈り取られた。

また、もうひとりの御使が、天の聖所から出てきたが、彼もまた鋭いかまを持っていた。さらに、もうひとりの御使で、火を支配する権威を持っている者が、祭壇から出てきて、鋭いかまを持つ御使にむかい、大声で言った、『その鋭いかまを地に入れて、地のぶどうのぶさを刈り集めなさい。ぶどうの実がすでに熟しているから』。

そこで、御使はそのかまを地に投げ入れて、地のぶどうを刈り集め、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ込んだ。

そして、その酒ぶねが都の外で踏まれた。すると、血が酒ぶねから流れ出て、馬のくつわにとどくほどになり、一千六百丁にわたってひろがった」黙示録 14:14~20。

「鋭いかま」は、収穫をする道具である。たいていはまがったかまが、穀物やぶどうを収穫する時に用いられる。この「鋭いかま」をイエスはお持ちになっていると表現されている。それが、第五、第六、第七天使と関連づけられている（14節）。第五天使は、「刈り取るべき（収穫）時がきた」と言っているのだから、時期がはっきりしている（15節）。15節に、収穫の時は**熟している**とも言われている。穀物が熟するともう遅れてはならない。16節にも「地のものが刈り取られた」と言われている。だから、収穫の用意がなされるばかりでなく、行動に移され、仕事は終るのである。

黙示録 14:14~20の三天使は、最後の世代の天使であり、義人と悪人のための恩恵期間の終了をもたらす、「大いなる叫び」である。それは、神の民から十四万四千を封印し、また、バビロンから民を呼び出す一方、悪人を「神の怒り」、すなわち七つの災害に引き渡すことをする最後のテスト、使命である。これ

は黙示録 14 : 5—12 の三天使の使命の繰り返しである。しかし、黙示録 18:1-4 の大いなる叫びと栄光の力によってなされるものである。

第五天使の使命の内容

第五天使の使命は第一天使の使命と似ており、その繰り返しである。しかし、それは調査審判の終りと恩恵期間の終了のときに特別にあてはまる。第一天使と第五天使の使命のよく似ていることに注意して頂きたい。

第一天使
「さばきの時
〔死んだ義人のさばきの時〕
(1844)
は来た」
黙示録 14 : 7

第五天使
「(収穫)の時
〔生ける義人のさばきの時〕

は来た」
黙示録 14 : 15

「我々の助け主であられるイエスは、この地上に最初に生存した人々から始めて、各時代の人々のためにとりなし、**現在生きている人々で終われる**」大争闘下 215。

第四天使は、「バビロンは倒れた、大いなるバビロンは倒れた...彼女はすべての国民にぶどう酒を飲ませたからである(欽定訳)」と宣言する(黙示録 14:8, 18:1-4)。黙示録 18:1-4 は政治的状況を描写し、次に続く三天使の時期を与える。「**すべての国民**」が世界的日曜休業令の法令に合意するや否や、その時はじめて第五天使が天で起こることを宣言することができるのである。第四天使はこの地上で起こりつつあることに目を向ける一方、第五天使は、天で起こることに目を向ける。

第一天使もまさにそうであった。第一天使が 1844 年に「(死んだ者のさばき) さばきの時は来た」と宣言したように、第五天使も、最後の世代の生ける者のための「さばきの時は来た」と宣言するのである。この地上の大失望(1844年10月22日)が天の事件(死んだ義人のさばき)に合図を与えたように、この地上の日曜法令は天において生ける者のさばきが始まることの合図である。

第五天使の使命の結果は何であろうか? 聖書は語る:「地のものが刈り取られた」と(黙示録 14:16)。(この第五天使に次ぐ二人の天使がいるので、第五の天使によって**誰が刈り取られるのか**を決定する必要がある。)三人の天使は収穫の天使である。第五天使は、収穫する三天使のうちの最初の天使である。だから、第五天使は、すべての収穫の「初穂」を刈り取るのである。では、初穂とは誰であろうか? 聖書自身に語ってもらおう:

「なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた。.... 彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる**初穂**として、人間の中からあがなわれた者である」黙示録 14:1, 4。

ヘブルの農業暦には、三つの収穫があった:

1. 大麦の収穫——（過ぎ越しの祭り—種入れぬパンの祭り）大麦は「初穂」であった。
2. 小麦の収穫——（ペンテコステ—収穫の祭り）
3. ぶどうの収穫——（贖罪の日—仮庵の祭り）

〔参照：出エジプト23：14, 17, 15-17; 34:22; レビ23:10、33-44.民29:30〕

第五天使は時期を考えに入れた使命である。

第五天使は、生ける者のさばきのために「時は来た」と宣布する。何を根拠にしてそれを主張しているのでしょうか？第五天使は第四天使によって語られている諸事件に基いている。しかし、それ以上のことがある。

第五天使は次のことを宣布するので時にかかわっている：

1. ダニエル12：7-12の三つのタイムライン
2. 六千年の恩恵期間の終了

第五天使は、第一天使の使命が1844年まで延びていたように、時に関わっている。第一天使が「さばきの時は来た」と宣布したように、第五天使は、第一天使の使命を繰り返し強調し、現に起こる諸事件と聖書の預言に対応し、後の雨—大いなる叫びの力で強化されるのである。それは初穂—すなわち十四万四千を刈り取る。彼らは霊的イスラエル、すなわち教会から刈り取られるのである。

十四万四千は特別な働きをするように選ばれる。それは世界に向かって「大いなる叫び」をする。彼らのことについて次のように描写されている：

「...そして人々は、頭から足まで武具をまとっていた。彼らは、兵卒の隊のように、規律正しく動いた。...わたしは、武具をまとった人々が力強く真理を語るのを聞いた。それは効果的であった。...わたしは、何がこのような大きな変化をもたらしたのかをたずねた。『それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天使の大いなる叫びである』と天使は言った」初代文集439-440。

第六天使

「また、もうひとりの御使が、天の聖所から出てきたが、彼もまた鋭いかまを持っていた」黙示録14:17。

第一天使の使命が、第五天使によって、大いなる叫びのうちに繰り返されたように、第二天使と第四天使の使命が第六天使によって繰り返されるのである。第二、第四、第六天使の使命は、部分的に以前から述べ伝えられてきたが、今度は、大いなる叫びという新しい状況でバビロンからの最後の収穫をもたらす拡充された働きをする。

「第二天使が諸教会の墮落を宣言して以来、諸教会は、ますます墮落していったことを、わたしは見た。....無数の悪天使たちが、全地に広がって、教会に満ちている」初代文集 443、444。

「わたしはもう一人の力強い天使（黙示録18の第四天使）を見た。....地はその栄光で照らされた。....この天使の働きは、最後の大いなる働きにおいて**第三天使の使命が大いなる叫びとなってもりあがるちょうどその時にはじめられる**」同448。

「『わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。...』と叫んでいる声が、いたるところに聞かれた。

1844年に第二天使の使命に夜中の叫びが合流したように、この使命は、第三天使の使命に追加されて一緒になったもののようであった」同448。

夜中の叫びは、「さあ花婿だ、出て迎えよ」との宣布であった。この使命は1844年の第二天使の使命に合流した。同じように、第四天使の使命は**追加された声**であると言われている。

「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。...彼は力強い声で叫んで言った、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。』

....

わたしはまた、**もうひとつの声**が天から出るのを聞いた、「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」黙示録 18:1-4。

第四天使に加わる「もう一つの声」は、「見よ、花婿が来られる、出て迎えよ」と叫ぶ第六の天使である。一これは、婚姻の歌、雅歌書の使命である。

「バビロンは倒れた」と叫ぶ天使に合流するこの追加の声は、ちょうど1844年以前に起こったことに似ている：

「第二天使の使命（1844年の夏）の終わり近くになって、大いなる光が天から神の民の上に照り輝いているのをわたしは見た。この光は太陽のように輝いていた。そしてわたしは、天使たちが『見よ、花婿が来た。出て迎えよ。』という声を聞いた」1 SG140, 141。

第三天使の使命と結合したこれらの天使の使命は、すべて大いなる叫びで与えられ、第二の収穫が達成される。バビロンにいるすべての義人はみな、彼女から出てきて、義人の収穫が達成される。これは古代イスラエルでなされた第二の収穫—小麦の収穫にたとえられる。それは、ペンテコステの時に祝われたのである。

第七天使

これらは、刈り取る天使たちである。第五、第六天使の使命で恩恵期間が閉じるとき、第七天使がとってかわって、今度は悪人の収穫となる。次のように描写されている：

「さらに、もうひとりの御使で、火を支配する権威を持っている者が、祭壇から出てきて（黙 8:3-5—恩恵期間の終了）、鋭いかまを持つ御使にむかい、**大声で言った**、『そ

の鋭いかまを地に入れて、地のぶどうのぶさを刈り集めなさい。ぶどうの実がすでに熟しているから』。そこで、御使はそのかまを地に投げ入れて、地のぶどうを刈り集め、神の激しい怒り〔七つの災害〕の大きな酒ぶねに投げ込んだ」黙示録 14:18, 19。

第三天使の使命と第七の刈り取る天使の働きとは、はっきり関係づけられることが次の図表で分かる：

第三天使

大声で言った
火で苦しめられる
神の怒り
〔七つの災害〕

第七天使

大声で言った
火を支配する権威を持っていた。
神の怒り
〔七つの災害〕

三天使の使命は、一組になっている。三つとも結合されて、「後の雨」の聖霊の注ぎによって大いなる叫びとなって膨れあがる。それは、黙示録 18:1-4 の第四天使の力で、またその時期に与えられる。その働きが終わるとき、悪人の収穫がなされるのである。悪人は、「鋭いかま」で刈り取られ、集められ、大きな酒ぶねに投げ込まれると描写されている。

「さらに、もうひとりの御使で、火を支配する権威を持っている者が、祭壇から出てきて(黙 8:3-5 参照—恩恵期間終了)、**鋭いかま**を持つ御使にむかい、大声で言った、『その鋭いかまを地に入れて、地のぶどうのぶさを刈り集めなさい。ぶどうの実がすでに熟しているから』。そこで、御使はそのかまを地に投げ入れて、地のぶどうを刈り集め、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ込んだ」黙示録 14:18, 19。

ヘブルの農業暦での第三の収穫は、ぶどうの収穫であった。それは恩恵期間の終了の型であった贖罪の日の時に祝われた。(聖所の周りに集まって、悔い改めなければ、民籍から断たれるのであった。レビ記 16 章)。罪祭は火で焼かれた。「聖所で、あがないをするために、その血を携え入れられた罪祭の雄牛と、罪祭のやぎとは、宿営の外に携え出し、その皮と肉と汚物とは、火で焼き捨てなければならない」レビ記 16:27。

恩恵期間が閉じる時、悪人〔ぶどうが完全に熟する〕は刈り取られ、七つの災害といわれる神の怒りに投げ込まれる。この第二の死は「火」と呼ばれ、第七天使は千年期の終わりまでの預言を網羅している：

「そして、その酒ぶねが都の外で(聖なる都の外で—黙 20 参照)踏まれた。すると、血が酒ぶねから流れ出て、馬のくつわにとどくほどになり、一千六百丁(200 マイル)にわたってひろがった」黙示録 14:20。

この悪人の最後の収穫、また酒ぶねのぶどうは、ヨエル書に同じ語法が用いられて描写されている。

「かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである」ヨエル書 3:13-14。

第四、第五天使は、ダニエル 12 章のタイムラインの宣布の時期を次のように提供している：

第四の天使はバビロンが完全に倒れる時を日曜休業令に指し示している。彼は、この地上で起こる法令を指している。

第五天使は、第四天使の合図をとらえる。この地上で起こることは、同時に天で起こることの合図である。一すなわち、生ける者の調査審判である。第五天使は十四万四千の初穂の収穫を刈り取るために「時は来た」と宣言する。

大いなる叫びの宣布がいつかという時期を提供するのは第四、第五天使である。詳しい情報はダニエル 12 章にある。タイムラインは単に補足的なデータを与えているだけである。

六千年という制限は、時を見定める考え方である。七千年目の安息年がまもなく始まろうとしている。ヨベルの年も終わろうとしている。ダニエル 12 章のタイムラインはその証をしている。七天使はその使命を鳴り響かせようとしている。これらのすべての大預言の部分がこぞって時の終りに合流しようとしている。

結論

「おそらく長年の間、預言的証の中で最も顕著な教訓の一つは、預言的概略の中で、**まさしくそれが成就される時が来た時**、その時代のそれぞれの主要な出来事、諸事件が認識され、解釈されるということである。

預言はちょうど歴史が世紀を通じて過ぎ去るとき、一步一步、それを成就してきたように漸進的に理解されてきたのだという結論に、研究者は、ゆっくりではあるが、いやおうなしに導かれて来たのである」L.E. フルーム：The Prophetic Faith of our Fathers, pp. 890, 14。

七人の天使と彼らの、黙示録のメッセージはいつも「はっきり見えるところに」あった！しかし、今日に至るまで見える、あるいは理解されるには至らなかったのである。突然、刈り取る天使が見えるようになってきた！「成就する時に認識がなされる」という概念が、まさに明らかに見えはじめてきたのである。

刈り取る天使の役割を認知するこの世代は、実際に収穫が行われるのを見るその世代なのである。愛する兄弟姉妹方、我々は、歴史の「終わりの時」に立っているのである。我々は、これらの天使、第四から第七の天使の預言的使命が成就される歴史的諸事件を待っているだけである。イエスはまもなくさばきにおいて我々の名を呼ばれ、ご自分の民を迎えに天からおいでになるのである。

黙示録の七天使の使命

時の設定

内容

<p>第一天使の使命 1843-1844 永遠の福音 神を畏れ、神に栄光を帰せよ 神の裁きの時が来たからである。 (1844年から死んだ者の調査審判が始まった) 創造主を礼拝せよ： (第七日礼拝を覚えよ、 神の印を受けよ)</p> <p>黙示録 14：6.7.8.9-12</p>	<p>第二天使の使命 1844年の夏に始まった</p> <p>「バビロンは倒れた」 「あらゆる国民. . .」 「まだその頂点に達していない」 大下 92</p>	<p>第三天使の使命 1845—</p> <p>誰でも： 1. 獣一（法王教）と 2. 獣の像（背教プロテスタント）を拝み、 3. 獣の刻印（日曜日＝偽安息日）を受けける者は、 4. 神の怒り（七つの災害）が注がれ、 5. 火と硫黄とで苦しめられる。</p>
<p>黙 18：1-4 大争闘下 372 日曜休業令 最後のデスト 未来</p>	<p>第四天使の使命 「バビロンは倒れた」 「あらゆる国民は. . .」 「地は神の栄光によって照らされた. . .」</p> <p>「わたしの民よ、彼女から離れなさい」 「もう一つの声」によって 〔第六の天使〕</p>	<p>第四天使は「第三天使と合流して力を添える」</p>
<p>黙 14：14-20 「鋭いかま」 審判の終了の 光景</p>	<p>第六天使の使命 神殿から刈り取る行動</p> <p>「地のものが刈り取られた」 第二の収穫：小麦 バビロンが刈り取られる</p>	<p>「大いなる叫び」 第七天使の使命 祭壇から刈り取る行動 4. 神の怒り（七つの災害）を受けける 第三の収穫：ぶどう 悪人が刈り取られ、亡ぼされる ヨエル 3:13-16</p>

付録B

常供

預言の解釈において最も頭を悩ますものは、「常供」という言葉である。ダニエル書に五回も使われている(8:11、12、13、11:31、12:11)。欽定訳の翻訳者たちは、いずれも「燔祭」という言葉を付け足している。ある聖書ではイタリック文字にしている。「燔祭」という言葉はヘブル語にはない。エレン・ホワイトは「燔祭」という言葉はそこにあるべき言葉ではないと指摘している：

「『常供の燔祭』(デイリー・サクリファイス)(ダニエル8:12)の『燔祭』(サクリファイス)という言葉は、人間の知恵によって附加されたもので、本文にはないものであることをわたしは見た」初代文集155。

もし「燔祭」という言葉がそこにあるべきでないとするれば、他にどんな言葉を入れるべきであろうか? 「常供」(ヘブル語で“tamyd”、タミード)は、絶えざるという意味があるが、それは形容詞でもなく、名詞でもない。文章の名詞、あるいは主語がないのである! 「何の事」が「常供」または「絶えざる、連続」なのであるか? もしこの謎が解決されたら、ダニエル12:11に光が輝くであろう。なぜ、神はこのパズルを最後の時代までずっと未解決のままにしておかれたのだろうか? 最後の戦い、危機に直面する者たちによってあらわにされなければならないどんな秘密を神はお持ちになっておられるのであろうか?

(エレン・ホワイトの勧告から益を受けなかった)過去の偉大な預言の解説者たちは、「常供」(daily)の名詞、または主語を追加しようと試みてきた。彼らの労力が、L. E. フルーム博士の400ページにわたる「我らの父祖たちの預言的信仰」(The Prophetic Faith of our Fathers)に列挙されている。どのようにこれらの偉大な人たちは「常供」を理解したのであろうか?

1. ヨセフス*	1 0 0 A. D	「(ユダヤ人の) 絶えざる燔祭、犠牲 (sacrifice)」
ヴィラノヴァ	1 2 9 7	「十字架におけるキリストの犠牲」
オリヴィス	2 9 8	「十字架におけるキリストの犠牲」
ウイクリフ	1 3 8 4	「十字架におけるキリストの犠牲」
ブルーテ	1 3 0 0	「キリストの犠牲と祭司制」
2. イボン・エズラ**	1 0 9 2	「神殿の犠牲」
オブラバネル	1 4 3 7	「神殿の犠牲」
アムスドルフ	1 5 0 0	「福音の宣教」
ファンク	1 5 6 6	「真の福音」
リベラ	1 5 9 1	「神殿の燔祭 (アンテオカスのこと)」
ヴィーガス	1 5 9 9	「ミサーユーカリスト [ミサ聖祭の犠牲]」
ドーハム	1 6 3 4	「神のみ言葉にもとづく真の礼拝と教理」
チリングアースト	1 6 5 5	「ローマ帝国民の権力」
ショーウイン	1 6 8 7	「ローマ国」
ビバリー	1 7 0 3	「一つの帝国から次に移ること (不明)」
ラッド	1 7 5 7	「純粋な神の礼拝」
ラ・フエッチャー	1 7 8 5	「真の神とイエスの礼拝」
ウッド	1 8 0 3	「神の礼拝」

* The Prophetic Faith of our Fathers, Vol I, 202, 53, 773.

** Ibid, Vol III, 58, 78, 79, 213, 230, 304, 306, 309, 493, 502, 535, 571, 577, 582-586, 691, 692, 721, 722, 742, 3. Vol II, 73, 288, 341, 363, 377, 400, 401, 488, 496, 539, 553, 565, 609, 650, 732, 734-736.

ベル	1 7 9 6	「真の礼拝」
3. ヒュイット	1 6 4 4	「教会の中における日ごとの礼拝」
パーカー	1 6 7 7	「真の礼拝」
カニングハム	1 8 0 2	「教会における礼拝」
フェイバー	1 8 5 4	「賛美と感謝」
メイトランド	1 8 6 5	「霊的な礼拝」
アービング	1 8 2 6	「真の礼拝（東部教会において）」
メイソン	1 8 3 4	「教会における神の礼拝制度」
ベイフォード	1 8 2 6	「血の犠牲としての神の小羊」
ニコレイ	1 8 7 4	「キリストの教会」と聖所の奉仕
フライ	1 8 4 9	「国家権力」
クーパー	1 8 3 3	「真の礼拝」
ケイワース	1 8 5 2	「モハメッド教」
フーパー	1 8 2 9	紀元前606年に取り除かれた「神殿の犠牲」
ノーラン	1 8 6 4	「キリストの奉仕」
バイケルステッツ	1 8 5 0	「ユダヤ人の制度—国家」--バビロン捕囚。未来のローマに適用。
テイソー	1 8 3 8	「ユダヤ国家と捕囚」
マイング	1 8 9 2	ローマ・カトリックの殿堂と聖体が分裂とプロテスタントによって取り除かれたこと。
4. カニングハム*	1 8 0 7	「ユステイアヌス（異教ローマ）」
リード	1 8 7 2	「真の礼拝」
キャンペル	1 8 3 7	「異教ローマ」（位と力と権威）
スコット	1 8 1 0	「ソロモンの神殿」モハメッド教徒により取り除かれた。1843年ハイムズのチャート〔異教ローマ〕
ミラーの“ブロードサイド”		
(Broadside)	1 8 4 3	「異教ローマ—憎むべきもの」
ドーリング	1 8 4 3	「ユダヤ人の犠牲制度」 Rhodes
ニコルス	1 8 5 0	「異教ローマ（国家権力）508A. D-538A. D.」
アーノルド	1 8 4 8	「ユダヤ人の犠牲制度」
クローザー	1 8 4 6	「キリストの奉仕」
ユライア・スミス	1 8 5 3	「異教ローマ—異教」
ベル	1 8 6 9	「異教」
5. (近代—20世紀)		
ハスケル	1 9 0 6	「異教」
ジョーンズ	1 9 0 5	「天におけるキリストの奉仕」
バンチ	1 9 3 0	「天におけるキリストの奉仕」
SDA〔スミス〕	1 9 4 4	「異教」--改訂版
フォード	1 9 7 8	「神殿の犠牲（型）」
6. 20世紀の解説者		
マックスウェル	1 9 8 1	「キリストの奉仕」
フイーリング	1 9 8 6	「永遠の安息日」--契約
本書	1 9 9 0	「権力の笏（主権）」**

* Prophetic Faith of our Fathers, Vol IV, 141, 246, 255, 32, 728, 732, 748, 1073, 1115, 1118, 1119, 1120, 1121, 1134.

** 宗教的背景と時代は解釈者の結論に影響を与えた。ユダヤ人の解釈者は、敵、またはローマによって神殿の日ごとの奉仕が「取り除かれる」と解した。初代教会は、キリストの十字架の犠牲によって「常供」が「取り除かれた」と解した。

「常供」と「キリストの奉仕」

総括的な目的：ダニエル8章から12章に出てくる「常供」という言葉は、「キリストの奉仕」と解することはできないということを立証すること。

詳細な目的：

1. 「キリストの奉仕」を定義する。
 - a. キリストの広義の奉仕
 - b. キリストの仲保の働き
2. キリストの仲保の働きと犠牲のあがないを連結する。
3. 犠牲の奉仕と「常供」を連結することへの反論を認識する。
4. キリストの仲保の働きをダニエルの「常供」と連結することの問題点を認識する。

見解1. キリストは、恩恵期間終了の時に「取り除かれ」ることのない「広義の奉仕」を持っておられる。

キリストは、その仲保の役割より「さらに広い働き」を持っているとエレン・G・ホワイトと神の言葉は言っている：

「天の宮廷ですべての被造物のために奉仕しておられる時もそうである。…み子を通して、それは賛美と喜びの奉仕のうちに、愛の潮流となって、すべての者の根源である神へもどって行く。このようにキリストを通して愛の循環が完成され、それは偉大な賦与者であられる神のご品性—生命の法則を象徴している」1希望4。

すべての被造物のためのキリストの「広義の奉仕」は、永遠である。その「広義の奉仕」は、聖書の中に、キリストの職、役割が次のように述べられている：創造者(コロ1:16)、維持者(コロ1:17)、生命の賦与者(ヨハネ5:21-26, 11:25)、言葉(ヨハネ1:1-4)、契約者(創3:15)、伝達者(1希望4)、神のみ子(ヘブル1)、人の子(マタイ1)、仕える僕(ピリ2:5-8)、犠牲の小羊(黙1)。

世のはじめから、キリストは罪を負う方で、人類が墮落した時にその働きに入られた。大争闘が終わり、全宇宙が清められるまでは、罪との対決という彼の働きは止まないのである。

従って：

見解2. キリストの「広義の奉仕」は恩恵期間の終了で終わるのではない。上に定義したように、このキリストの「広義の奉仕」は、恩恵期間の終了で「取り除かれる」ダニエル書の「常供」ではない。キリストは今日実体のあがないの日に至聖所で仲保者—大祭司としての働きをしておられるのであり、その役割は、恩恵期間の終了と共に終わるのである。

次の引用文は、キリストのそのような働きは、彼が至聖所を去り、調査審判の働きをなし終えられるその時に止むということを示している：

* 宗教改革者たちは、「常供」を真の礼拝として取った。イエズス会は、宗教改革によって取り除かれるミサ、聖体と解した。17世紀になるとある者は、異教ローマの国家権力が取り除かれること、また法王教ローマによって吸収され、奪われることと解した。

「主は人のないのを見られ、仲に立つ者(仲保者,欽定訳)のないのをあやしまれた」イザヤ書 59:16。

「イエスが聖所を去られると、暗黒が地の住民をおおう。その恐ろしい時に、義人は仲保者なしに聖なる神のみ前に生きなければならない」大争闘下386。

「わたしは、また、悩みの時に、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのをみた」初代文集 149。

「その時は、もう、不義な人類と神の怒りとの間には仲保者がおられない」同 452。

「...もはや不義を清めるあがないの血もなければ、...あわれみ深い救い主もおられない」同 454。

上の引用文は、恩恵期間終了の時に終わるキリストの特別な仲保者、大祭司、執り成し者としての働きであり、これらの働きが終わると、神の民のために適用される「あがないの血」はないのである。

「仲保者」「大祭司」「執り成し者」の働きは、罪のために血が適用されることであり、一つが終わると、他も止むのである。

それ故に:

見解 3. 恩恵期間終了の時に止むのはキリストの「広義の奉仕」ではなく、上に列挙された、あがないの犠牲の血が適用される働きのことである。仲保者—執り成し者,大祭司の役割は、あがないの血の犠牲によってのみ有効とされる。

ヘブル書は我々の大祭司また、仲保者としてのキリストの役割は、特にそのあがないの血の犠牲に基づいているときにのみ有効であると定義している:

「大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕える役に任じられた者である」ヘブル 5:1。

「人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである。おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられねばならない」ヘブル 8:2, 3。*

「幕屋の奥(至聖所)には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない」ヘブル 9:7。

* ダニエル 8:14 の 2300 日(年)の預言は、「聖所が清められる」はたらきの始まりを表す。この「清め」は、カルバリーで流された「あがないの血」の犠牲の適用によって成し遂げられる。この血の犠牲が罪のためのあがないを法的な手段で可能にし、一人一人がキリストの王国に呼び集められるのである。このあがないの第二の局面は実体の「あがないの日」と呼ばれる。あがないは、犠牲の血を注ぐこと、あるいは、その適用によってのみ成し遂げられる。キリストの犠牲の血の適用をなさる働きは、恩恵期間の終了で止むのである。

「永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら...それだから、キリストは新しい契約の仲保者なのである」ヘブル 9:14, 15。

実体の「あがないの日」「聖所の清め」におけるキリストの、大祭司、仲保者、執り成し者としての働きは、カルバリーの犠牲の血と分けることができない連結したものである。調査審判の間中、仲保者としてのキリストの働きは、カルバリーで提供されたご自分のあがないの血を適用なさることである。恩恵期間終了後は、もはや適用される「あがないの血」はないのである（初代文集 453, 454 参照）。

見解 4. キリストの大祭司—仲保者としての働きは、ご自分のあがないの血の犠牲によって批准された（有効とされた）。主は、その預言者を通して「燔祭＝犠牲」という言葉（考え）はダニエル書の「取り除かれる」「常供」と連結されないとされた。

主は、ご自分の使命者を通して、「燔祭＝犠牲」という言葉、考えは、ダニエル書の「取り除かれる」「常供」とは何の関わりもないと言われた。このような考えは、「暗黒と混乱」をもたらすと次のように警告された：

「それから、『常供の燔祭』（デイリー・サクリファイス）（ダニエル書 8:12）の『燔祭』（サクリファイス）という言葉は、人間の知恵によって附加されたもので、本文にはないものであることをわたしは見た。そして、主は、審判の時の叫びをあげた人々に、それについての正しい見解をお与えになった。1844年以前に、人々が一致していたときには、ほとんどすべての者が、「常供」について正しい見解を持っていた。しかし、1844年以後の混乱のなかで、ほかの意見をもつものが現れて、暗黒と混乱が起こった」初代文集 155。

あがないが成し遂げられるのには、二つの局面がある。まず、カルバリーでキリストは血を流されて、その血を注ぎ、適用するために天の聖所に入られた。1844年に大祭司—仲保者としてその血を適用するために、主は実体の「あがないの日」の働きを開始された。エレン・G・ホワイトは二つのことを示された。

1. 天の聖所において、実体の「あがないの日」が終了し、キリストの奉仕が終わるとき、適用される「あがないの血」はもはやない（初代文集 454）。
2. 「燔祭＝犠牲」という言葉と概念は、ダニエル書の「取り除かれる」「常供」とは全く関係していない、本文にはないものである。彼女は、この原則を犯すことが暗闇と混乱をもたらすことを示された。

従って：燔祭＝犠牲—贖罪の血—を意味するキリストの奉仕は、ダニエル書の「常供」と連結されてはならない。ダニエル書の「取り除かれる」「常供」は次のことと全然関係していない。

1. キリストの広義の奉仕〔働き〕
2. 1844年以後のキリストの特別な仲保の働き
3. 調査審判—あがないの日
4. 恩恵期間の終了

見解 5. ダニエル書の「取り除かれる」「常供」をキリストの奉仕にあてはまると推測することが、混乱の始まりである。

A. 一貫した解釈が肝要

「常供」「取り除かれる」がダニエル書に五箇所ある（8:11, 12, 13; 11:31; 12:11）。

もし、ダニエル 12:11 の「常供」が字義どおりに天におけるキリストの奉仕のことを言っているとするなら、一貫して、それ以前のすべての聖句も同じことを言っているとしなければならない。

しかしながら、歴史主義預言解釈者たちは、ダニエル 8:9-13 と 11:31 は、ヨーロッパにおける法王権の出現と 1260 年間の法王至上権という歴史的事件を指していると理解している。ダニエル 8:9-13 にある「小さな角」の出現である。この聖句は政教一致としての政治の描写である。

法王教がこの地上に、偽りの人間の奉仕を代りにあてたことは本当であるが（他の多くの偽宗教が以前に同じようなことをした）、このことが天におけるキリストの奉仕を終わらせることはなかった。

本当の事実はダニエル 8 章の「取り除かれる」「常供」がその時天でキリストの奉仕を終わらせなかったということであり、同様にそれは将来もそうしないであろう。

B. 預言的タイムラインの明白な成就が絶対必要。

ダニエル 12:11 について「取り除かれる」「常供」はタイムラインに結合している。

タイムラインが有効となるためには、初めと終わりの明白なポイントがなくてはならない。

ある出来事から始まるであろうタイムラインが地上で観察されることができないなら、全然価値のないものである！

神の民は、エレン・G・ホワイトを通して、主によって我々が恩恵期間の終了の時を知ることはできないことを警告されてきた。我々は至聖所でのキリストの奉仕が終わる時を知ることはできない。

もし我々がそれを知ることができないなら、それが、あるタイムラインの目印となることは不可能である。

「常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、1290日が定められている」ダニエル 12:11。

1290日のタイムラインは、神の民が知ることのできない、天で起こる見えない行動で始まり、また終わることはあり得ない！

預言的タイムラインが、危機の中を歩む神の民を導くために光として与えられている。

1290日のタイムラインは、地上での明白な行動から始まらなくてはならない。そして、それは神の民によって観察され得るのである。

預言は神の益のためではなく、聖徒の教えのために与えられているのである！ダニエル 12:11 の「取り除かれる」「常供」は、地上で起こる出来事と、全世界のすべての人の目に見えることと関係がなくてはならない。

C. 順序に従って起こることを覚えよう。

1. 「常供が取り除かれ」そして
2. 荒らす憎むべきものが立てられる

最初の事件が起こって、第二の事件が続く。

「この聖句は字義的には次のように訳されるだろう。『絶えざる常供(daily)が取り除かれてから、憎むべきものが設立されるために』と。これは、憎むべきものが設立されるという直接の意図があってなされることを示唆している」4BC 880。

もし、「常供」が「取り除かれる」ということがキリストの奉仕とするならば、憎むべきものが設立される前に、キリストの奉仕が取り除かれる、または恩恵期間が終了することになる。しかし、憎むべきものという迫害勢力が、すべての者の最後のテストをもたらすのである。これは「馬の前に馬車」をもってくることになる。これは「暗闇と混乱」をもたらす結果になる。

見解6. 現代の預言の解釈者たちは、先駆者たちが「常供」に関して一致して持っていた考え方に調整する必要がある。

「主は、審判の時の叫びをあげた人々に、それについての正しい見解をお与えになった。1844年以前に、人々が一致していた時には、ほとんどすべての者が、『常供』について正しい見解を持っていた。」初代文集 155。

二千年近くも、神学者たちは、「常供」はキリストの奉仕を意味すると推測した。彼らは、それは、この地上のキリストの奉仕、あるいは祭司としての働き、あるいは主の教えと解した。しかし、1844年以前の審判の叫びをあげた者たちは「正しい見解」を持っていて、「ほとんどの者」はその点に関して一致していた。二千年近くも抱かれていた推測を放棄し、この「常供」は、キリストの奉仕としてではなく、力と位と権威が異教から法王教ローマに移行されたこととして理解していた。

彼らは「正しい見解」を持っていた。彼らはダニエル7章に、法王教の出現(538-1798)を見て、1260年、すなわち「ひと時とふた時と半時」を法王至上権の迫害と解釈した。1798年に、「審判の叫びをあげた者たち」は法王が権威を剥奪され、捕らえられたのを見た。彼らは預言の幻が自分たちの時代に起こる事件として焦点を当てたのである！彼らは、ダニエル8章の「常供」が「取り除かれる」ことを538年に権力が移り、1798年に終わる「現在の事件」として適用したのである。

それは、ダニエル8章のこの意味の理解と「小さい角」法王制の支配が黙示録14の第三天使の警告の基礎となるのである。それは黙示録13章にある将来の諸事件の警告の基盤である！この「常供」の考え方が過去と未来を結ぶのである！

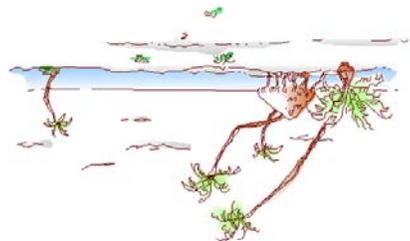
先駆者たちは、「常供」についての神学的根拠を備えないままにいたるのではなかった。残念ながら彼らは、異教ローマから法王教ローマへと力と位と主権が移行される考え方を省略した。すなわち「異教」が取り除かれるという一つの言葉で。しかし、彼らの見解を知ることのできる多くの資料がある：

1. ジェームス・ホワイトの初期の記事
2. ラフボローによる牧師の指針
3. ユライア・スミスのダニエルー黙示録講解
4. 過去、未来の法王教の支配についての争闘の文

ダニエル8章の「常供」が「取り除かれる」は、過去の法王教の支配を意味している。ダニエル12章の「常供」が「取り除かれる」ことは、未来の法王教支配を意味している。それは第三天使の、過去そして未来に関係する警告使命の一部である。「常供」が「取り除かれる」が紀元538年に法王制を確立したように(ダニエル8)、ダニエル12:11の「常供」が「取り除かれる」は、未来に法王制を確立するであろう(黙示録13参照)。この点について、我々は先駆者がそうであったように、一致する必要がある。

まとめ

1. すべての被造物のためのキリストの「広義の奉仕」は永遠に続く。それは恩恵期間の終了で終わるものではない。
2. ダニエル8章と12章の「常供」が「取り除かれる」はキリストの「広義の奉仕」のことではない。
3. キリストの大祭司としての仲保一執り成しの働きは紀元31年に犠牲の血によって批准された。
4. 恩恵期間終了の時には「贖罪の血」はもはや適用されない。
5. 「贖罪の血の犠牲」とそれに関する奉仕は、ダニエル8章と12章の「常供」が「取り除かれる」ではない。(預言者はこのような考え方に警告している)。
6. 1844年以前の再臨運動の先駆者たちには、「常供」が「取り除かれる」について主から「正しい見解」が与えられていた。
7. 再臨運動の先駆者たちは、「常供」が「取り除かれる」を異教から法王教ローマへの権力の移行と考えた。
8. 再臨運動の先駆者たちは、「常供」が「取り除かれる」がキリストの奉仕であるという考え方を放棄した。
9. 再臨運動の先駆者たちは、いろいろな刊行物で「常供」が「取り除かれる」を、紀元538年に確立された法王制とした。
10. ダニエル8章の「常供」が「取り除かれる」は、過去(538-1798)に法王至上権が確立されたことを描写している。
11. ダニエル12章の「常供」が「取り除かれる」は未来の法王至上権の確立を描写している。
12. ダニエル8章の「常供」が「取り除かれる」は、第三天使の警告と黙示録13章の基礎であり、始まりである。ダニエル12章は、未来にも同じようなことが起こるといっているにすぎない。
13. ダニエル8章と12章の「常供」が「取り除かれる」は、一貫した論理的な適用をされなければならない。
14. ダニエル12章の「常供」が「取り除かれる」は、目に見えない事件である恩恵期間終了の時に適用されるのではなく、未来の法王支配が確立されるための力と位と主権の移行に適用される。この目に見える事件は、ダニエル12章のタイムラインの始まりとなる。



主題：初代文集の、1844年の「常供」の「正しい見解」について

あなたのお訪ねになっているのは初代文集の74と75ページの「常供」についてですが、現存している記事で「正しい」見解とは何であったかについて我々を教えるような記事が何かないかということですね。私は「常供」の問題がただある古い記事を掘り出すことによって解決されることができたならいいのと思います、しかしそれはそれほど容易に解決することができません。我々の経験によると「常供」について、どういうことが言われているかに関しては多種多様な意見がありました。これはセブンスデー・アドベンチスト運動より先に起こっているミラー運動でも同じでした。我々は「新しい考え」として時々言及されることが何かあるとしても、古くから存在している二つのうちのどちらかであることに気がきます。2冊の最も初期のS.D.A. 定期刊行物、「アドベンチストレビュー」の第三巻43ページにあるクローザーの聖所に関する記事を見てください。

この問題に関して若干の熱心な討論があった時がありました。私は現在は多くの一般的な論議がないことをうれしく思います。時折初代文集の言葉によって彼らの意見を支持しようと努力した人たちがいました。

1910年にホワイト夫人はこの問題を論じ合っていた我々の兄弟たちに二つの手紙を書き、彼らが彼らの議論を支えるために彼女の書き物を使うのを禁止しました。彼女はこう言いました：「私は議論しているポイントに関して何も教えを受けていないし、そして私は論争の必要を感じません」と。

この論争が白熱化していた時、一人の指導的な働き人が古い1843年の図表を再現し、下部に初代文集からの言葉を印刷しました。ホワイト夫人は彼がその言葉をそのように使うことを禁止したので、彼はその言葉の上一枚の紙を貼りました。我々はこれらの図表の一つを持っています。

ここで当然質問が起こります。その時、ホワイト夫人が初代文集の74-75ページに「常供」について言っていることは一体何のことを指しているのだろうかということです。私はそれがどういう背景において言われたかということを読む時、部分的な答えが得られると思います。あなたは彼女が1844年に2300日の時期とその終了について述べていることを観察するでしょう。彼女は図表について言及し、そして次に彼女は「燔祭」という言葉は附加されたと言います。その問題に関して1844年の前には一致していたと言った後で、彼女はそれ以後、混乱が生じたと言っています。そして特に1844年からは時はテストとはならず、決して再びテストではないであろうと述べています。このことは、その「常供」の問題についての言及を、時の設定に関っていることにしています。その文は最初書かれたその時から今日の我々には大した意味をもたないでしょう。なぜならその時は第三天使の使命を受け入れ損じたアドベンチストの間で時を年々設定した者たちが多くいたからです。彼らは2300日が1844年に完全に終了したことを否認して、新しい期間を考えるようになりました。彼らは、ユダヤの「常供の燔祭」に基づいて新しい時を設定しました。その一つは紀元前446年に始まり、1854年までとしました。私はこの記事を書いている今、そのような図表を持っています（257ページの図表参照）。このようにして新しく時の設定をしたことは確かにダニエル8:11-13に使われている「燔祭」という言葉に基づいていました。簡単に再現した図表を添付しましたので見てください。

ホワイト夫人は、「燔祭」という言葉は本文にはない、附加された言葉であったということを示された時、それは彼らの、新しい時を設定しようとするファーストデー・アドベンチスト(第一日安息日再臨教団)の論拠は全くないとして彼らを驚かせました。

1910年ごろ、W.C. ホワイト長老とC.C. クライスラーに同伴されたダニエルズ長老は、初代文集のこの文をホワイト夫人のところに持って行き、「常供」の問題に決着をつける何らかの情報が得られると思い、

彼女が考えていたことについて確認しようと努力しました。ここに私は、ダニエルズ長老のインタビューの結果を W. C. ホワイト長老にあてられた手紙の中から引用します。

我々がダニエル 8：9-14 の「常供」に関して若干の論争をしていた時、古い見解を支持して主張した人たちは初代文集の 74 ページの次の言葉によって支援されたと主張しました（引用文省略）。

私は最初にホワイト姉に初代文集の上に与えられた文を読みました。それから私は、ダニエルと黙示録の預言を説明する時に我々の牧師たちによって使われた預言のチャート彼女の前に置きました。私は、彼らがチャートに示された聖所の絵と 2300 年の期間に彼女の注意を引きました。

それから私はこの問題に関して彼女に見せられたことを思い出せないかと聞きました。

私は彼女の答えたことを思い出すと、彼女は 1844 年の運動のあるリーダーたちは、2300 年の期間終了のために新たな日付を見いだそうと努力していたことを述べられました。この努力は主の再臨の新たな日付を設定することでした。これが再臨運動にいた人たちの間に混乱を起こしていました。

この混乱の中で主が彼女に明らかにされました。日時に関して彼らが持っていた見解は正しかった、そしてもう他の時の設定はあってはならないし、時のメッセージがあってはならないと彼女は言いました。

それから私は、「常供」に関する他のこと—主、衆群、「常供」を取り除くことや聖所を倒すこと—について彼女に何か示されたかを話してくれるように頼みました。

彼女は、これらのことについては、時の部分に関するようには彼女に示されなかったと答えました。彼女はそれらの預言のポイントの説明をするようには導かれなかったようです。

インタビューは私の心の上に深い印象を与えました。2300 年の時期についてはためらい無しに、彼女は自由に、明らかに、そして詳細に話をしました。しかし預言の他の部分に関して彼女は沈黙しました。

時に関しては自由に話されたことと、「常供」が取り除かれることと、聖所が倒されることについては沈黙されたことから私が引き出せる唯一の結論は、彼女に与えられた幻は、時に関してであって、預言の他の部分については何の説明も受けなかったということです。A.G.ダニエルズから W.C. ホワイト への手紙 1931 年 9 月 25 日。

これらのことと私が提出した他の証拠から、ホワイト夫人は、「常供」が何を意味するかという問題に関しては光を与えられなかったもので、それは熱心な聖書研究によって解決されなければならないが、しかし我々はそれが誠実な聖書研究者の間に論争の的とならないように警戒すべきです。

私はむしろ大争闘普及版の 65 ページに副次的な証拠として、あなたの注意を向けたいと思います。4 行目と 5 行目に、彼女は法王権によって真理が地に投げつけられることを話しているのであり、そして、もちろん、ここで研究のポイントである預言に言及していることに気付くでしょう。

ワシントン 12, D. C. 12—15, 1959

神のマスタープラン（過去と未来）における預言の立場

預言は、背教から男女を呼び出して各時代を導く信号灯の光である。預言は、神の支配が国々の上にあることを認識した初代のクリスチャン殉教者を支えた。それはローマに抵抗するようにワルデンセスを勇気づけ、そして英国のウイクリフ、ボヘミアのハスにともし火を輝かさせた。

ルターがローマに反抗した時、預言が引用された。彼は聖書のキリストと対照してローマが反キリストであると宣言した。アドベンチストの先駆者たちは、まだ現代の巧妙な背教に巻き込まれていない神の子供たちを教化するであろうと信じた。彼らは預言の最も顕著な導き为世界の最終危機の前に経験されるであろうと信じた。人類がどこから来たか、今時の流れのどこにいるか、そしてどこに向かっているのかを預言は示していると考えた。それは神の王国に向かって最終の行進をしている人間を教化する、永遠の福音の忠実な宣伝者たちの手中にある輝く灯火である。

人間の、預言の解釈への正直な試みは、預言的真理と原則の理解への探索にすぎなかった。預言の成就是世紀を通じて漸進的なものとして認められてきた。それは、歴史がそれぞれの時代あるいは預言の主要な諸事件が成就する時が来るにつれ、人々の、心にゆっくりと展開されてきた。この堅固なプラットフォームに立って、人々は残っている部分が、彼らの目の前にすみやかに起こっていることを認識すべきである。

歴史が預言のマスタープランにそって次々と成就していく中で、人々は、その時点で、預言が確実に成就していくのを見ている。そして彼らは時代の大きな預言的概観をつかむのである。この同じ認識と信頼をもって、彼らは今世界の目前に起きようとしていることを見て、預言の最終段階に近づいていると考えなければならない。

従って預言がすべての教義と生活に意味と深さを加えるのである。それは歴史の不可解な出来事に鋭い総体的見地を与えるものである。それは、カーテンを開いて、大争闘の展開の中で、不可解な諸事件の後ろに神の手を見させてくれる。そして人間にそのすべてのより大きい意味を垣間見させてくれるのである。それは失われた人類に対する神の贖罪愛の詳細な描写である。

預言は、最後の時の暗闇に光を投げかけるものである。暗い歴史の道に、預言とその成就を通して神は国と同様、個人個人を扱うことについての原則を明らかにしている。それは、神の指によって描かれた約束の虹である。それは、今世界に接近している最終時代の激変の中で救出される確信を与えるものである。正しく理解されると、それは輝かしい楽天主義をもたらす。それは人類にエデンのパラダイスが間もなく回復されること、そして罪は二度と起こらない保証を与えてくれる。これ以外何ものも、神の民を彼らの最終の救出に対して準備させることができない。これが最後の時に住む者たちに対する預言の挑戦である。これが安息日遵守者アドベンチストの信仰であった。

サタンはどのように「常供」（力と位と権威の笏）を 奪おうと試みるのか？

序論

黙示録 12 章に預言的象徴で、サタンは「大きな赤い龍」また「七つの頭を持ち...七つの冠を持つ」ものとして描写されている。この「冠」は、サタンの王国の王として頭に冠、手には「常供」すなわち、力と位と権威の笏(主権)を持って、支配しようと決意していることを表している。



「サタンの部下たちは、彼の指揮のもとに常に活動して、彼の権威を確立し、神の政府に対抗して彼の王国を建設しようとしている」大争闘下 246。

大きな赤い龍の七つの頭と七つの冠は、サタンが過去、現在、未来において自分の王国を建設しようとする七つの順序を表している。（7は完全を表す象徴的数字である。天における反逆から、サタンが千年期の終わりに火の池で滅ぼされるまでの期間の、完全な順序を表している。）

七つの「頭」も象徴的である。「頭」を解釈するために、聖書自身がその「鍵」を提供している。「頭」の象徴を解く二つの鍵が黙示録 17:9、10 とダニエル 2:35、44 に見つかる。

黙示録 17:9、10 に最初の「鍵」がある。「七つの頭は七つの山である」と。しかし、「山」もまた預言的象徴であるため、このコンビネーションを解くためには第二の「鍵」が必要である。第二の「鍵」はダニエル 2:35、ネブカデネザルの見た象徴的山に見つかる。ダニエル 2:35、44 に山は王国を象徴するとある。

「その像を撃った石は、大きな山となって全地に満ちました」ダニエル 2:35。

「それらの王たちの世に、天の神は一つの国を立てられます」ダニエル 2:44。

故に、象徴的な「頭」は同時に象徴的「山」を表し、両方とも字義どおりの王国を表す。キリストとサタンの大争闘は、王国の獲得についてである！誰が「常供」-権力の笏を確保するかということである！

黙示録 17:9、10 に、「頭」と「山」は両方とも、繰り返し強調して王国を表すことが記されている：

「七つの頭は七つの山である。...七人の王たち...」黙示録 17:9、10。

預言的象徴の特徴は、正しく解釈されるために、少なくとも二回繰り返している。（七人の王も、王国を表す）。黙示録 17:9、10 は、黙示録 13 の獣の七つの頭を解釈する鍵を与えると同時に大いなる赤い龍の象徴的「頭」も解く鍵を提供している。



ここの研究は、大いなる赤い龍の七つの頭と七つの冠についてである。過去において、またイエスの再臨の時がある終末において、更に将来、千年期の終わりに聖なる都を包囲し「常供」—権力の笏を獲得しようとするサタンの試みを理解することである。

これらの七つの頭が把握されなければ、ダニエル 12:11 の 1 2 9 0 日タイムラインを明確に理解することはできない。だから、ここで、サタンが王国を獲得しようとする七回の試み—巨大な赤い龍の七つの頭—を研究してみたい：

1. 第一の頭は何を表しているのか？
2. 第二の頭は何を表しているのか？
3. 第三の頭は何を表しているのか？
4. 第四の頭は何を表しているのか？
5. 第五の頭は何を表しているのか？
6. 第六の頭は何を表しているのか？
7. 第七の頭は何を表しているのか？
8. 七つの頭とダニエル 1 2 章のタイムラインの間にどのような関係があるか？
9. まとめ

第1部：龍の第一の頭は何を表しているのか？

サタンの「常供」—力と位と権威の笏—を奪おうとする試みは、天において始まった。彼の反逆によって天使の三分の一が奪われた。このことがまず黙示録12章に記されている：

「その尾は天の星の三分の一を掃き寄せ、それらを地に投げ落した。...この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された」黙示録12:4-9。

「サタンは...悪天使たちの心を支配する大指揮者である...」大争闘下247。

第2部：第二の頭は何を表しているのか？

サタンの「常供」—力と位と権威の笏—を奪おうとする第二の試みはエデンの園においてなされた。神が創造なさったので、地は神に属する。神はこの支配権をアダムに与えた（創世記1:20）。アダムが罪によってサタンの支配下に陥ってからは、地上の支配権をサタンにゆだねた。「法的に」強奪者はこの地上の支配と力と権威とを獲得して、地上の代表者として天の会議に出席した（ヨブ1）。彼は「この世の神」あるいは「この世の君」であると宣言した。彼は、全人類は彼の捕虜だと主張して、全宇宙に救いの計画に意義を申し立てた。一人の魂でも彼の手から救われると、彼は苦々しく不平を言った。戦いはすべての魂に関してなされる。サタンの支配下にあるか、キリストの王国の臣民となるか、どちらかである。

サタンの支配がノアの時代に成功した。神に忠誠を尽くした人々は箱船に入った。全世界から神の民を撲滅するのがサタンの意図するところであった。こうして世界支配を達成し、地球を彼の惑星として確保したかったのである。しかし、神はきわどい時に、洪水を送ってサタンの王国を滅ぼす事によって人類を救われたのである。

第3部：第三の頭とは何か？

サタンの「常供」—力と位と権威の笏（主権）を奪おうとする第三の試みは、大洪水の後しばらくしてから始まった。

「ノアの子孫は、しばらくの間、箱舟が止まった山地に住んでいた。彼らの数が増加するにつれて、まもなく背信と分裂が生じた。創造主を忘れて、神の律法の制限から脱出しようとした者らは、神を恐れる仲間の教えや模範を絶えずきらっていた。...シナルの平原に下っていった。...彼らは、ここに都市を建設し、世界の驚異となるような巨大な高塔をたてることにした。この企ては、人々が広く離散して住む事を防ぐために考案された。...バベルの建設者たちは、彼らの社会を一つの組織にし、やがて、全世界を含むに至る帝国を築こうとした。こうして、彼らの都市は、世界帝国の首都となるのであった」人あ上114。

しかし神は、全世界がそんなに早くサタンの支配のもとに置かれることを望まなかった。神は彼らの言葉を混乱させ、国々に分裂させた。こうしてサタンの目的は妨げられた（創世記）。バベルの塔が建てられたシナルの地は、ついには大バビロニア帝国となる。それは、神の民と関係した当時の文明世界の支配権を獲得した。しかし、この地上帝国が起りまた、亡んだ。神の民、ユダヤ人を紀元前606年に捕虜にし、抹消し、バビロンで滅亡させようとした時、サタンの戦略はクライマックスに達した。しかし、神

は彼らを救い出し、彼らの故郷に戻し、エルサレムにおいて神殿を建てさせた。またしても、龍の第三番目の頭は、神によって妨げられ、その目的を達成することはできなかった。

第4部：第四の頭とは何か？

サタンの「常供」一力と位と權威の笏を奪おうとする第四の試みは、王自身を捕らえることであった。もし、王を捕らえることができるなら、王国は確実に獲得される事になる。イエスのこの地上での生涯は、「常供」、すなわち王権の長い闘争であった。荒野の40日間の誘惑において、サタンは王国を獲得しようと試みたのであった：

「次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、『もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう』」マタイ4：8、9。

そして十字架は、サタンの最後の戦いであった。この「常供」王権争いが次のように描写されている：

「いま、誘惑者は、最後の恐るべき戦いのためにやってきていた。このために、サタンは、キリストの3年の公生涯のあいだ準備してきた。サタンはすべてをにかけていた。もしここで失敗すれば、支配への望みは失われるのである。この世の王国はついにキリストのものとなり、彼自身は敗北して追い出されるのである。しかし、もしキリストに打ち勝つことができれば、地はサタンの王国となり、人類は永遠に彼の権力下に置かれるのである。この戦いの結果を目の前にして、キリストの魂は、神からの隔離という恐れに満たされた。もしキリストが罪の世の保証人となられるならば、隔離は永遠のものとなり、キリストは、サタンの王国と一体となり、再び神と一つになる事がおできにならないであろうと、サタンはキリストに告げた」3希望177。

しかし、この第四番目の頭の王権争いの試みも失敗に終わった。復活後、イエスは王国獲得に成功して勝利のうちに昇天された。

第5部：龍の第五の頭は何であったか？

復活後、キリスト教会が設立された。以後1900年、神の民はヨーロッパに住むこととなった。サタンは、ヨーロッパにおいて「常供」、すなわち政治的王権を奪い、偽の制度を打ち立てる事によって、神の民を抹殺しようと試みた。この制度こそ預言で知られている「小さい角」(ダニエル7:20-25)であり、獣である(黙示録13-20)。それは、ヨーロッパを、1260年間も支配した法王至上権であり、すべての神の民を完全に撲滅しようとした権力である。しかし、サタンの支配の下に世界体制を設立しようとの第五の試みも失敗に終わる。それが失敗したのは、いつも神の言葉とつながっている人たちがいたからであった。ヨーロッパ宗教改革と、1798年に法王を捕虜にしたフランスの権力のおかげで王権獲得の計画はまったく失敗に終わった。

第6部：第六の頭は何であるのか？

我々は今、龍の第六番目の頭の時代に住んでいる。1798年に受けた致命的な傷は、今癒されつつある。「法王が権力の座にもどりつつある」。これがダニエル12章の主題である！法王至上権 No.2である！

ダニエル12：7 字義どおりの1260日間、サタンは、すべての人類が獣の刻印を受けて一つの旗の下に集まり、自分の主権に屈するように勧誘し迫害するのである。

ダニエル 12 : 11 字義どおりの 1290 日間、神の民を滅ぼすために、サタンの手下である一人の人、法王至上権 NO.2 (黙示録 13) に、地上の王たちは、その「常供」一権力をゆだねる。

ダニエル 12 : 12 字義どおりの 1335 日間、米国日曜休業令から始まって、最後の死の法令から神の民が救出されるまでである。

大いなる赤い龍の第六の頭は、今日なされようとしていることである。今は、神の民を滅ぼし、悪人たちの同意でサタンによる世界王国を設立するという過程にある。我々は、この最後をまだ見ていない。我々はほとんどその始まりも見ていない。しかし、我々は、第六の頭の試みを見るであろう。米国における日曜休業令が議会通过する時、時が満ちた事を知るであろう。

この第六の頭の下に、多くの危機的事件が起きる。日曜休業令、悩みの時 (迫害)、そしてついに第六の災いで「すべての地の王たちは」神の民に対して世界的死の法令を出す。このダニエル 12 章のタイムラインは、黙示録 16 章 (七つの災害一特に第六と第七) にはっきりとした焦点を当てている。黙示録 16、17、18 章を明確に見る事なしにダニエル 12 章を理解する事はできない。

しかし、第六番目の頭が、王権を奪おうとする試みも、またサタン自身がキリストを真似て「王の王」と宣言することも、神の声で聖徒たちが救出されるときに失敗に帰することを、我々は理解するであろう。



サタンがキリストを装う

「欺瞞の一大ドラマの最後を飾る一幕として、サタンはキリストを装うであろう。教会は、救い主の来臨を教会の望みの完成として期待していると長い間公言してきた。今や大欺瞞者は、キリストがおいでになったように見せかける。地上のあちらこちらで、サタンは、黙示録の中でヨハネが述べている神のみ子についての描写に似た、まばゆく輝く威厳ある者として人々の中に現われる（黙示録 1:13-15 参照）。彼をとりまいている栄光は、これまで人間の目が見たどんなものも及ばない。「キリストがこられた、キリストがこられた」という勝利の叫びが、空中に鳴り響く。人々が彼をあがめてその前にひれ伏すと、彼は両手をあげて、キリストが地上におられた時に弟子たちを祝福されたように、彼らに祝福を宣言する。彼の声は柔らかく穏やかで、しかも美しい調べに満ちている。やさしい同情のこもった調子で、彼は、救い主が語られたのと同じ祝福に満ちた天の真理を幾つか述べる。彼は人々の中の病人をいやし、それから、キリストらしくみせかけながら、安息日を日曜日に変えたことを主張し、すべての人に対して、自分が祝福した日を聖とするようにと命じる。彼は、あくまでも第七日をきよく守り続ける者は、光と真理とをもって彼らに遣わされたわたしの天使たちの言うことを聞かないで、わたしの名を冒瀆している者だと宣言する。これは強力な、ほとんど圧倒的な惑わしである」大争闘下 398, 399。



神の民、十四万四千は、門でひざまずかず、敬礼をしなかったモルデカイであるため、彼らはエステル王妃の時代のように世界的死の法令に直面する。彼らは、ししの穴に投げ込まれながらも天の神に仕え続けるダニエルである。「もし彼（サタン）が、彼らを地上から一掃することができるなら、彼の勝利は完全なものとなる」大争闘下 391。

第7部： 龍の第七の頭は何か？

サタンの「常供」—力と位と権威の王笏—を奪おうとする最後の試みは、千年期の終わりになされる。

「千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。彼らは地上の広い所の上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した」黙示録 20:7-9。

「常供」—王笏を奪おうとする最後の試みは、これまでのように決して成功しない。それにもかかわらず、「頭」が表している各々の試みは、神とその民に対するサタンの激しい戦いを絵に見るように、預言的に描写している。

結論

サタンの「常供」—王笏を掌握しようとする七つの試みは次のように挙げられる：

1. 天での戦い—墮落天使たちを支配
2. エデンにおける人間の墮落から洪水まで
3. バベルの塔と言葉の混乱
4. キリストの誘惑と十字架と復活
5. 法王至上権 No. 1 (538-1798)
6. 法王至上権 No. 2. これはまだ未来。これはハルマゲドンの戦いと神の声で神の民が救出される時クライマックスに達する。
7. ゴグ・マゴグの戦い—それは火の海で終わる。

ダニエル 12:11 のタイムラインは、「常供」—王笏を掌握しようとするサタンの第六の試みを描いている。彼は、まず地の王たちから主権を取り上げ、この地上での彼の代表者—「荒らす憎むべきもの」に与え、それから「王の王」としてのキリストを装い、冠と王笏を手に取り、ついに王国を獲得したかのように振舞う。

第八部： 黙示録 12 章とダニエル 12 章にどんな関係があるか？

黙示録 12 章の大いなる赤い龍の七つの頭は、サタンが大争闘を展開するに際して、その性質と目的を細かく説明している。彼の性質は、迫害し、破壊し(特に、神の民を)、この地球に彼の世界帝国を確立する事である。全宇宙に、この地球は「法的に」自分のものだと言明するために、地上の住民の一致した同意を得ることが彼の目的である。そのためには、神の民を滅ぼさなければならない。終わりの時に、神の民を迫害する事がダニエル 12 章のタイムラインの主題である。

サタンの性質と目的は、聖書に次のように記されている：

「生まれたなら、その子を食い尽くそうとかまえていた」黙示録 12:4。
「女を追いかけた」黙示録 12:13。

「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いを挑むために、出ていった」黙示録 12:17。

「神の戒めとイエスの信仰を持つ者」(黙示録 14:12)に対して戦いをいどむ。

「龍は自分の[常供]一カと位と大いなる権威とをその獣に与えた」黙示録 13:3,4。

「彼は聖徒たちに戦いを挑んでこれに勝つことを許され」黙示録 13:7。

「この刻印のない者はみな、物を買うことも売る事もできないようにした」黙示録 13:17。

「その獣を拝まない者をみな殺させた」黙示録 13:15。

「聖なる民の力を打ち砕く(迫害、破壊する)時に、これらの事はみな成就する」ダニエル 12:7。

「荒らす(迫害)憎むべきものが立てられる時から、」ダニエル 12:11。

「待つ者は幸い(祝福)である」ダニエル 12:12。

七つの頭を通して世界帝国をつくり、ついにはキリストを装って「王の王」として支配しようとするが、十四万四千には触れることができない。彼らは神の声で救出されるのである。ダニエル 12 章に描写されている、近い将来の彼のもくろみは、過去にそうであったように、決して成功しない。



付録 C

ダニエル 12 章に関する追加説明

エレン・G. ホワイトは、ダニエル 11:30-36 は未来を意味していると言っている。それは過去における (538-1798) 法王教の起こりを描写しているが、黙示録 13 章に描かれているように、法王至上権 No. 2 が再び起こる時に、「この預言の多くは、未来に繰り返される」ことになる。

「預言によって語られている悩みの光景がまもなく起ころうとしている。ダニエル 11 章の預言はほとんど完全な成就を見ている。この預言の成就として起こった歴史の多くは、また繰り返されるであろう。『彼はキツテムの船が、彼に立ち向かって来るので、彼は脅かされて帰り、聖なる契約に対して憤り、事を行うでしょう。彼は帰って行って、聖なる契約を捨てる者を顧み用いるでしょう。彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し、常供の燔祭を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう』（11:30~36 まで続けて引用）。これらの言葉に描写されている同じような光景が起こるであろう」 Letter 103, 1904 (Published in RH July 8, 1976)。

次に示すダニエル 11:30-35 とダニエル 12:4、6-13 の比較表は、文脈、言葉がよく似ている事を表している。この二箇所の聖句は間違いなく関係している。もしダニエル 11:30-35 が未来に関係しているなら、ダニエル 12:6-13 もその成実は未来に属するはずである：

ダニエル 11:31	「常供の燔祭を取り除き」
ダニエル 12:11	「常供の燔祭が取り除かれ」
ダニエル 11:31	「荒らす憎むべきものを立てるでしょう」
ダニエル 12:11	「荒らす憎むべきものが立てられる時から」
ダニエル 11:35	「賢い者のある者は」
ダニエル 12:10	「賢い者は」
ダニエル 11:35	「定まった時」
ダニエル 12:7	「時」
ダニエル 11:35	「終わりの時の来るまで」
ダニエル 12:9	「終わりの時まで」
ダニエル 11:35	「自分を練り、清め、白くするために」
ダニエル 12:10	「自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう」
ダニエル 12:4	「ダニエルよ、あなたは終わりの時までこの言葉を秘し、封じて」
ダニエル 12:9	「終わりの時まで秘し、かつ封じておられます」

ダニエル 11:30-35 の「終わり」(7093) とダニエル 12:4 の「終わり」(7093) は、ダニエル 12:6「終わり」(7093)、ダニエル 12:9 の「終わり」(7093)、ダニエル 12:13 の「終わりまで」(7093) に現れてくる。

ダニエル 12:4、6、9、13 にある「終わり」という言葉は、同じストロング・コンコルダンスの “7093” の言葉である。7093 のヘブル語の意味は「定められた時」である。Mo'ed のように、あるいは聖な

る祭りのように「定められた時」という意味がある。ヘブルの制度は、我々にとって多くの教訓に満ちている。予型としての祭りの研究は、1260日、1290日、1335日のタイムライン「時刻表」の始めと終わりが、イスラエルの祭りの祝祭日と調和することをあらわしている。この問題の研究に関しては、著者の「ダニエル書、黙示録の総括的理解」を参照していただきたい。英文の資料の欲しい方は、最終ページをご覧ください。

ダニエル 8:16 の水の上の人

ダニエル 12:7 の水の上の人は、調査審判中（1844年以後）のキリストである事は明らかである。ダニエル 8:16 にも水の上の人について描写している：

「わたしはウライ川の両岸の間から人の声が出て、呼ばれるのを聞いた、『ガブリエルよ、この幻をその人に悟らせよ』」ダニエル 8:16。

次の考察から両岸の間(水の上)の人を明らかにする事ができる：

1. 両岸の間の方は、ガブリエルではないことは明らかである。
2. 水の上の方は、ガブリエルよりも優れた方である。なぜなら、その方が彼に命令を与えておられるからである。
3. ガブリエルは、覆いのケルビムであるから、彼より優れた方とは、神格のお一人で、キリストである。
4. 従って、川の方は、キリストに違いない。
5. その方は水の上(両岸の間)におられたという事実は、その方はキリストであられたことを意味する。



ダニエル 11章と12章の比較表

11章

11:30 それはキツテムの船が、彼に立ち向かって来るので、彼は脅かされて帰り、聖なる契約に対して憤り、事を行うでしょう。彼は帰って行って、聖なる契約を捨てる者を顧み用いるでしょう。

11:31 彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し、常供の燔祭を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう。

11:32 彼は契約を破る者どもを、巧言をもってそそのかし、そむかせるが、自分の神を知る民は、堅く立って事を行います。

11:33 民のうちの賢い人々は、多くの人を悟りに至らせます。それでも、彼らはしばらくの間、やいばにかかり、火に焼かれ、捕われ、かすめられなどして倒れます。

11:34 その倒れるとき、彼らは少しの助けを獲ます。また多くの人、巧言をもって彼らにくみするでしょう。

11:35 また賢い者のうちのある者は、終りの時まで、自分を練り、清め、白くするために倒れるでしょう。終りはなお定まった時の来るまでこないからです。

ダニエル 12

12:4 ダニエルよ、あなたは終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい。多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう。

12章

12:5 そこで、われダニエルが見ていると、ほかにまたふたりの者があって、ひとりは川のこなたの岸に、ひとりは川のかなたの岸に立っていた。

12:6 わたしは、かの亜麻布を着て川の水の上にいる人にむかって言った、「この異常なできごとは、いつになって終るでしょうか」と。

12:7 かの亜麻布を着て、川の水の上^にいた人が、天に向かって、その右の手と左の手をあげ、永遠に生ける者をさして誓い、それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろうと言うのを、わたしは聞いた。

12:8 わたしはこれを聞いたけれども悟れなかった。わたしは言った、「わが主よ、これらの事の結末はどんなでしょうか」。

12:9 彼は言った、「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。この言葉は終りの時まで秘し、かつ封じておかれます。

12:10 多くの者は、自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう。しかし、悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう。

12:11 常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、千二百九十日が定められている。

12:12 待っていて千三百三十五日に至る者はさいわいです。

付録D

NELLIE HICKEY LETTER FROM WHITE ESTATE

Ellen G. White Estate, Inc.
Proprietor of
ELLEN G. WHITE
PUBLICATIONS



General Conference
of Seventh-day Adventists
6840 Eastern Avenue, NW
Washington, D.C. 20012
Phone (202) 291-2100, Telex 44 186

January 8, 1987

Ms. Nellie Hickey
Route 1, Box 122
Hardinsburg, IN 47125

Dear Sister Hickey:

Thank you for your recent letter to our office. The passage in Early Writings to which you refer is found on pages 74 and 75. Ellen White makes the statement there that "the Lord gave the correct view of it [the daily] to those who gave the judgment hour cry." I do not believe she ever singled out O. R. L. Crosier concerning his views on the daily, but rather, the consensus of opinions held by those giving the first angel's message in 1843-1844.

I have enclosed a photocopy from L. F. Froom's Prophetic Faith of Our Fathers, Vol. 4, that gives the interpretations of the principal Millerite leaders, and you will readily see that the consensus was that it represented Roman paganism.

In view of the fact that Ellen White later stated that she had no light on the correct interpretation of the "daily" (see The Later Elmshaven Years, chapter 19), many understand this Early Writings statement to refer to the danger of time-setting, that this is the thrust of her vision, rather than a specific view or interpretation of the daily. At least her statement in 1910, now in Selected Messages, book 1, p. 164, suggests that she did not feel the question should be decided by any reference to her writings.

If we can be of any further help to you on this matter, please let us know.

Sincerely yours,



Tim Poirier
Assistant to the Secretary

TP:ldl
Enclosure

FROMM CHART ON DAILY #1

DANIEL: LEADING POSITIONS OF PRINCIPAL MILLERITE

No.	Page	Name	BARRIS 1		BARRIS 2		BARRIS 3		BARRIS 4		BARRIS 5		BARRIS 6		BARRIS 7		BARRIS 8		BARRIS 9		BARRIS 10		BARRIS 11		BARRIS 12		BARRIS 13		BARRIS 14		BARRIS 15																																																																																																																																																																																																																																			
			1844-1845	1845-1846	1846-1847	1847-1848	1848-1849	1849-1850	1850-1851	1851-1852	1852-1853	1853-1854	1854-1855	1855-1856	1856-1857	1857-1858	1858-1859	1859-1860	1860-1861	1861-1862	1862-1863	1863-1864	1864-1865	1865-1866	1866-1867	1867-1868	1868-1869	1869-1870	1870-1871	1871-1872	1872-1873	1873-1874	1874-1875	1875-1876	1876-1877	1877-1878	1878-1879	1879-1880	1880-1881	1881-1882	1882-1883	1883-1884	1884-1885	1885-1886	1886-1887	1887-1888	1888-1889	1889-1890	1890-1891	1891-1892	1892-1893	1893-1894	1894-1895	1895-1896	1896-1897	1897-1898	1898-1899	1899-1900	1900-1901	1901-1902	1902-1903	1903-1904	1904-1905	1905-1906	1906-1907	1907-1908	1908-1909	1909-1910	1910-1911	1911-1912	1912-1913	1913-1914	1914-1915	1915-1916	1916-1917	1917-1918	1918-1919	1919-1920	1920-1921	1921-1922	1922-1923	1923-1924	1924-1925	1925-1926	1926-1927	1927-1928	1928-1929	1929-1930	1930-1931	1931-1932	1932-1933	1933-1934	1934-1935	1935-1936	1936-1937	1937-1938	1938-1939	1939-1940	1940-1941	1941-1942	1942-1943	1943-1944	1944-1945	1945-1946	1946-1947	1947-1948	1948-1949	1949-1950	1950-1951	1951-1952	1952-1953	1953-1954	1954-1955	1955-1956	1956-1957	1957-1958	1958-1959	1959-1960	1960-1961	1961-1962	1962-1963	1963-1964	1964-1965	1965-1966	1966-1967	1967-1968	1968-1969	1969-1970	1970-1971	1971-1972	1972-1973	1973-1974	1974-1975	1975-1976	1976-1977	1977-1978	1978-1979	1979-1980	1980-1981	1981-1982	1982-1983	1983-1984	1984-1985	1985-1986	1986-1987	1987-1988	1988-1989	1989-1990	1990-1991	1991-1992	1992-1993	1993-1994	1994-1995	1995-1996	1996-1997	1997-1998	1998-1999	1999-2000	2000-2001	2001-2002	2002-2003	2003-2004	2004-2005	2005-2006	2006-2007	2007-2008	2008-2009	2009-2010	2010-2011	2011-2012	2012-2013	2013-2014	2014-2015	2015-2016	2016-2017	2017-2018	2018-2019	2019-2020	2020-2021	2021-2022	2022-2023	2023-2024	2024-2025	2025-2026	2026-2027	2027-2028	2028-2029	2029-2030	2030-2031	2031-2032	2032-2033	2033-2034	2034-2035	2035-2036	2036-2037	2037-2038	2038-2039	2039-2040	2040-2041	2041-2042	2042-2043	2043-2044	2044-2045	2045-2046	2046-2047	2047-2048	2048-2049	2049-2050	2050-2051	2051-2052	2052-2053	2053-2054	2054-2055	2055-2056	2056-2057	2057-2058	2058-2059	2059-2060	2060-2061	2061-2062	2062-2063	2063-2064	2064-2065	2065-2066	2066-2067	2067-2068	2068-2069	2069-2070	2070-2071	2071-2072	2072-2073	2073-2074	2074-2075	2075-2076	2076-2077	2077-2078	2078-2079	2079-2080	2080-2081	2081-2082	2082-2083	2083-2084	2084-2085	2085-2086	2086-2087	2087-2088	2088-2089	2089-2090	2090-2091	2091-2092	2092-2093	2093-2094	2094-2095	2095-2096	2096-2097	2097-2098	2098-2099	2099-2100
1	49	Wm. Miller	1844-1845	1845-1846	1846-1847	1847-1848	1848-1849	1849-1850	1850-1851	1851-1852	1852-1853	1853-1854	1854-1855	1855-1856	1856-1857	1857-1858	1858-1859	1859-1860	1860-1861	1861-1862	1862-1863	1863-1864	1864-1865	1865-1866	1866-1867	1867-1868	1868-1869	1869-1870	1870-1871	1871-1872	1872-1873	1873-1874	1874-1875	1875-1876	1876-1877	1877-1878	1878-1879	1879-1880	1880-1881	1881-1882	1882-1883	1883-1884	1884-1885	1885-1886	1886-1887	1887-1888	1888-1889	1889-1890	1890-1891	1891-1892	1892-1893	1893-1894	1894-1895	1895-1896	1896-1897	1897-1898	1898-1899	1899-1900	1900-1901	1901-1902	1902-1903	1903-1904	1904-1905	1905-1906	1906-1907	1907-1908	1908-1909	1909-1910	1910-1911	1911-1912	1912-1913	1913-1914	1914-1915	1915-1916	1916-1917	1917-1918	1918-1919	1919-1920	1920-1921	1921-1922	1922-1923	1923-1924	1924-1925	1925-1926	1926-1927	1927-1928	1928-1929	1929-1930	1930-1931	1931-1932	1932-1933	1933-1934	1934-1935	1935-1936	1936-1937	1937-1938	1938-1939	1939-1940	1940-1941	1941-1942	1942-1943	1943-1944	1944-1945	1945-1946	1946-1947	1947-1948	1948-1949	1949-1950	1950-1951	1951-1952	1952-1953	1953-1954	1954-1955	1955-1956	1956-1957	1957-1958	1958-1959	1959-1960	1960-1961	1961-1962	1962-1963	1963-1964	1964-1965	1965-1966	1966-1967	1967-1968	1968-1969	1969-1970	1970-1971	1971-1972	1972-1973	1973-1974	1974-1975	1975-1976	1976-1977	1977-1978	1978-1979	1979-1980	1980-1981	1981-1982	1982-1983	1983-1984	1984-1985	1985-1986	1986-1987	1987-1988	1988-1989	1989-1990	1990-1991	1991-1992	1992-1993	1993-1994	1994-1995	1995-1996	1996-1997	1997-1998	1998-1999	1999-2000	2000-2001	2001-2002	2002-2003	2003-2004	2004-2005	2005-2006	2006-2007	2007-2008	2008-2009	2009-2010	2010-2011	2011-2012	2012-2013	2013-2014	2014-2015	2015-2016	2016-2017	2017-2018	2018-2019	2019-2020	2020-2021	2021-2022	2022-2023	2023-2024	2024-2025	2025-2026	2026-2027	2027-2028	2028-2029	2029-2030	2030-2031	2031-2032	2032-2033	2033-2034	2034-2035	2035-2036	2036-2037	2037-2038	2038-2039	2039-2040	2040-2041	2041-2042	2042-2043	2043-2044	2044-2045	2045-2046	2046-2047	2047-2048	2048-2049	2049-2050	2050-2051	2051-2052	2052-2053	2053-2054	2054-2055	2055-2056	2056-2057	2057-2058	2058-2059	2059-2060	2060-2061	2061-2062	2062-2063	2063-2064	2064-2065	2065-2066	2066-2067	2067-2068	2068-2069	2069-2070	2070-2071	2071-2072	2072-2073	2073-2074	2074-2075	2075-2076	2076-2077	2077-2078	2078-2079	2079-2080	2080-2081	2081-2082	2082-2083	2083-2084	2084-2085	2085-2086	2086-2087	2087-2088	2088-2089	2089-2090	2090-2091	2091-2092	2092-2093	2093-2094	2094-2095	2095-2096	2096-2097	2097-2098	2098-2099	2099-2100

1844 Leaders listed in Publishing 26 Month Position, 1846-1848 in Great Tentative of 2000, and 1855-1857 in "Liber" of 7th Week!

Careful analysis of this tabular chart, made by following the lines through, both vertically and horizontally, results in certain inevitable conclusions: (1) There was greater unity of belief among the leaders of the North American Advent Movement than in the Old World Advent Awakening that slightly preceded it. (2) Tabular charts, Vol. III, pp. 744, 745. (3) There was startling similarity between the positions of Miller and his associates and those of many contemporary expositors in both the New World and the Old, including many of the most learned and illustrious interpreters of post-Reformation Reformation times. There was even striking similarity to certain early church teachings.

The general conclusion seems inescapable that the Millerites did not introduce new and strange interpretations. Every position they held was previously taught by other recognized scholars. They simply revived and unitedly stressed the standard, orthodox positions of past and contemporary writers. Specifically, they held the standard, established Historical School interpretation of the outline prophecies of Daniel 2, 7, 8, and 11. Their list of the divisions of the Roman fourth empire was what scores, if not hundreds, of others had used. They applied the composite prophetic symbols of Antichrist, to the Papacy—Antichrist, Man of sin, Son of Perdition, Mystery of Iniquity, Little Horn, Beast, Babylon, and Harlot. They were supported by hundreds of predecessors in applying the year-day principle to all the prophetic time periods of Daniel—the 1260, 1290, 1335, and 2300 year-days.

Her years, who, with her parents, had been distellowshipped from the Methodist Church because of espousing the second advent views of the Millerites—had begun to display a singular spirit-

No.	Page	Name	BARRIS 1		BARRIS 2		BARRIS 3		BARRIS 4		BARRIS 5		BARRIS 6		BARRIS 7		BARRIS 8		BARRIS 9		BARRIS 10		BARRIS 11		BARRIS 12		BARRIS 13		BARRIS 14		BARRIS 15																																																																																																																																																																																													
			1844-1845	1845-1846	1846-1847	1847-1848	1848-1849	1849-1850	1850-1851	1851-1852	1852-1853	1853-1854	1854-1855	1855-1856	1856-1857	1857-1858	1858-1859	1859-1860	1860-1861	1861-1862	1862-1863	1863-1864	1864-1865	1865-1866	1866-1867	1867-1868	1868-1869	1869-1870	1870-1871	1871-1872	1872-1873	1873-1874	1874-1875	1875-1876	1876-1877	1877-1878	1878-1879	1879-1880	1880-1881	1881-1882	1882-1883	1883-1884	1884-1885	1885-1886	1886-1887	1887-1888	1888-1889	1889-1890	1890-1891	1891-1892	1892-1893	1893-1894	1894-1895	1895-1896	1896-1897	1897-1898	1898-1899	1899-1900	1900-1901	1901-1902	1902-1903	1903-1904	1904-1905	1905-1906	1906-1907	1907-1908	1908-1909	1909-1910	1910-1911	1911-1912	1912-1913	1913-1914	1914-1915	1915-1916	1916-1917	1917-1918	1918-1919	1919-1920	1920-1921	1921-1922	1922-1923	1923-1924	1924-1925	1925-1926	1926-1927	1927-1928	1928-1929	1929-1930	1930-1931	1931-1932	1932-1933	1933-1934	1934-1935	1935-1936	1936-1937	1937-1938	1938-1939	1939-1940	1940-1941	1941-1942	1942-1943	1943-1944	1944-1945	1945-1946	1946-1947	1947-1948	1948-1949	1949-1950	1950-1951	1951-1952	1952-1953	1953-1954	1954-1955	1955-1956	1956-1957	1957-1958	1958-1959	1959-1960	1960-1961	1961-1962	1962-1963	1963-1964	1964-1965	1965-1966	1966-1967	1967-1968	1968-1969	1969-1970	1970-1971	1971-1972	1972-1973	1973-1974	1974-1975	1975-1976	1976-1977	1977-1978	1978-1979	1979-1980	1980-1981	1981-1982	1982-1983	1983-1984	1984-1985	1985-1986	1986-1987	1987-1988	1988-1989	1989-1990	1990-1991	1991-1992	1992-1993	1993-1994	1994-1995	1995-1996	1996-1997	1997-1998	1998-1999	1999-2000	2000-2001	2001-2002	2002-2003	2003-2004	2004-2005	2005-2006	2006-2007	2007-2008	2008-2009	2009-2010	2010-2011	2011-2012	2012-2013	2013-2014	2014-2015	2015-2016	2016-2017	2017-2018	2018-2019	2019-2020	2020-2021	2021-2022	2022-2023	2023-2024	2024-2025	2025-2026	2026-2027	2027-2028	2028-2029	2029-2030	2030-2031	2031-2032	2032-2033	2033-2034	2034-2035	2035-2036	2036-2037	2037-2038	2038-2039	2039-2040	2040-2041	2041-2042	2042-2043	2043-2044	2044-2045	2045-2046	2046-2047	2047-2048	2048-2049	2049-2050	2050-2051	2051-2052	2052-2053	2053-2054	2054-2055	2055-2056	2056-2057	2057-2058	2058-2059	2059-2060	2060-2061	2061-2062

The Song of Solomon

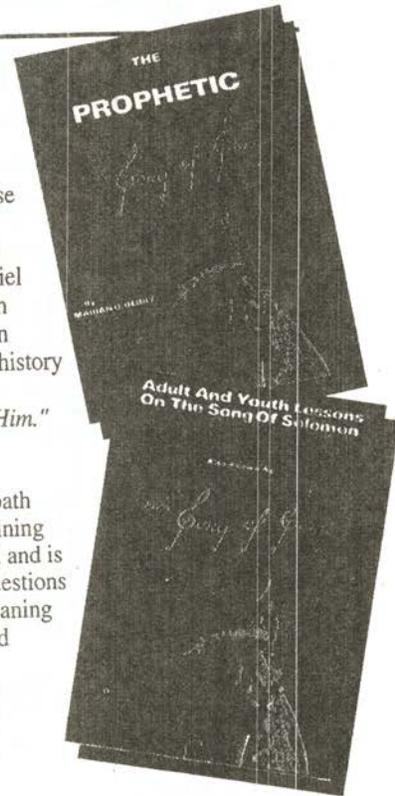
THE PROPHEPIC SONG OF SONGS

A commentary and textbook on the Song of Solomon. A verse by verse, phrase by phrase, word by word linguistic study; a "Literal Approach" to prophetic symbolism. The figurative language is decoded (interpreted) by the Isaiah 28 principle of cross reference. This approach links the Song of Solomon to Daniel and Revelation as a prophetic triad. It reveals God's true church as a "bride" in seven historical periods similar to that of Revelation. It is prophetic exposition consistent with that of the Historicist "school" of interpretation and links past history with end-time events still in the future, with clear portrayal of final crisis and deliverance. It is a cry, "Behold, the Bridegroom cometh, go ye out to meet Him."

ADULT AND YOUTH LESSONS ON THE SONG OF SOLOMON

A guide to the study of the Song of Solomon--equivalent to a large print Sabbath School Quarterly ideal for Sabbath School groups and personal study. Containing thirteen lessons, it may be used as an alternative quarterly for Sabbath School and is also useful as a guide to prayer meeting studies or individual study. By its questions and references, aligning with the **Great Controversy**, it is intended to give meaning to the Song of Solomon so that it takes its rightful place among the sacred and edifying books of Holy Scripture.

Prophetic Song of Songs.....	\$15.00
Adult and Youth Lessons.....	5.00
Sold as a Set.....	18.00



"THE DRAMA OF THE SONG OF SONGS"

VHS/Video 90 minutes. Narrated by LaVerne Tucker, Search Telecast of the Quiet Hour. This beautiful production reveals the visual imagery of the Song of Solomon. As the drama moves from scene to scene the actors on stage reveal the longing of the bride for the coming of the bridegroom.\$20.00

Order books and videos from Specialty Book Supply by calling 1-800-673-3742 or by mail:

Specialty Book Supply
P.O. Box 561 • Brushton, NY 12916-0561

"THE DRAMA OF THE SONG OF SONGS" MULTIMEDIA PROGRAM

Presented by Marian Berry or other speakers. This wide screen 27" program is presented in larger churches and auditoriums in a 48-minute automated production. Appropriate for the worship hour on Sabbath 11:00 a.m. to Noon. Available for camp meeting seminar and for a last night grand finale. The multimedia program must be presented in a darkened auditorium or at night after sundown. Complete with music and narration. Reimbursement includes travel mileage and host accommodation. Appointments made by calling: (515) 932-2717 or write to *The Prophetic Song of Songs, Inc.*, Route 5, Box 272, Albia, IA 52531-9374.

ENDTIME SEMINAR

The Song of Solomon presentations can be included as a part of the *Endtime Seminar* presentations, see the following advertisement for more information.

THE PROPHETIC
Song of Songs
INC.

Materials & Services

WARNING! in the 1260, 1290, 1335 day timelines of Daniel 12.

Let us read and study the 12th chapter of Daniel and watch the "unrolling of the scroll" as history moves into ENDTIME FINAL CRISIS AND DELIVERANCE of God's people, fulfilling the three timelines of Daniel 12. A source book of vital information and an application appropriate to Daniel 12. This book is a resumé of vital Hermeneutic principles which guide and guard the Bible student into meaningful understanding of prophecy intended for the end time. It integrates Matthew 24, Daniel and Revelation into a clear picture of endtime events.

Book price\$15.00



DANIEL 12 - VHS Video in two cassettes

A study by the author explaining the three timelines of Daniel 12 - the 1260, 1290, 1335 days.

Video.....\$30.00

GETTING IT ALL TOGETHER

A study of Daniel and Revelation which emphasizes endtime events and the interlocking and reinforcing interaction between the timelines of Daniel and Revelation. Its strength lies in the fact that it permits the scriptures to be its own expositor in regard to plagues, trumpets and seals. Revelation 17 becomes the key to understanding crisis at the very end which brings about the voice of God deliverance. This book is unique, the only one of its kind which treats all these prophetic visions and timelines with an endtime application.

Book price\$20.00



"GETTING IT ALL TOGETHER" VHS Video cassettes (four in a set)

These cassettes cover Hermeneutic guidelines, warnings against Jesuit techniques, misuse of prophetic utterance; explanations of plagues, trumpets and seals and comments on the Song of Solomon.

Video set.....\$65.00

Order books and videos from Specialty Book Supply by calling 1-800-673-3742 or by mail:

Specialty Book Supply
P.O. Box 561 • Brushton, NY 12916-0561

"GETTING IT ALL TOGETHER" ENDTIME SEMINAR

Given by Marian G. Berry. This seminar encompasses studies on Daniel, Revelation, the Song of Solomon and other endtime prophecies. The session is usually held over a weekend, but the timing is adaptable.

Reimbursement for travel and accommodations are requested. Large charts, handouts and other materials are available on request.

Consult with Marian G. Berry by calling: (515) 932-2717 or write to:

The Prophetic Song of Songs, Inc., Route 5, Box 272, Albia, Iowa 52531-9374.

THE PROPHETIC
Song of Songs
 INC.

ROUTE 5, BOX 272
 ALBIA, IOWA 52531-9374
 (515) 932-2717

ORDER FORM

Mail to:
SPECIALTY BOOK SUPPLY
 P.O. Box 561
 Brushton, NY 12916-0561

OR CALL:
 1-800-673-3742

The Prophetic Song of Songs textbook @ \$15 each.

The Adult and Youth Lessons on Song of Songs @ \$5 each. (these two are packaged as a set)

NO OF ITEMS	DESCRIPTION	COST	TOTAL
	The Prophetic Song of Songs textbook & lesson (above)	\$18 set	
	VHS Video cassette - Song of Songs drama	\$20 each.	
	WARNING! in the 1260, 1290, 1335 day timelines of Daniel 12 - textbook	\$15 each.	
	WARNING! - Daniel 12 VHS video set of 2 cassettes	\$35 set.	
	GETTING IT ALL TOGETHER textbook	\$20 each.	
	GETTING IT ALL TOGETHER VHS video (set of four)	\$65 set.	
	Total amount enclosed		

I AM ENCLOSING _____ money order _____ personal check (please do not send cash)

PLEASE PRINT CLEARLY

Name: _____
 Street or Route Number: _____
 Street Name: _____
 City: _____
 State: _____
 Zip Code: _____
 Telephone: () _____

Terms: Materials are postage paid in the U.S.A. Materials sent by air and to Canada and all items for overseas shipment must include extra postage with order. Please call for an approximate estimate of the weight of your order. Inquire at your Post Office for the appropriate amount to enclose with your order.